

風俗奇譚

〈男女性風俗の粒より話題の研究〉

昭和三十五年四月二十日印刷 第一巻 第五号
昭和三十五年五月一日発行 (毎月一編 日発行)

耽美法悦特集



特集 同性愛

5

風俗奇譚

耽美法悦特集

風俗奇譚 昭和三十五年四月二十日印刷 第一巻 第五号
昭和三十五年五月一日発行 (毎月一編 日発行)



5

定価 200円



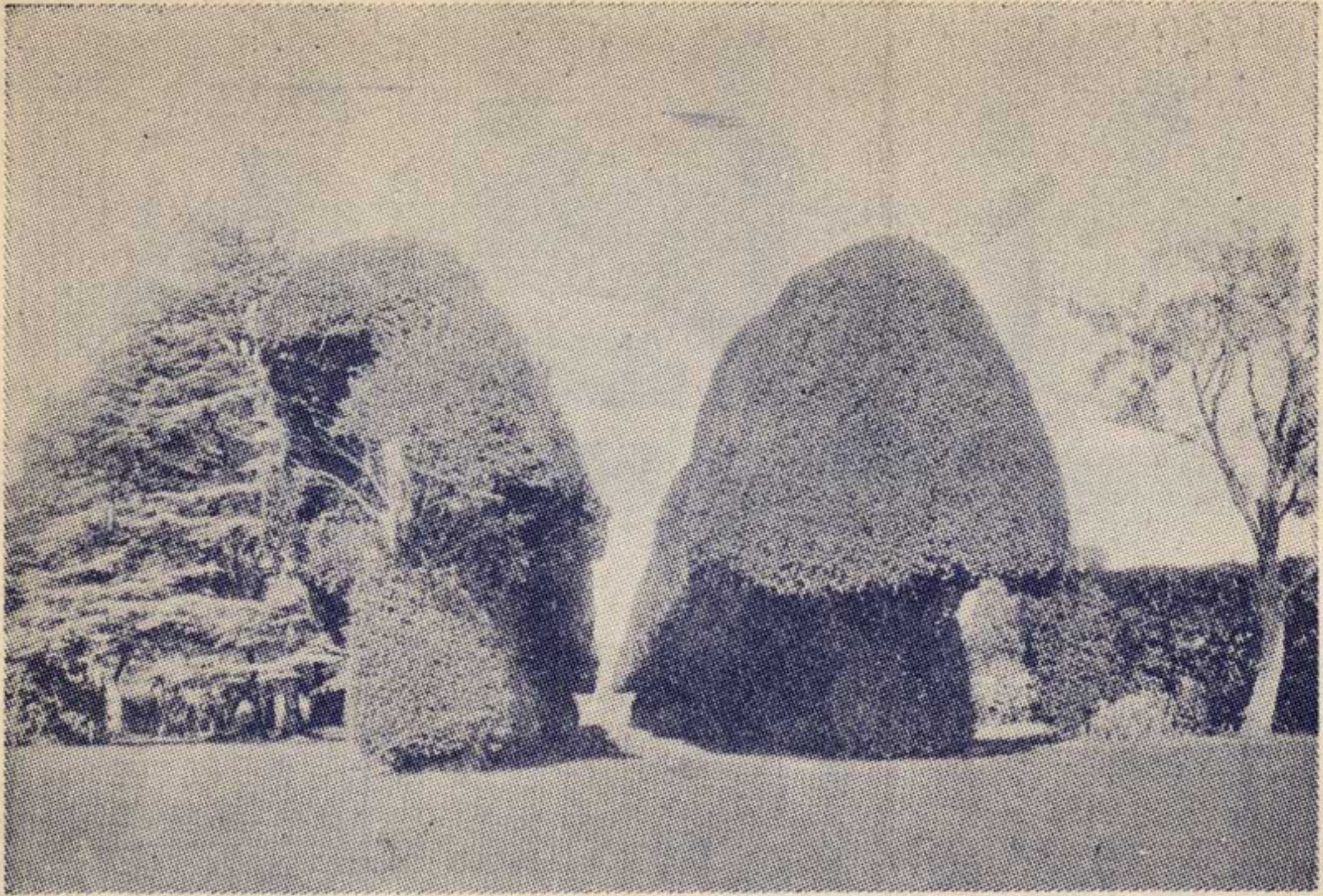
船出合（水の上なら人目もないし、嬉しい首尾もたつぷりと）

同 順 筆



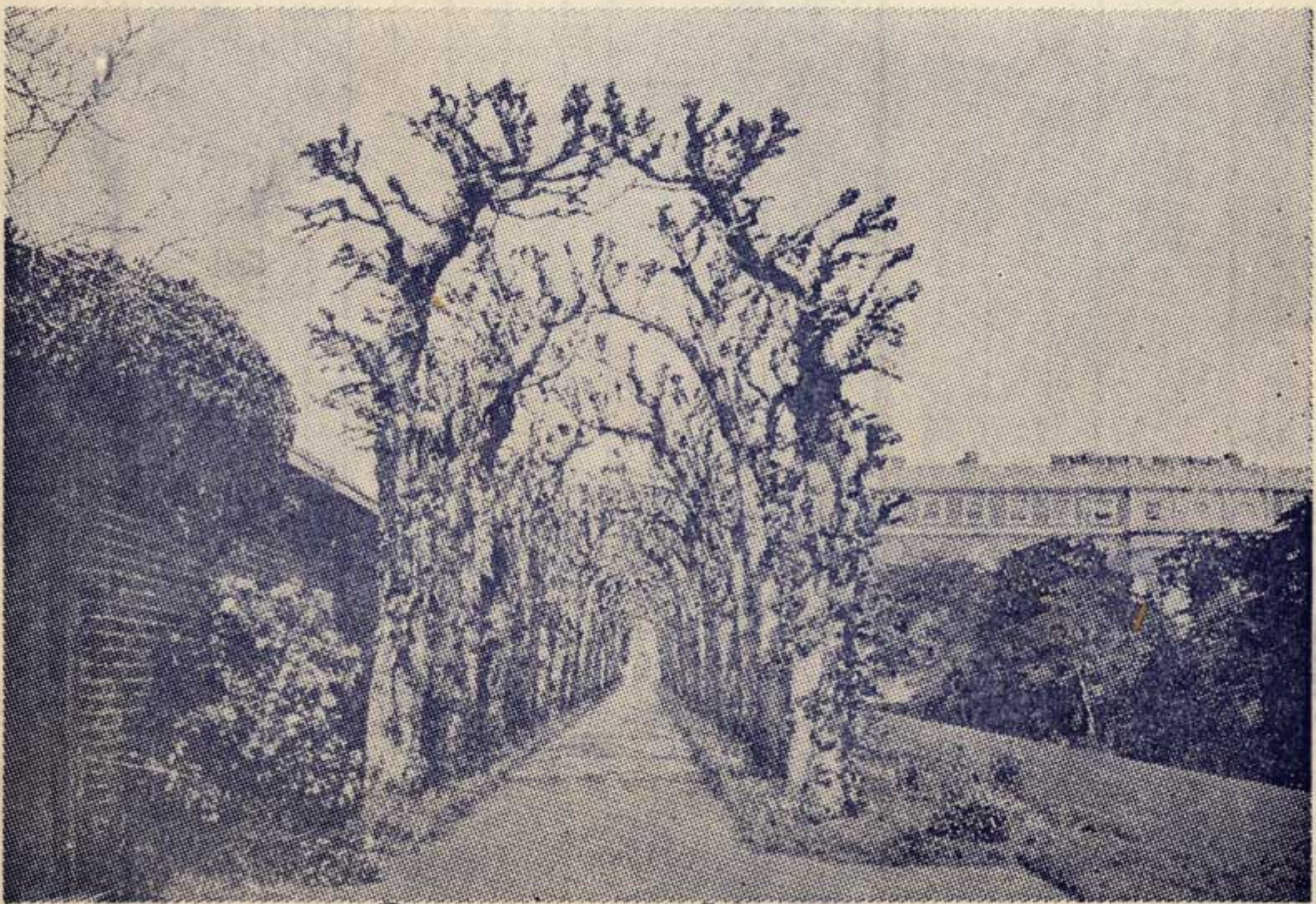
風呂場（湯上がりの肌をつつむ手もいそいそと、待つ人のもとへ）

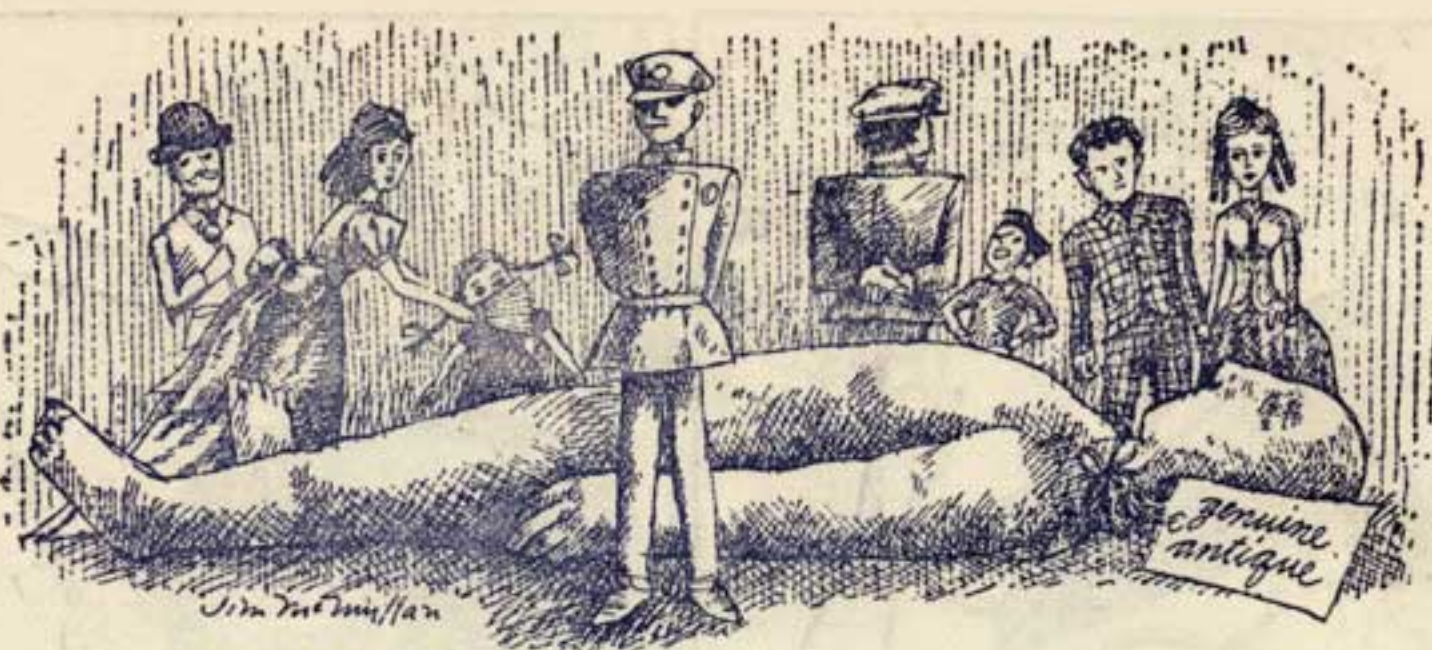
鈴木春信筆



男性の木と女性並木

イギリスのハンプレドンのユーデンにある水
松(上)とメリー皇后の東屋南正面の並木(下)





(折込み口絵) 空中人魚……………(一七)	(口絵) ルーベンスの名画にみる恋態性欲……………(一七)	(口絵) 絵女と動物……………(一八)	風呂場・船出合い……………(表紙裏)	男性の木と女性並木……………(目次裏)
捕われの人魚……………(二二)	艶肌受縛……………(二〇)	裸体緊縛……………(二四)	椅子責め……………(三三)	女が縛られる時……………(二六)
悦虐の妖美……………(二六)	痛ましき犠牲……………(二八)	悦虐の妖美……………(二六)	悦虐の妖美……………(二六)	悦虐の妖美……………(二六)

特集 同性愛……………(三)

同性愛の種類と実際……………大達 欣治(三)	女性的男子の恋慕手記……………湯浅 重二(四)	同性愛少年が殺人を犯すまで……………城戸 義一(四)	戦国武将たちの同性愛……………高林 信吾(四)	尻掘り番頭……………花島 清次(五)	白い肌同士の陶醉……………神山 孝吉(五)	マゾッホの被虐待契約書……………間瀬 照夫(六)	女の切腹 — その心理を分析する……………小仏 京太(八)
------------------------	-------------------------	----------------------------	-------------------------	--------------------	-----------------------	--------------------------	-------------------------------

野獣の夜……………津木 狂介(二七)	マゾヒストの美酒……………真崎 伸一(二七)	ベルトの魅惑……………柏村 みどり(二八)	深夜の殺人ショー……………七村 次郎(二四)	女だけに加えられる拷問……………雪 俊 遙(七)
--------------------	------------------------	-----------------------	------------------------	--------------------------

幽霊と恋愛し結婚した人々……………若月 泰明(七)	性的イレズミ考……………千石 仙太郎(六)	明治性的珍聞史(4)……………(二二)	ハレムの残虐物語……………染井 恵一郎(二三)	混線結婚……………佐野 和彦(九)	女の肉を食べた男……………新川 勇二(二〇)	女の肌を書いたカミソリ文字……………高島 伸六(二四)	サディストの餌食となった美女……………ビル・マーカス(八)	▼絵姿フェチズム……………渡川 久(六)	▼危険な会話……………クロース・アルノ(二五)
---------------------------	-----------------------	---------------------	-------------------------	-------------------	------------------------	-----------------------------	-------------------------------	----------------------	-------------------------

吹上佐太郎の性の異常遍歴……………神保 健三(二五)



ブランコ

ブランコがゆれて、スカートがひるがえる。下ばきがすっかり丸見えになる。見とれる紳士の上から、女の肉体が降る。(ヘロード筆)



空中人魚

空中に高々とくくられ、泳ぐにも身の自由を奪われた、可憐な人魚。あえぎ、身もたえ、はねようとも、いましめの綱はギリギリと肌に食いこみ、堅くとらえて、逃げる術もない。裸身は空中にむき出しのまま、いつか一つの恍惚をよぶ。

女と動物

女は動物を可愛がる、愛玩物として、また性の対象として、女と蛇、女と犬、女と狐、などなど、何かしら伝承は数多い。女は動物のセックスに誘われているからだ。



捕われの人魚

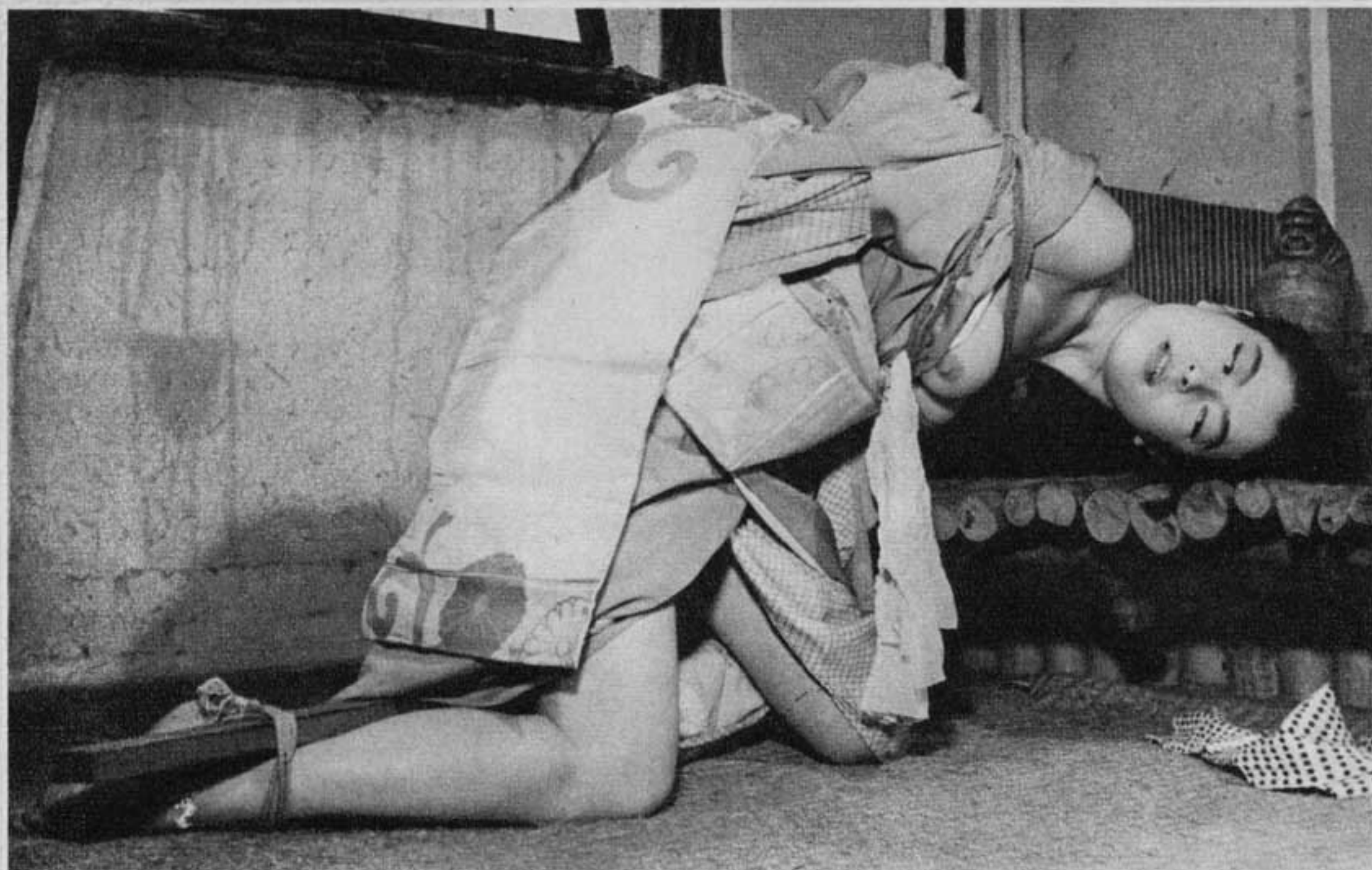


寢室に吹く一時ならぬ嵐
あわれ 美女は
白肌を 縛り上げられ
身を もたえる
あるいは 狭い押入れに
閉じこめられて
あきらめの目を ふさぐ



あたしは 捕われの人魚 ゴロリと転がされ
マナイタの鯉のように 次の処刑を待っている

陸あげされたマグロは、ピクリともしないが
あたしは、お仕置きの喜びを、期待している







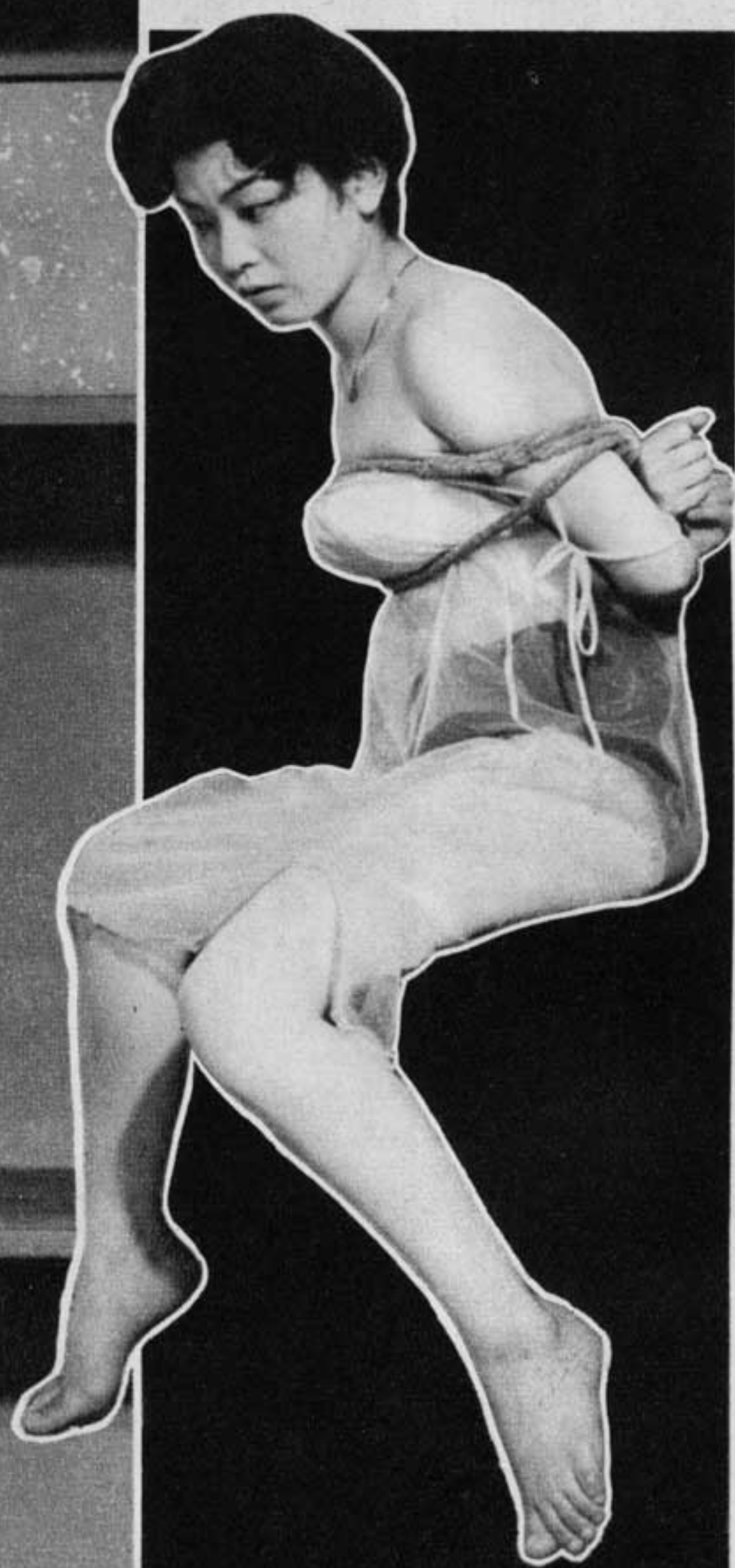
裸身緊縛

皮をむかれた白桃のように さえ
 ざえとした肌を 容赦なく縛る縄
 その中から生まれる 忘我の境地

女が 縛られる時

男がそれを欲する時
そして自分がそれを望む時
あるいはまた
ムチで打たれたいたい時
いじめられたいたい時
陶醉にひたりたい時



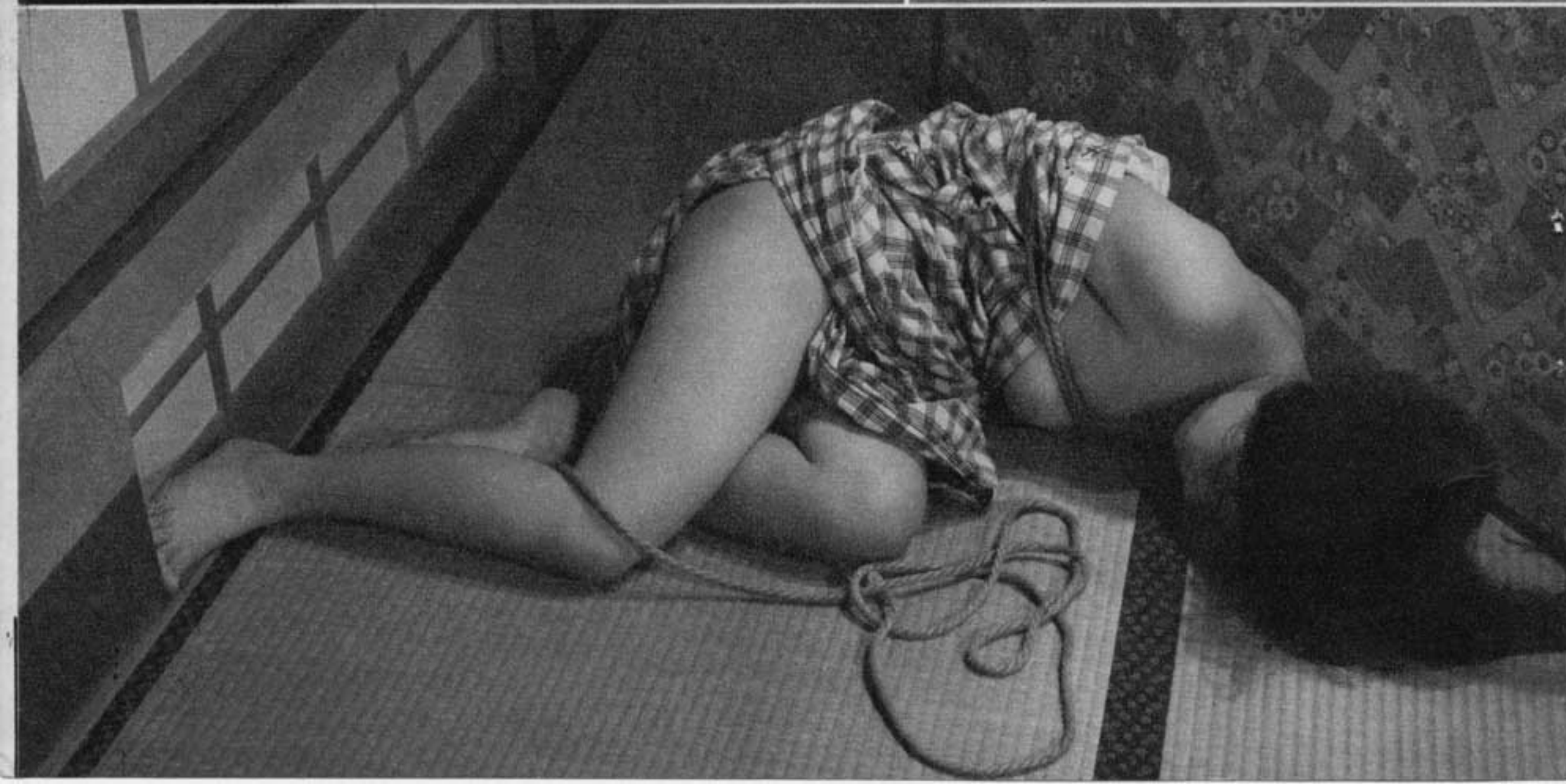


泉は 清水を湧きださせる
縄は 女の喜びを
からだの奥から 誘いだす
だから 女は
きつく きつく
縛られたくなるのだ

痛ましき犠牲

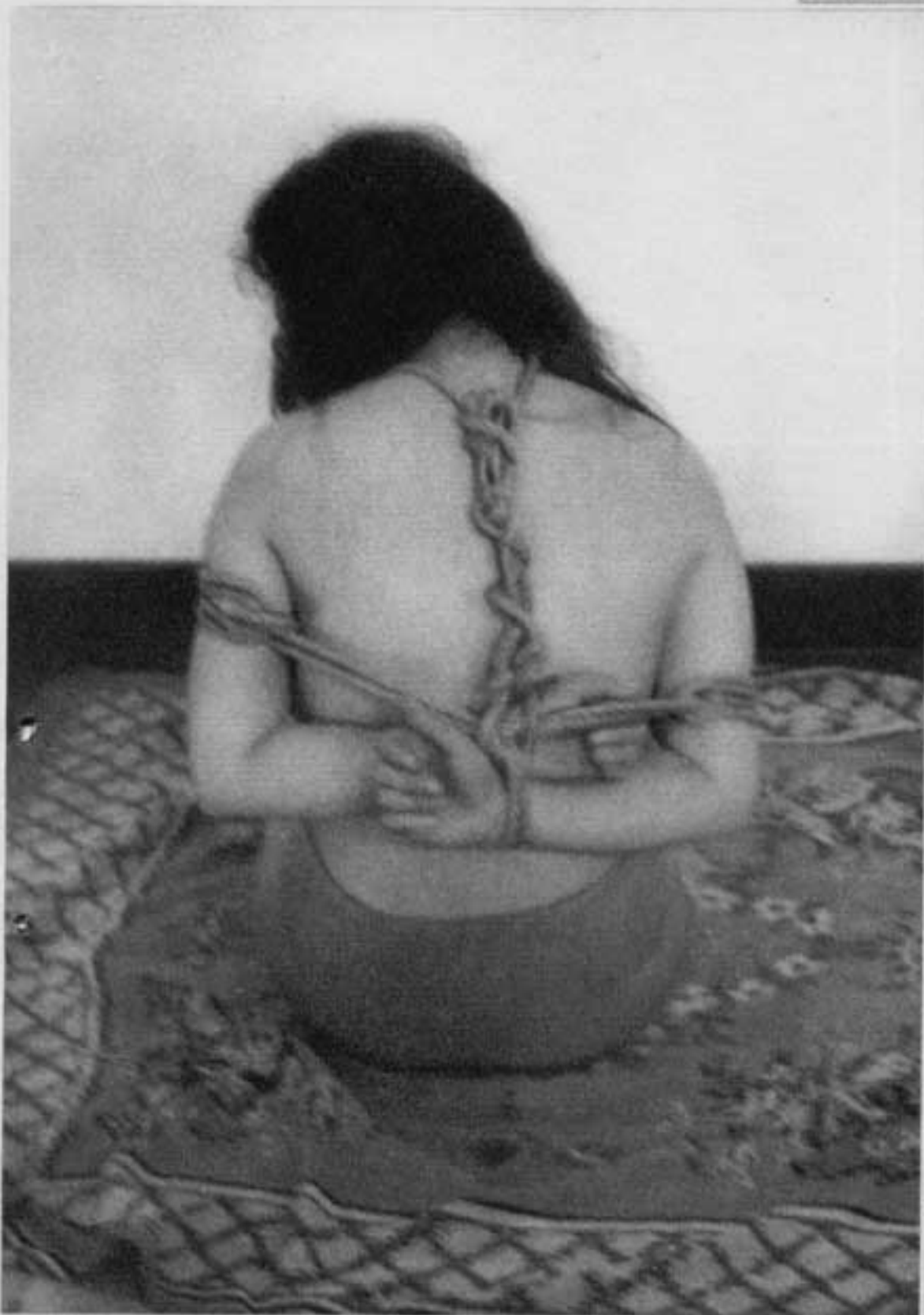
なまじ浴衣があるから それがは
だけられるから よけい痛ましい
のだ 縛られるから なおさらだ





縛 受 肌 艶

肌は もだえ 燃え
静かな炎を たてる
女体の奥の泉から
ふきあがるよろこびが
音をたてて
歓喜をよぶ



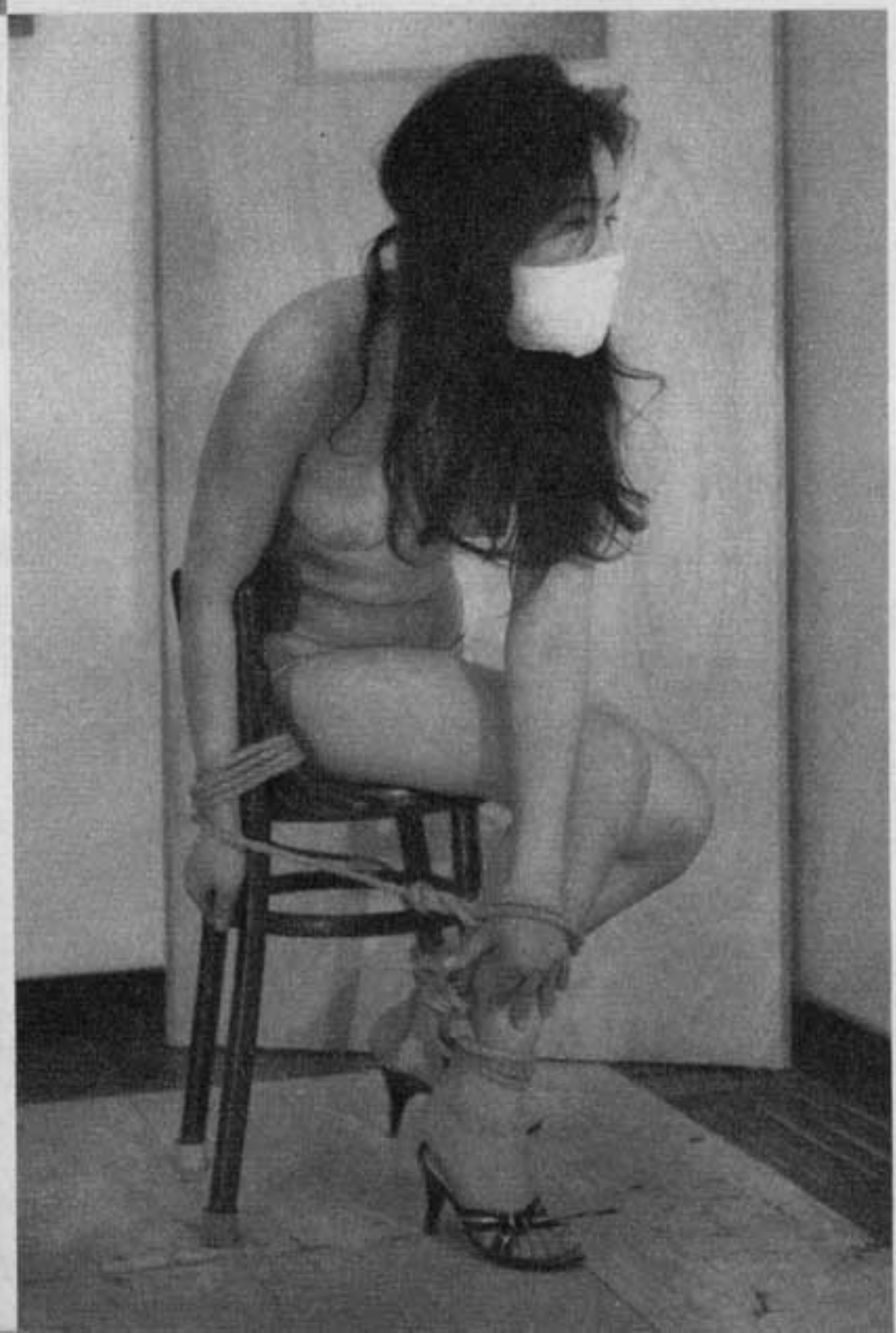


のものではない
肌を責める
きない女は、
ケニエだ。



椅子責め

椅子は腰かけるだけ
い。女体をしばり、白
ときもある。身動きで
男にとって、最上のイ





美 妖 の 閨

漁師の網ならぬ
嗜虐者の網に捕われ
身動きもできぬほどに
縛られた 若き人魚は
水を離れたところにも
生命を燃やす 柔肌の
喜びのあるを知った



悦虐の夜

身動きのできないところに 喜び
がある 女の法悦が 生まれ出る

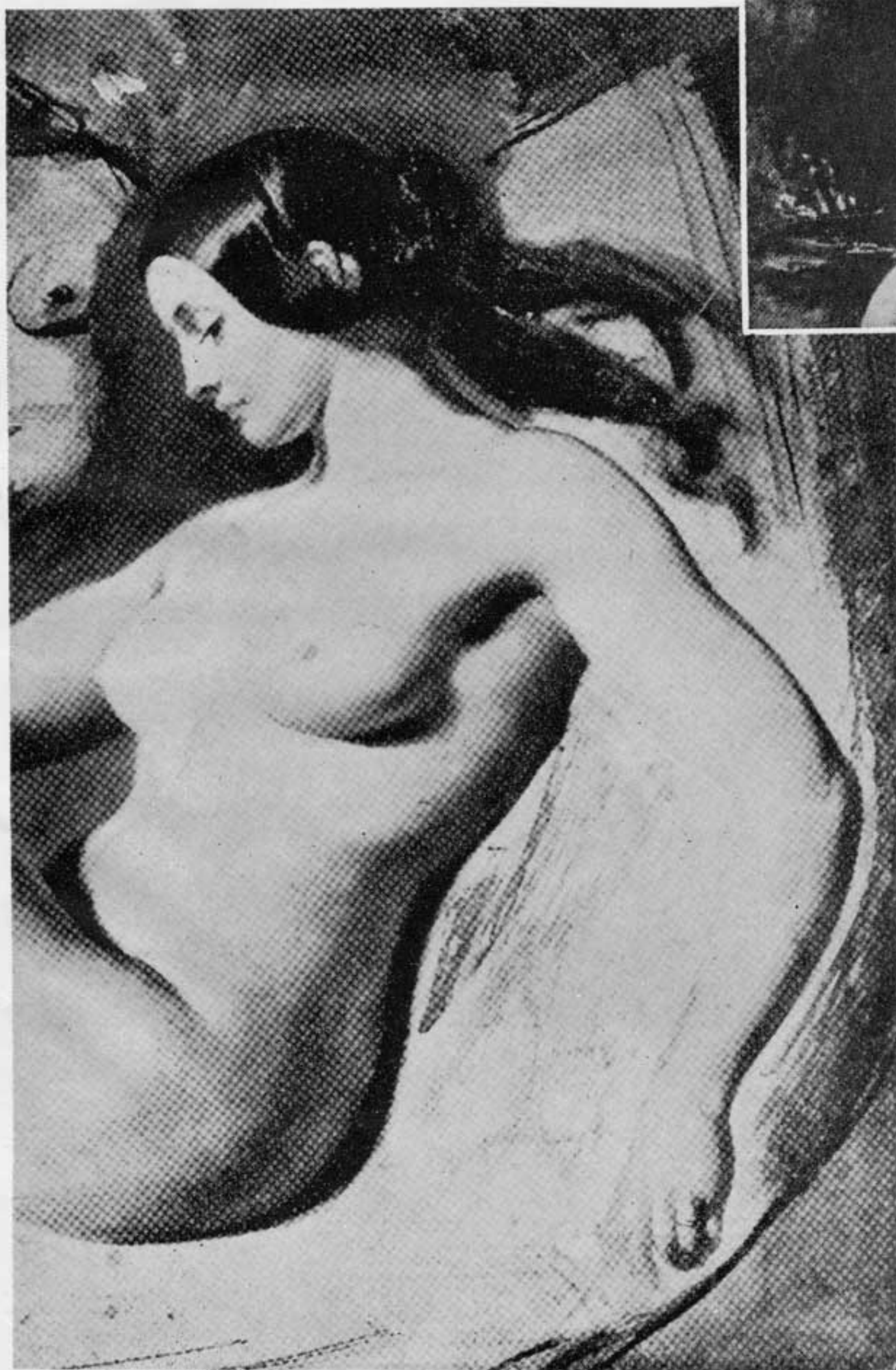
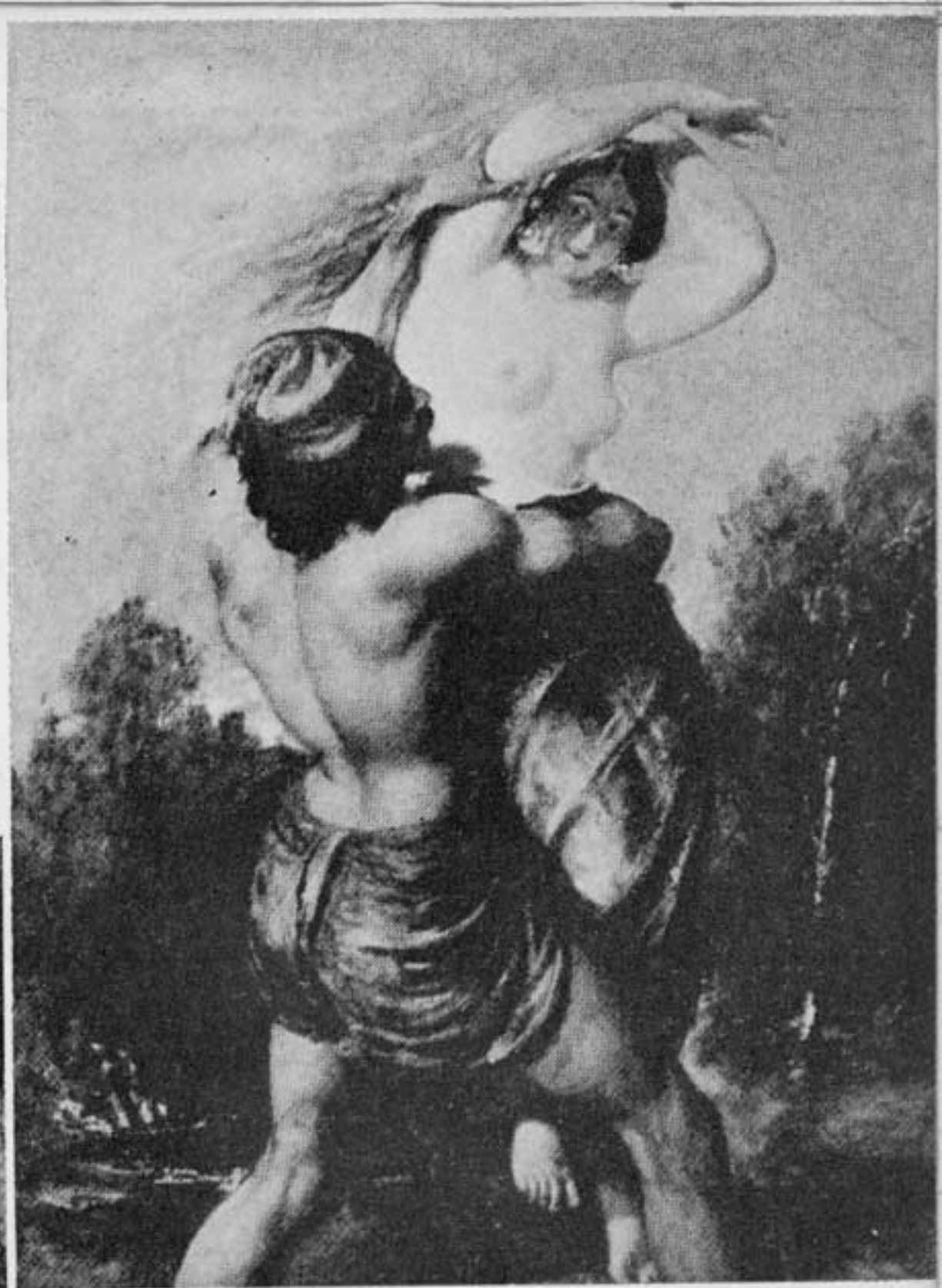




(ルーベンスの名画にみる変態性欲)

誘 惑 (原始結婚の儀式)

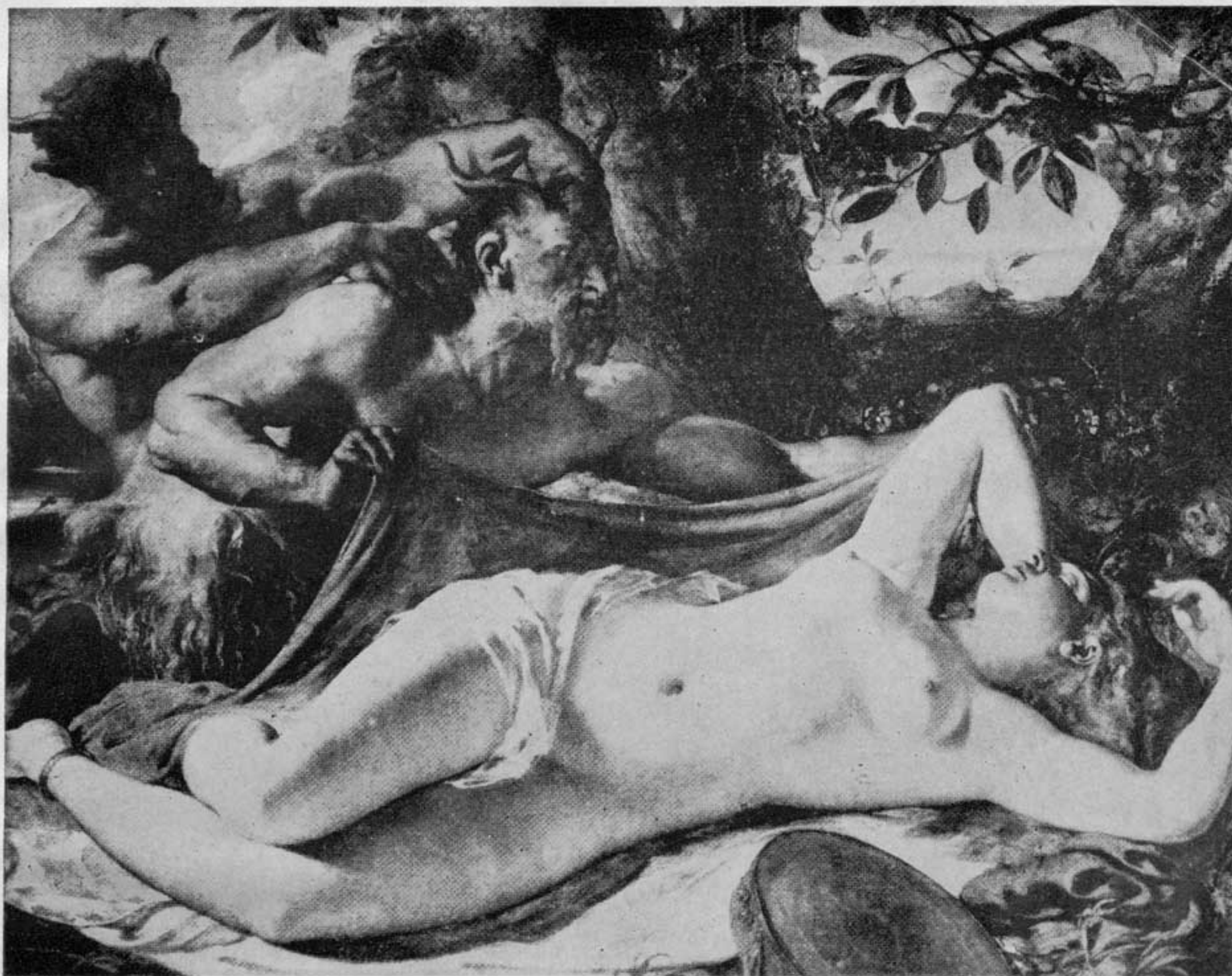
名画にみる変態性欲



海賊の女人略奪(上)
レダと白鳥の愛(左)



捕われのアンドロメ
ダ（部分）（上）



(ルーベンスの名画にみる変態性欲)

眠れるニンフとサティリス(窃視症)

風俗奇譚

耽美法悦特集・5月号

〈男女性風俗の粒より話題の研究〉





特集 同性愛

ホモといい、ソドミーといい、女性同士、男性同士のあいだに交わされる愛情は、むかしから根強くつづいてきている。そのために犯罪も起こり、刃傷も行なわれる。

女性のそれは、あまり目立たないが、男性同士の場合は、男色とか、ゲイとか、第三の性とか、黒いセックスなどといわれ、風俗的にも話題をまいている。

だが、一口に同性愛といっても、その程度、その表われ方など、さまざまである。いったい、その真相は、どんなものであるのか？

同性愛の種類と実際

大 達 欣 治

同性愛三つの型

同性愛とは、いうまでもなく、男性でありながら男性を愛し、女性でありながら女性を愛することによってだけ、興味を感じ、性感を満足させるものをいう。そしてこれは、古くから、特殊の男女間に行なわれてきたものである。

この場合、特殊というものは、病的または変態的ということ、こういう関係は、一般的、常識的でないために、奇異な現象として注目されるのである。しかも同性愛は、それが精神的なものであるうちはまだいいが、肉体的にまですすむと、その弊害は大きく、嫉妬の原因となり、ひいては情死や殺傷事件を起こすことも、少なくない。

元来、人間は、男女とも、根源的には、両性的な素質を幾分かはもっているものである。だから、ふつうの人間では、思春期までは、いちじるしく両性的な時期を過ごし、成熟してくるにつれて、両性的なものから異性的な性質に移っていくものである。その場合、同性的な力の一部は昇華されて、友情となり、団結力などになるのである。そして、この昇華作用が順調にすすまないときには、神経病的になるわけである。

しかし、ふつうは、この同性的な傾向を完全に消滅してしまうことのできるものは、まずないのであるから、この傾向は多少とも、精神的に各人に残っている。そして、もし異性愛が圧迫されて伸びきらないと、同性愛となってしまうことになる。

同性愛の心理状態は、ふつう、次の三つに分けられている。

① 自分に似ている同性者を愛するもの。つまりは、自分の幼い日の姿を、ある人に見いだして、それを愛していく、いわゆる自己恋愛型同性愛。

② 男の子が父親に、女の子が母親に、敬愛をもった感情が強く心に刻まれ、それが定着して、気持ちに異性に移らないもの。つまり、同性親に似た同性を慕うようになる同性親定着型同性愛。

③ 恐怖とか憎悪、失望といった、なんらかの事情から、無意識的に一切の異性を避け、その代償として同性を性の対象とするもの。つまり、異性愛恐怖型同性愛。

同性愛は、その心理において、以上の三つに分けられるが、このほか、同性だけの学校とか寄宿舎、刑務所などで、長いあいだ禁欲生活を強制されているうちに、一時的の同性愛が起ることがある。これは、偶然的仮性同性愛と称するのである。

男子女化と女子男化

同性愛症のなかで、男性でありながら、性格や感情だけでなく、その容貌、音声および骨格などまで、すべて女性のように変化してしまったものがある。つまり、精神的にも身体的にも女性に近似して、同性の男性とは、まったく異なっているわけである。これを「男子女化」という。

この男子女化は、同性愛症のなかでも、最も重症のものが多く、その性欲が、精神的に発現してくる病的なものが多いから、その根底も根ぶかい。

それでいて、この男子女化は、解剖学上の半陰陽とは全然違って、生殖器は純然たる男性のものである。つまり、内生殖器はもちろんのこと、外生殖器も男性のものであって、女性生殖器は一つも併有していないのである。

しかし、まれには、尿道が異常に破裂していて、一見、女性らしい外観をなすものがあるが、これは性器の发育の停止を意味するものとされている。

また、こういった男子女化のなかに、好んで女装をするものがある。そして、その体格および体質は、女性的であると言われている。

彼らは、広い骨盤や、これにもとづく臀部の豊大、脂肪の堆積による身体のみ、乳腺の発達からきた乳房の肥大、鬚髯の欠如、小形で下アゴが小さい女性的な顔面、浅く細い音声の持ち主で、これは明らかに男性の女性化である。

こうした女性化した男性は、性的羞恥の感情は、いつも同性に対して起こり、異性に対しては起こることがないものである。

これに反して、女性でありながら男性的に変化したものがある。これもまた、精神的だけでなく、身体も男性のように変化したもので、ただ生殖器が変わらないだけである。つまり感情や動作だけでなく、その外貌、姿勢、歩行、骨格および音声まで、ことごとく男性のようであり、もし男の衣服を着ると、ちょっと男性でないと疑うものないほど男性に酷似し、嗜好も酒とかタバコを用い、頭髪を短く切り、すべての外見を男性の真似をする。これを女子男化とよぶ。

この女子男化は、精神病学からいえば、先天的な女性間性欲の最高度のものである。そのなかで、男性に近似するものは、精神的または

身体的に男性の性格を帯びたからである。だから、本来女性でありながら、異性をいみ嫌って、同性の友人にラブレターを送ったり、あやしげな態度を示したりするばかりではなく、一たび親交を結ぶと、あるいは恋人のように、または夫婦のように、ふるまうようになるものである。

男子同性愛者の性行為

同性愛者のあいだの性欲処理の方法は、男性も女性も、一般に、正常な性行為を行わず、不自然なそれによって、性欲の満足を計っている。

男性の場合は、ふつう行なわれるのは、フェラチオ、相互オナニーおよび股間を利用した方法などであるが、より特殊なものとしては鶏姦がある。

鶏姦は一般には、「男色」といわれるもので、能動的鶏姦、受動的鶏姦の二つに分けられる。

能動的鶏姦とは、男性を見て情感を催して性的な欲求をするものであり、受動的鶏姦とは、男性でありながら、他の男性から、性的な要求を挑まれることによって快美を感じるものをいう。

能動的鶏姦者は色情倒錯症ではあるが、それでも男性的であるのに対して、受動的鶏姦者は、男性でありながら女装をしたり、はなはだしいのになると、言語動作までが女性的になる。しかも、女性に対しては少しも情熱を感じないで、美男を見ると恋慕の情にたえなくなるのである。男娼は、こうした男性の職業化したものである。



わが国では、男娼を、陰間、または若衆、野郎、色子などともいった。おもに男を客としていたが、まれには、ある種の女を客として正常な情交にも応じていた。当時の客は、僧侶が一番多く、次が旗本、その他の諸太夫という順序で、まれには一般婦人もまじっていた。そして、この男娼との性的関係を「衆道」と称していた。

この陰間をおいた遊楼が陰間茶屋で、江戸時代には、芳町、湯島、芝神明前などにあったが、天保九年十二月、幕府によって禁止させられ、同時に、その風俗画まで禁止された。

また、おもしろいことに、わが国では、昔から、男色用の塗り薬があった。原料は、ある植物の根を乾かして粉末にしたものであるという。井原西鶴の「好色五人女」に「これなん衆道にねりぎといふものなるべし」とあるし、「守貞漫稿」には「新妓初めての時にもこれを用ゆ」と出ている。

女子同性愛者の性行為

さて次は、女子同性愛者の性欲処理法であるが、それは主として、擦淫、クニニリングスとか、張り形、人工ペニスを用いての変態的な方法による性欲の満足が計られた。それも多くは、双方ともに、心理的・性的特質を行為に現わしあうのではなく、その一方が正常な性的素質をもっていることが多い。だからして、いわゆる「男役」「女役」という分担も生まれるわけである。

クラフト・エービングは、女性のあいだには、避けることのできる培養された同性愛も多い、といっている。つまり、女子同性愛者といわれるものの中には、多くの仮性女子同性愛者が含まれているというのである。そして、その原因として、次の幾つかを挙げている。

- ① 自慰を行わずにはいられなくなる過剰な性欲。これは、神経衰弱症をひき起こし、その結果、自然な性行為や持続的な性欲では性感が消失してしまう。
- ② 同じく過剰な性欲のある場合、他の交わりが欠けているときには、同性愛的な交わりがはじまる。囚人とか、男たちによる誘惑のチャンスのない、あるいは妊娠を恐れているかする良家の娘たちとかに多く見られるが、このグループが、いちばん大きなものである。女中が誘惑者であることも珍しくなく、時にはそれが同性愛の女友だちであることもあり、寄宿舎の女教師が誘惑者であることもある。
- ③ 性的能力がなく、刺激を与えることができるだけで、性欲を満

足させてやることのできない夫の妻、および、あくなき性欲、自慰をもってする補足、女子遺精、神経衰弱、ならびに男たちとの交際に対する嫌厭。

④ いやな性行為で自分を悩ませた、倒錯的もしくは無能力な男たちとのつき合いにイヤ気がさして、同性の中の同情者のもとに逃がれた、性欲の強い売春婦。

エービングは、仮性女子同性愛者を以上の四つに分類している。たしかに、こういった種類の女性は、昔からいたのである。古代インドの「カーマストラ」の中にも、

「後宮は監視されているから、彼女らは男を訪れることができない。そして、たった一人の男がいるが、それが多くの女たちに共有されているために、これらの女たちは、その性欲を満足させることができない。それゆえ、この女たちは、相互に、人為的に、その性欲を満足させ合わねばならない。だから彼女らは、乳姉妹、女友だち、または女奴隷に男装させ、球根や樹根や果実でつくった、同じ形の棒が、人造男根で、その欲情をしずめている。そしてまた、その性徴がまだはっきり出していない男の像をも、彼女らは抱擁できる」と記している。

中世において、同性愛を罰するために布告された刑罰規定でも、「そういったことは主として尼僧院において行なわれていたもので、たとえば、フランスのある古い監獄は、尼僧が他の尼僧と同性愛的な、すなわち人造ペニスを用いた性交をすると、ざんげ七年をもって罰し、俗人に対しては刑一等を減じている」としている。

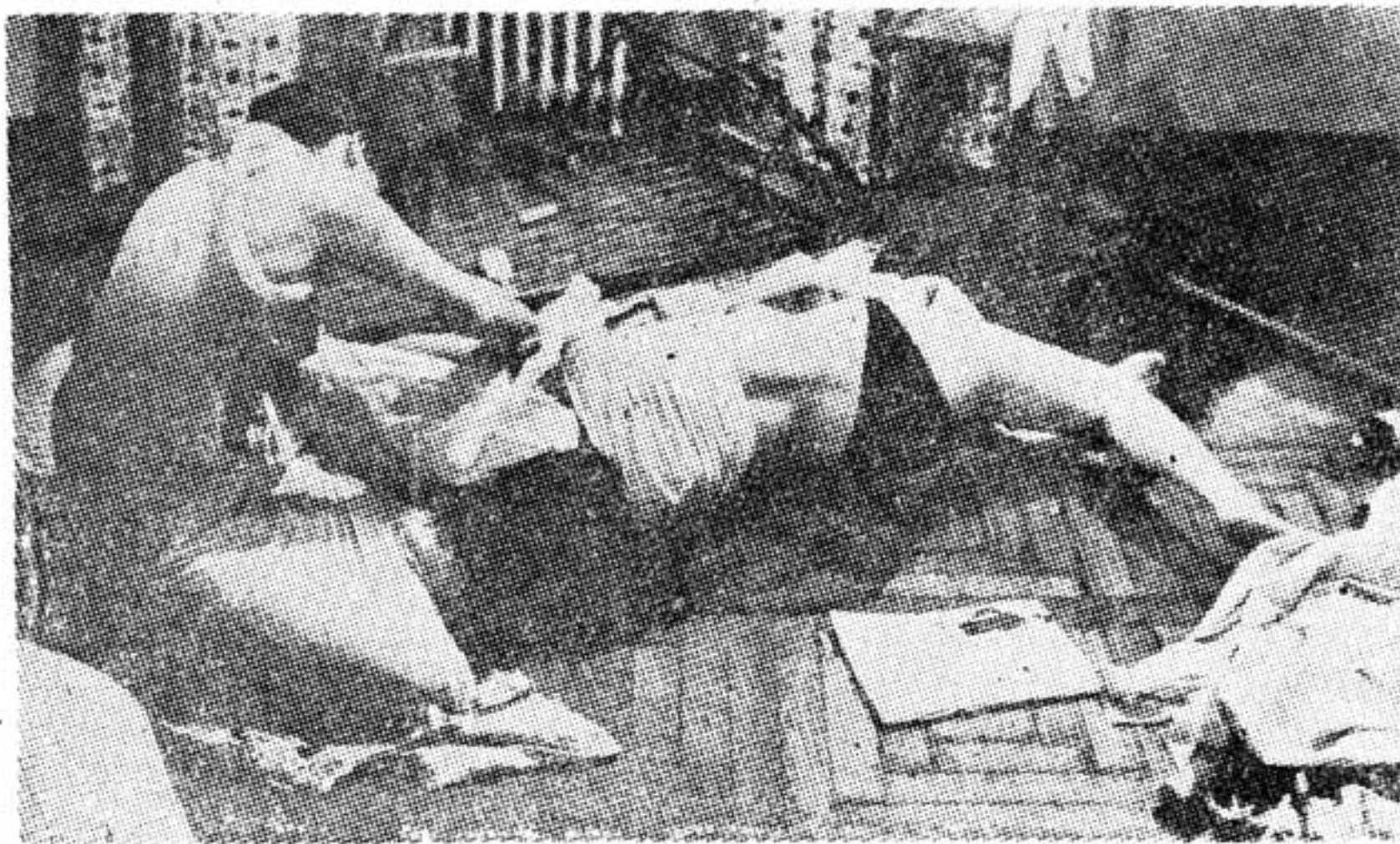
とにかく、仮性女子同性愛者を含めると、女性の同性愛者は、意外

に多いものである。

ふたなりという同性愛者



以上、同性愛者に見られる、女化男子や男化女子と外見は同一でありながら、身体的内容が異なっているものに、半陰陽、すなわち「ふたなり」というのがある。その中には、男性でありながら女装をしたり、女でいて男装することもある点で、前述の女化男子、男化女子と同様であるが、身体的には、男性でありながら女性の、女性でありながら男性の性



器を有しているところが、全く異なっている。

半陰陽は、男性か女性か、どちらかが本体であって、外見は不明であって、睪丸があれば男性であり、卵巣があれば女性である。前者を男性仮性半陰陽、後者を女性仮性半陰陽という。

ふつうに見られるのは、どちらか一方だけを有する仮性半陰陽であって、睪丸の発育が悪いと男性としての性器が発育しないで、一見、女性の性器のようになり、卵巣の発育が悪いと女性としての性器の発育が悪く、外見が男性の性器のようになるのである。

とにかく、同性愛者は、単なる精神的なものであっても、肉体的なものであっても、いずれも奇怪な性生活をするものである。そこで次に、いくつかの実例を挙げてみよう。

同性愛ゆえの殺人放火

大久保康夫は、昭和二年三月、退役軍人の一人息子として生まれた。両親の慈愛を一身に集めて成長し、昭和十九年三月、私立のある中学を卒業した。その中学五年在学中、下級生である海原宏（当時14年）と知り合い、その紅顔可憐な姿に心を奪われ、ついに、熱烈な同性愛に陥った。

ところが、宏は、突然、父の殉職という突発事によって母とともに東京を引き払い、神奈川県にすむ祖父母のもとに移り、学校も転校してしまった。

康夫は、そのため、掌中の玉を奪われたように感じ、宏の姿を夢にまで忘れることができなかった。そして懊悩の末、自分の手で宏を殺害し、その肉を食い、血をすすることによって宏を永遠に自分の所有としようと考えた。

だが、宏だけを殺害したのでは、すぐ犯行がバレると思われたので宏の一家を皆殺しにしたうえ、同家に放火して犯跡を隠蔽しようとした。

かくて昭和十九年六月、犯行後の逃走の便を考え、海原宏二と偽名して品川駅で定期乗車券を購入した。そのさい、宏の家に近いのは二宮駅なのに、わざわざ、もっと遠い小田原までの区間を購入した。そして、この定期券を利用して、ひそかに宏の家の内情を調査したうえ、凶器として短刀一口を、放火材料としてマッチおよびセルロイド製の筆入れなどを用意した。

かくて同年七月二十八日、午後三時すぎに康夫は、海原宏の家を訪れた。そこで歓待を受け、おりからの降雨を口実に、同家に宿泊することとなった。

一同とともに就寝したのは、午後八時三十分ごろであったが、夜ふけて、十九日の午前二時ごろ起き上がり、出刃包丁をふるって、まず宏の祖父を突き刺した。次いで、急をきいて駆けつけた宏の母の右前額部に切りつけ、さらに、雨戸をあけて戸外に逃げ出そうとしていた宏の祖母の背後から短刀で突き刺した。そして最後に、同家の炊事場の水瓶のかげに避難していた宏をとらえ、宏を左手に抱え込んで、右手の短刀をふるって、宏の左胸部を突き刺した。四人とも、即死であった。

そのうえ、犯行をくらすため、同家の八畳間につつてあった蚊帳に、セルロイド製の筆入れを立てかけて火をつけ、海原家を丸焼けにってしまった。

これは、同性愛がこうじて殺人事件をひき起こした事例である。異性間でも、別離の場合によくある事件であるが、同性愛の場合は、もっと根深かいものがあるようだ。

女性と結婚する女性たち

これに対して女性の同性愛は、それに対して男性が無頓着であるのと、男色よりも世間にわかりにくいなどの関係から、きわめて少ないように思われている。だが欧米では、男色のそれよりはるかに多く、クラブ・エーピングは、一万三千人の女性のうち十四人が同性愛で

あったといっているし、モルは、ベルリンの娼婦の二五％に、これを認めている。

二十九歳の、道徳的にも堅実な、ある職業婦人は、路上で若い女性にあうと、接吻してみたいという心に非常に激しく駆られるのであった。また、自分のことを信頼していた十五歳の少女と、同性愛に陥りたくてしかたがなかった。

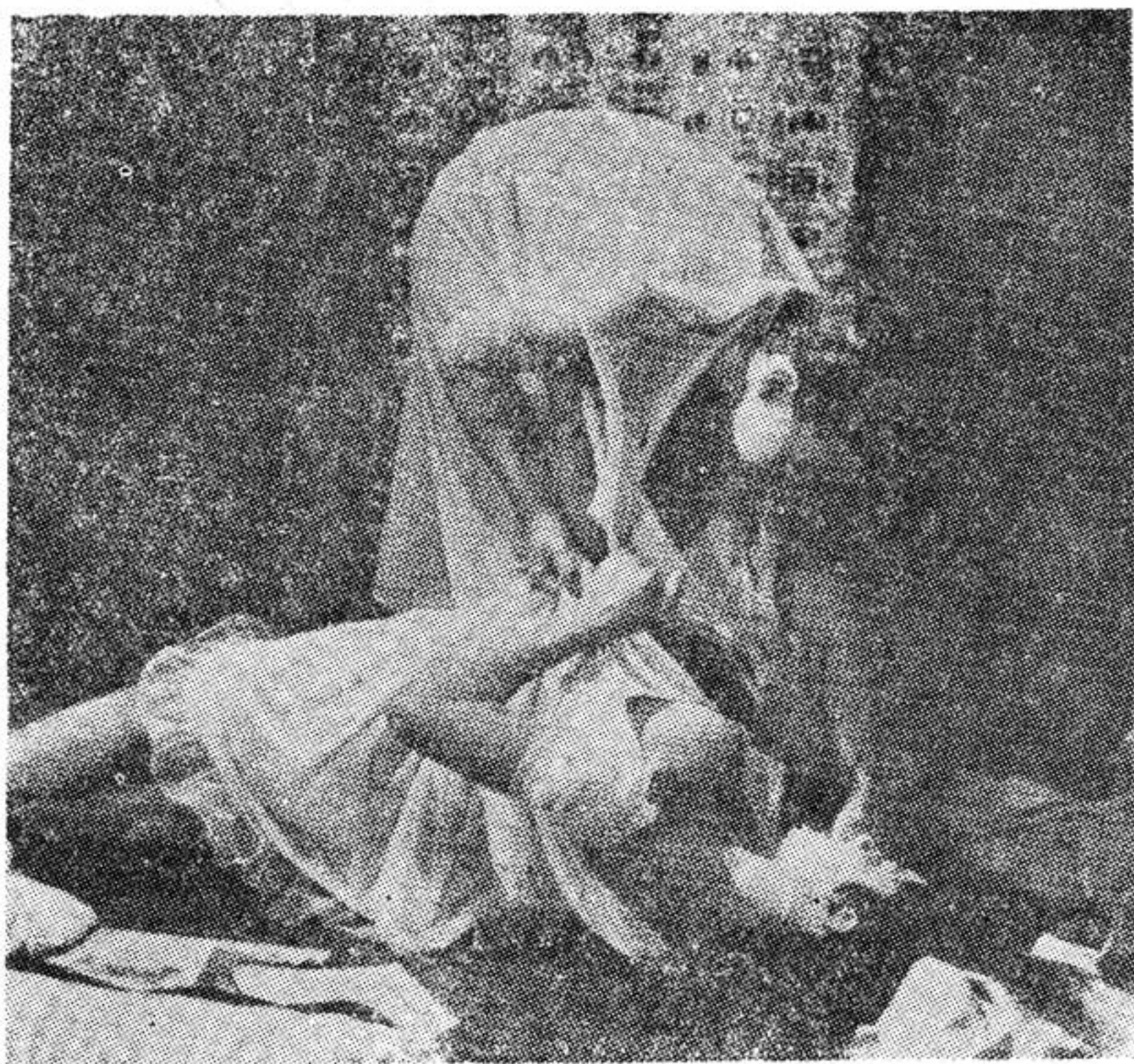
彼女は、幼時は、変態的な点はなく、少年とも少女とも、ひとしく遊んでいたのだが、そのころ、よくない経験をしたことがある。女の友だちから「お医者様ごっこ」や肉体への接触を望まれたのである。

九歳のとき、よく、自分のからだを抱き上げて空中にほうりあげてくれた従兄を愛していたが、十一歳のころ、四十歳ぐらいの家政婦に誘惑された。

その影響か、十四歳になったときは、すでに決定的な同性愛者であった。また、そのころは、それに情熱的であった。そしてある女教師と同性愛に落ち、それが二年間つづいた。そのときは寄宿舎にいたので、環境もまた同性愛の傾向を刺激されるものだった。

二十歳のとき、異性との愛を二度試みたが、失敗してしまった。それがまた、彼女の性的感情を、完全に同性愛的なものにばかり向ける影響となった。

ベルリンで、一人の若い女性が、ガス自殺をはかって人事不省になったまま発見された。応急の手当てによって蘇生した女は、自殺の原因について次のように述べた。



この女は、ずっと以前から男装をつづけていた。世間からは男性であると思われていた。そして若い女性と知り合いになって、友情を取り交わすようになった。間もなく友情は、恋愛にまで進んだ。ところが、ある日、喜びに夢中であった愛人が、彼女のヒミツを発

見してしまった。男装した女性であることが、バレてしまったのである。

二人の愛は、当然のことながら破局にたち至った。怒りと悲しみとに満たされた彼女は、世をはかなんだ末に、自殺を企てたというわけであった。

これは、ウルフエンが報告している例であるが、女性の変装狂は、男性的であると同時に、男性的女性と女性的男性との中間的な素質を現わすものである。

そして女子同性愛者の性行為は、前述のように擦淫、張り形とか人工ペニスなどによるのであるが、これが、案外、想像以上に広く行なわれているようである。同性愛者の女性同士が結婚(?)した場合、「妻」となった女性が、その「夫」を真実の男性であると信ずるのは主として、こうした技巧や器具が巧みに応用されるからなのである。

人工ペニスは、ギリシャ時代には、盛んに用いられたもので、その発明は、古代小アジアのミレトス市の女性たちの手によるといわれている。そしてその使用は、中世紀に及んでなお相当の流行をつづけ、降って十八世紀のはじめには、ドイツ女性のマルガレッタ・リンケンが、この人工ペニスの助けをかりて、他の女性と結婚したと伝えられている。

戦後は、女性間の同性愛がいちじるしく増加しつつあるのではないかとされている。女権の独立による男性化の激増と、男性の神経衰弱的な不健全さへの嫌悪が原因とされている。その真偽は、なお検討を要するが、とにかく注目すべきことではある。

(筆者は性科学研究家)

女性的男子の恋慕手記

湯 浅 重 二

女性的男子は、たいてい飲酒喫煙を嫌い、音楽、美術、裁縫、洗濯、料理などが上手で、化粧をし、あるいは女装して同性の慕性をかきたてる。そして同性に接触すると、受動的な位置に自分をおいて、至上の快感をおぼえるが、これに反して、男性的位置になると、非常に不快を感じ、あるいは悪心嘔吐をもよおすものさえある。

この種の変態男性の一実例として、クラフト・エービングの名著「プロパチア・セクスアリス」の中に掲載された、一男性の手記を次にのせてみよう。

わたしは、子供のころから、男の人の姿を描いた絵画や彫刻が好きだった。大学に入ってから、異性によって愛欲の動いたことは

なく、友人にさそわれて、妓楼に登ったこともあったが、一度も目的を達することができなかった。

もし、わたしのそばに婦人がいたり、あるいは同じ室内に婦人と同席するようなことがあると、たちまち厭悪の感が起こって、情火は消えてしまうのである。

そこで、わたしは、自分自身が不能者ではあるまいかと思ってみたが、しかし、情欲は人一倍強く発動するのが常であった。

わたしの異常なる性欲は、年をへるにしたがって、いよいよはげしくなると、同性に接触したいという情がしきりに胸中に燃え、ほとんどおさえきれないこともあった。このような場合に、もし窓べにもたれて往来を見わたし、美しい男の通るのが目に入ると、ただ

ちに戸外にかけ出して、その男のあとを追跡した。

また、わたしのひそかに恋いしたう同性がある時は、その住宅の前にたたずんで、その人の出てくるのを待ちわび、もしその男が戸外に出れば、さっそく接近して、その身体にさわるのを楽しんだ。

また、わたしの恋いしたう男に、艶書を送って、めんめんたる切情を打ちあけたこともあった。

二十歳になったころには、異常の愛欲がますます亢進してきた。わたしの愛する男子というのは、筋骨たくましい堂々とした偉丈夫であって、女のようなきしゃづくりの美少年は、ちっとも好ましくなかった。

二十二、三歳のころとなってからは、愛す



る男子の数も多く、もしわたしの愛情をいただくような魁偉^{かゐ}の男子を往来で一目見ると、情熱の火がたちまち燃え、すぐにもその人を恋人にしたくて仕方がなかった。

しかし、わたしの情人になろうという者はたいてい下等社会のもので、馭者^{ごしや}とか、兵卒とかいうような、体格の偉大なものであった。

一夜、わたしは、自室に静坐していた時、あらあらしい兵士の靴音が近くにいたので、飛び立たんばかりに戸外に出て、兵士に追いついて胸の思いを打ちあけ、財布から金をつかみ出して、なにとぞ、わたしの恋をかなえてくれと懇願した。兵士は、金を見て、わたしの切なる要求をいれてくれた。その時のよ

ろこびは、実に、たとえようもなかったくらいである。

こうして自分を顧みてみると、自分の性欲の変態なることを思うたびに、みずからをあれみ悲しまざるを得なかった。

わたしの欲する愛というのは、実に不自然きわまるもので、社会道德の許さないばかりでなく、法律の禁じるところのものであるのだ。

ああ、おそろしいことは、つつしまなければいけない！と自分に何度戒めたことだろう。

なのに、どうしようもないことなのだ。目の前に、勇壮快活な男子を見ると、たちまち

食指が動きだし、自分でもどうしようもなくなってしまう。

われながら、あまりの愚劣さ、醜悪さを、切実に感じたので、いろいろ医者にいって見てもらったが、この悪病は、医者の方や薬の力では、少しのききめもなかった。

わたし自身を女性であると心の中に想像して、婦人の群れに加わることは愉快であつても、もし、本来の男性にかえって、女性に接しなければならぬ時は、はなはだ不快なのである。

わたしが毎夜、夢に見る人は、必ず男子に限られ、その男が強くわたしを抱擁し、あるいは腕をにぎってくれると、なんともいえないような快味を感じるのである。

この場合、わたしはいつも受動的の位置に立つ。

わたしの身体は女性的で、手足は纖小、音声は高調、胸幅はせまい。タバコは好きでないし、人と争ったようなこともなく、美術とか装飾とかが好きで、よく貴婦人たちと交際する。

わたしのもっとも好きなのは、甘い音楽なのである。

同性愛少年が殺人を犯すまで

— その手記による心情の移行状態 —

城 戸 義 一

一少年の病的な同性愛が昂じ、ついに相手の少年の一家皆殺しを企てた、恐るべき同性愛の執念ともいふべき犯行を、詳細なデータによって分析してみよう。

計画殺人を犯した少年

昭和十九年七月二十九日の午前二時ごろ、神奈川県足柄上郡中井村、海原藤七(70歳)方に、前夜から泊まっていた孫の宏君(14歳)の中学の先輩、大久保康夫(18歳)が、家人の寝静まったのを知るや、突然、出刃包丁で、まず祖父の藤七さんの咽喉部を突き刺して即死させ、その悲鳴と物音に隣室から飛び出して来た宏君の母仲代さん(43歳)の右前額部に、今度は鋭利な短刀をもって切りつけたが、

仲代さんがその場から逃げたため殺害の目的を達せず、さらに、その間、雨戸を開いて屋外に逃げ出そうとした藤七さんの妻ふくさん(65歳)の背後に迫り、その背部を短刀をもって突き刺した。ついで、同家の炊事場に避難していた宏君を引きずり出して左手に抱き、右手にもった短刀で同君の胸部を数回にわたって突き刺し、出血多量によって即死させた後、右の犯行をくりますために、同家八畳間に吊ってあったかやにセルロイドの筆箱を立てかけて、もっていたマッチで火をつけ、かやにもえ移らせ、ついに大火事に至らしめ、同家を全焼させた。

犯人の少年は、直ちに逮捕されたが、以上の惨虐な殺人を、平然と、しかも計画的に行

なった少年、大久保康夫とは、いったい、どんな少年期を過ごして来たのだろうか、その生い立ちから、たどってみよう。

ひとりっ子の寂しさ

大久保康夫は、昭和二年一月、当時退役軍人であった父義麿と、母千代との間に出生し、何不自由のない裕福な家庭の一人息子として成長した。

ところが、彼が十一歳の年、つまり昭和十三年一月に、伊豆で甘味料製造事業に手を出していた父が、事業の失敗から破産し、それ以来、病床につき、まもなく死ぬと、すでに破産の後で、なんの財産も残らず、伯父にあたる大久保興宗の仕送りと、亡夫の扶助料と、

下宿人をおいていた部屋代によって生計を立てていた。

昭和十九年三月、都内のR中学校を卒業したが、彼の病的な同性愛は、このR中学校の五学年在学中に、同校の一学年にいた海原宏君との間に芽生えたものである。宏君は美少年で、その眉目秀麗さに、彼は全く心を奪われてしまった。

宏君は、父が殉職したために、一家は東京を引き払って、祖父の海原藤七さんのいる神奈川県足柄上郡中井村に転宅し、そのため学校も転校した。

このことがあってから大久保少年は、宏君との交際の機会を失い、まるで掌中の玉を奪われたように失望した。しかし宏君への思慕は日を追ってつり、悶々とし、自分の志望

する医者になることすら重荷に思えて来た。

そして、ついに昭和十九年五月末ごろになって、宏君との恋愛は同人が男性である以上、しよせん遂げることの出来ないことは必定なので、むしろ自分で手を下してその生命を絶ってしまえば、他人に宏をとられる心配がなくなり、永久に自分の所有となるので、それから落ちついて自分の志望した医学の道に進むべきである」という考えを起こすに至った。

しかし宏君一人を殺したのでは、すぐ自分の犯行であることが発覚するおそれがあるので、宏君やその家族も殺した上、放火し、これを焼却、犯行をくらませることを決めた。

また、宏君に対して使用する凶器としては短刀一ふりを購入し、また、他の家人に対する凶器としては、自宅にある、ありあわせの出刃包丁を使用することにした。また、殺害の後、放火するために、マッチ、セルロイド製の筆箱の用意もしていた。

彼は、以上の殺人道具とともに、犯行前後のアリバイや、土地、家屋に対する計画をも綿密にたてた。

まず、犯行に先立って、品川駅で海原宏二と偽名し、犯行後の便を考え、品川駅から宏



君の居宅にもっとも近い東海道線二宮駅を避けて、ことさらに以遠の小田原駅までの定期乗車券を購入するといったあんばいである。

これによって彼は、ひそかに宏君の家の近くに行き、同家の位置、構造、近隣との関係、家族人員、男女別などを詳細に調査、犯行の手段方法についても研究した。

さて、いよいよ万端の準備がととのうと、凶行の日の前日、同年七月二十八日午後三時すぎごろ、前記の犯行に使用する凶器類をもち、宏君の居住先である前記海原藤七宅を訪問した。

もちろん、かつての先輩が訪ねて来たところ、宏君はもちろん、なにも知らない家族の人々にも歓待をうけて、そろって夕食を共にした。

彼にとっては幸いだろうが、家族にとっては最悪の不運が訪れた。雨が降って来たのだ。

午後八時ごろ、彼は、睡眠することをふせぐために覚醒剤ヒロポンを服用して、家人とともに、同家の二階八畳間に就寝した。そして、翌二十九日午前二時ごろ、ついに凶悪無残な殺人劇に突入したことは、前に述べたとおりである。

多感な少年の夢

以上が、少年の犯行前後の経過であるが、殺人を犯すに至った以前の同性愛的な性格について考えてみると、その徴候は、父親の盲愛による幼時の環境によっていることが、彼の獄中による手記によっても、推量できる。抜萃してみよう。

「私が生まれた時、父はすでに老いの坂をのぼっていた。父も母も、しょせん子供は授からぬものとあきらめていたところへ、ひょっこりと生まれた私こそ、父には、目に入れても痛くないほどであった。……中略……私は父の溺愛によって、全く懦弱に育った私の性格が、やがて恐ろしい運命の渦中で、不思議な結果を現わしたのである。

それは、懦弱ではあったが、悪の半面を全く知らず、純心一方に育ったため、恐ろしい環境の変化にも、ついに悪に落ちなかったが、その懦弱が、極端な内攻性性格をつくった。

そして、内攻性性格となったがため、悪の道に落ちるより以上に恐ろしい悲劇を惹

起したからである。もし父の激しい鍛練によって、豪放な、磊落な、しかも純心な少年に育てられたなら、あるいは、救われたであろうが、それは、無理なねがいであった——」

ついで少年は、父の死後の経済的な苦しさから、徐々に悲惨な生活が始まる。これが進むにつれて、環境による劣等感が芽生え、ますます少年を孤独にしていた。それがやがて、自然へのあこがれに転じた。

夢多き多感の少年は、このころ詩をよみ、おりあれば武蔵野の自然に魅せられてさまよい歩いた。しかし、少年の場合は、自然を愛することだけでは、沈みきった心をいやすことはできなかった。人間を慕うことによるこびが、いつのまにか、彼の心をとらえていたのである。少年の手記は、その過程を、つぎのように記している。

「そのころ、よく夕暮れが多摩川へ出た。人一人おらぬ夕靄につつまれた川原に立って、沈み行く夕日を眺めていると、ただもう涙が、後から後から流れるのであった。

神々しいまでに清らかな、この自然の夕暮れの静寂が、私の寂しい心に共鳴してくる真の友であり慰めであった。夕暮れの寂しさを愛するこの気持ち、後日、海原の愛を失った時、再び思い出して、はげしく襲った哀愁と合致して、私を苦しめた原因となったのである。弟によって明るく慰められた私は、自然によって寂しく慰められんとした。……中略……校庭の隅にぼつねんと物思いに沈むようになった私の寂しいうつろな目に、ふと映ったのが、無心に遊んでいる下級生たちであった。『弟があつたらなあ』と置いていた私には、それら下級生たちが、たまらなく可愛く見えたのであった。私の慰謝を求める心は、自然を求めて裏切られても、ついにあきらめ切れず、再びめぐって弟を求めたのである。

肉親の弟のない私は、結局は、下級生を弟とするよりほかはなかった。二、三の下級生とも親しくなった。下級生を愛し指導する目的で、射撃班に入ってもみた。しかし下級生は、ただ可愛い少年以外の何ものでもなかった。私の心を知り、共鳴してくれる真の弟ではなかったのである。私の心

は、下級生を愛するだけでは、満たされなかった。寂しい魂は、自己の真の理解者を求めてさまよい歩いた……」

この過程の後、宏君を知った。その当時のいきさつについては、

「昨年七月ごろ、R中学の校庭で射撃をやっているとき、海原宏君が一年生で、側で珍しがって見ておりました、私も口をきいたのが初まりで、友だちになりました。

宏君というのは、可愛らしい少年でありまして、私を兄のように慕ってくれましたので、はんもんしている私にとっては、心の慰めになっておりました。

私は、宏君を自分の弟のごとく思い、勉強や何かのことをよくめんどろをみて、世話をしやりたかったのであります……」

と述べている。これによっても、宏君が、少年に好意をもっていることがわかる。

「それは、R中学の五年生の七月ごろ、ふとした機会に、一人の下級生をみた瞬間、

私の意識の中へ、爆発的に飛び出した恋情であった。今まで、多くの下級生と接しても、一度も感じたことのない、そのはげしい恋情を、たった一人の、その下級生の上に感じたのであった。いかなる宿命の因縁か、その下級生こそ、大きな悲劇の焦点となった海原宏その人であった。……私の寂しい心は、恋愛の不思議な感情によって慰められた。海原恋しさのはげしい情熱は、性格まで作った悲惨なものすべてを一時忘れさせたのだから、恋愛の力は偉大である……」

殺害の条件

少年は、宏君に恋情を抱いてからは、全くみちがえるように生氣をとりもどした。加えて、医学志望の勉強にもいそしみ、幸福感にみちていた。

しかし、少年の幸福感は、そう長いあいだのものではなかった。宏君の父が殉職すると、前に述べた神奈川県に転宅し、少年と会う機会とは全くなかった。これが、少年に精神的に打撃を与えたことはいうまでもない。

それが、精神的なものから、肉体的なもの

に移行し、性的な絵画となってあらわれた。

「海原が、知らぬ遠いところに去ってしまったのだが、あきらめきれぬ私は、結局、はげしい焦躁となって、現実せぬ世界を無理に現実せんとした。自己の愛情のうちで恋を完成せんとしたのである。

この焦躁は、彼の愛を求めず、はげしい性欲となって彼の肉体を求め、自己の性欲のうちに猥画となって現われたのである。

私の生来の純心な心は、猥画、猥談などを、ごく下品なものとして、全く干渉したことがなかったのであったが、このときは感情がいらだっていた結果、自棄ぎみに、自己の純心を犯して書き、そこに一種の反逆的な気持ちを起こさせたのである。

猥画はけっきょく、なかばエロティズムな気持ちで描いたが、なかば自己の純心さをあえて犯してかかねばならなかった悲惨な境遇を思いながら、描いたのである。

四月十四日、彼の先の住所を知ったことと、陸士受験準備のため会えぬことが、恋情を、より高潮させ、ただ殺してまで彼の肉体を私のものにしたいという、はげしい

気持ちとなった。猥画も、それらにつれて酷画になった。すなわち、あの絵を描くことによって、殺意的恋情を満足させたのであった。……」

こうした心境にあって、彼の医科大学への勉強は、思うようにゆかなかった。

宏君にたいする慕情は、彼の理性や意志では、絶ち切ることもできない破目になった。一切を忘れようと、土佐への移転を計画したが、これは経済上の関係で、実現できなかった。彼は、絶対解決せねばならぬ悩みをもちながら、その解決は、厚い壁にぶつかった。この焦躁は、さびしさをともなって、殺意に発展していった。

「……宏に会いたいと思えば、自分の仕事に手がつかぬし、そうかといって、宏を忘れてしまつて、勉強に精神を打ち込むということは、なおさらできないという悩みに立ち至ったのであります。

けっきょく、宏がいなければ、自分に、自分の立ち向かってゆく方向に悩まずゆけると考えたのであります。私は、この悩ん

でいる気持ちを、本年五月ごろから、日記にもよく書きました。

そこで、いよいよ宏を殺そうと考えたのであります。……」

殺害の動機と計画

はつきりと殺意をかためた少年は、犯行に使用する凶器について、

「……短刀は、直接殺すとき使うため、出刃は、宏以外の家族を殺すため、解剖メスは、宏の肉を切るため、石炭酸の小瓶は、宏の血を入れるため、写真機は、宏を殺した現場を写したり、宏の写真をとるため、竹の皮は、宏の切りとった肉を包むため、一通り備えて行つたのであります。……」

殺害の動機について述べているが、手記によると、つぎのとおりである。

「……幸福な海原を殺したという強烈な刺激は、かならず私の不幸を精算させる。私には、その強烈な刺激がほしい。兄弟も故郷もない悩みも、自然を得られぬ寂しさも

何もかもが、幸福な海原を殺して、私のものとしたという強烈な刺激によって慰めよう。……中略……一度、海原を殺せば、すべてが精算されると信じた以上、今度は、その決心のつかぬことにあせり出した。

定期の期間も切れそうになった。もはや私には、海原は殺さねばならなくなった破目に陥ってしまったのである。

また、殺せば、恋も不幸も寂しさも、私を、死よりも苦しいはんもんに突き落とし、たすべての悩みも、すべて精算されると、かたく信じた。

そして、殺したという大きな罪を、後日必ずくる恐ろしい良心の可責を、私のすべてを捧げて医学者となることによって、償おう。私の迷いは、再び医学者に帰した。そうだ、私は医学者のことをすっかり忘れていた。三月から今まで、何一つ勉強しておらぬではないか。私は、五カ月間、全く迷いつづけてきたのだ。……中略……そうだ、私はもう迷ってはおられぬ。もう遅い。再び急に心配となったこのことが、私を無理矢理殺意を決心させてしまった。殺すことが恐ろしいの、罪が大きい、後でどう

なるの、などということは、考える余裕がなくなってしまったのである。私はただ、悩みの精神と、時にいそがされ、深い考えもなく、狂った感情のままに、無我夢中に行動させてしまったのである。……」

また、彼の手記によると、今度の事件は、いそがされ、すべてを考える余裕さえなくなったことが、宏君を殺害した原動力になったのである。

同性愛が、ただ精神的なものにとどまっている間はたいした影響もないが、これが、やがて肉体的に移行すると、彼のように、殺人事件を招く結果になる。内的環境だけではない、もっと強い刺激をもつ外的環境の影響を、みのがすことはできない。

「私はすでに、夜もねむらず、食事もうろくろくとらず、半狂状態となった血走った目で、毎日のように、二宮に通った。もはやいかなる力をもっても、絶対にブレーキのきかぬ恐ろしい情力となって、ついに七月二十八日、世にも恐ろしい悲劇を破裂させたのである」

<知性書院版>

性の悩みは本書で一切解決致します

<図書目録進呈>

新訂

性技大鑑

性科学研究会編

定価三八〇円のところ

頒価 二五〇円 送料 不要

★夫婦和合と愛情の技術
★現代の性の諸問題解明
目次 ・性は人生の根本・男女の性器の構造・性生活を楽しくするため・完全なる性愛……他

新訂

寢室宝典

性科学研究会編

定価三八〇円のところ

頒価 二五〇円 送料 不要

寢室を花園にする宝典！
目次 ・性技巧の知識
・生理学の常識・結婚衛生学の知識・性医学の知識・性技巧の秘訣……他
全国の書店でお求め下さい。書店切れの節は代金を添えて直接当社へお申込み下さい。代引及び後金は受付けかねます。

発売元

KK 星文館

東京都神田神保町一 振替東京四八〇二

戦国武將たちの同性愛

高 林 信 吾

源義経と弁慶の同性愛

弁慶と義経が同性愛であったと言え、まさか、そんなこと、といって首をかしげる人が多いだろう。

歌舞伎などに出てくる義経は、水もしたたるような美男子であるけれど、史実によると彼は、幼いころ天然痘（ホウソウ）にかかったせいもあって、ふた目と見られないようなアバタ面であり、およそ、女に惚れられるような顔の持ち主ではなかった。

それなのに、同性愛というのはおかしいじゃないかということになって、義経・弁慶の同性愛ということは、ますます変じゃないかということになりそうだ。

しかし、今の話にたとえてみると——東京の深川にある劇場の大道具方をやっていた棚重六郎という男がいた。身長は六尺近く、体重が十九貫という大男で、見るからに容貌魁偉、弁慶とはまさにこういうような男ではなかったかというような男であった。

その六郎が、やはり同じ劇場の小道具をやっていた今泉啓重という小男と、同棲していた。この二人は、ただならぬ同性愛で、終戦後は、いつも同じ家に住み、外へ出るにも一人一人別々で出かけたことがないというほどの仲のよさであった。

結局、二人は男同士で、夫婦生活を営んで

いたわけで、これまで、この二人が、女と接触したということは一度もなかった。

この場合は、徹底した同性愛であった。

同性愛というものは、二人のうち、どちらかが男性となり、どちらかが女性の役目をはたすわけであるが、この六郎、啓重の二人はいったい、どちらが男で、どちらが女になったのであろう。

ふつうは、六郎のような雲をつく、毛むくじやらの男が男の役をし、小男の啓重のほうが女の役だろうと想像するかもしれない。

ところが、あにはからんや、女の役を演ずるのは、この巨大漢、六郎のほうであったのだ。彼は、その魁偉な容貌にもかかわらず、針仕事から水仕事、はては炊事にいたるまでの一切の女性的な仕事を受け持ち、小男の啓

重は、のほほんと亭主面をして暮らしていたのであった。

まことに奇妙な対照であったため、もっぱら近所の人たちの評判になっていた。

つまり、二人とも性的倒錯者なのである。

啓重は全然女に興味を持たずに、もっぱら六郎だけを愛していたし、六郎はまた六郎で、全然女に関心を持たず、啓重に愛されることばかり考えていた。

二十世紀の現代にさえも、こんな人物が東京のまったく中にいたくらいだから、源平時代に、弁慶と義経が、これと同様な生活、つまり同性愛に結ばれていたのではないと、はたして、誰が断言できるだろう。

その証拠に弁慶、義経の愛情こそ、まことに、この六郎、啓重のそれよりも、もっともっと激しかったのである。

例の源平壇の浦の戦いで、二位の尼の手に抱かれて安徳帝は海底の藻屑と消えられ、国母建礼門院は、ようやくの思いで、源氏の侍たちの手で救い出され、その建礼門院が、まだ心の痛みもなおぬ矢先に、義経は、彼女を自分の欲望の犠牲にしてしまったことは、あまりにも有名なことであるが、そのとき弁

慶は、義経にこういったのである。『源平盛衰記』には、彼の、ふんまんやるかたない言葉、こう記している。

「君にわれありながら、世のもののふのならはしにて、女人にたはむれ給ひしには、かえすがえすも口惜しきことにこそあれ。われ、夜々君と共寝せる甲斐もなく、女人に見かへられしは、飛ぶ鳥の葦辺に落つるならひにて……云々」

この言葉は、じつに女にも似たはげしい嫉妬の情である。義経としては、ちよっとした浮気心で、高貴の女人の肌に触れたのではあったろうが、日ごろ女房の地位にあった弁慶にしてみれば、どう考えてみても、許しがた

い行為であったにちがいない。だからこそ、義経が鎌倉で白拍子静御前を愛妾にしたときなども、弁慶は烈火のごとく怒って、義経を責めたのである。だが、義経があまりいい顔をしないので、頼朝に上申して、静御前を、義経から、引きはなしてしま

ったくらいである。義経にしてみれば、弁慶という男は、女以上に大切な男であったのだ。弁慶は、われわれが想像するような、髭だらけの巨漢ではな

い。実際には、女にも見まちがわれるほどの美男子で、僧侶時代から、女にもてはやされた。義経が彼に目をつけたのは、俗説によると、京の五条の橋の上ということになってい

るが、事実、決してそうではなかったのである。義経はアバタ面のために、年ごろになって妻帯することをひどくいやがった。妻に恐怖の念を抱かせることを、快く思わなかったから、自分から、女のそばへはよらず、かえ

って、女を遠ざけていたのである。たまたま、家臣の亀井三郎が、あるとき、知能高き美僧侶を義経に紹介した。義経は、女とは、もともと縁なき衆生だと思って、半ばあきらめていたときに、眉目秀麗の若い僧侶を見たので、その才能はともかくとして、その美貌にひどく惚れ込んで、彼を家臣にしたのである。それが弁慶であった。

女に臆病な義経も、男に対しては大胆であった。彼は、さっそく弁慶を自分の閨に招いて、伽とぎを命じたのであった。それ以来というもの、弁慶の義経に対する忠誠は、涙ぐましいまでに一筋となったのである。

それほどの美貌を持ちながら、弁慶に關す

る艶聞は、ほとんどいいいくらい、ない。浄瑠璃などで仕組んだ弁慶が、一生に一度などという話は、むろん、荒唐無稽なつくりごとである。これによってみると、弁慶はやはり女に対しては、全然興味をいだかなかった男らしく、もっぱら、男子の貞操を、主人義経にささげていたものと見られる。

織田信長と森蘭丸と明智光秀

信長の父、信秀が死んだのは、天文十八年の三月、信長が十六歳の年であった。彼は、その前年、つまり十五歳のときに、結婚している。

妻は、義濃の国の主、斎藤道三秀竜の息女濃姫であった。秀竜としては、信長の父信秀と、いわば攻守同盟を結ぶ意味で、娘を信長にめあわせたのであった。

濃姫は、信長に嫁して来ても、決して幸福ではなかった。美人というほどではないが、下ぶくれの、生き生きした顔をした、かわいい女であった。だから、信長がふつうの男なら、目に入れても痛くないほど、濃姫を愛したはずである。それなのに、信長は、彼女に

俗間に伝わっているように、弁慶という男は、七つ道具を持った豪傑ではない。平凡な美男子で、ただ、とりえと言えば、知謀にすぐれていたという点だけのことである。いたい、いつの間に、弁慶という男を、容貌魁偉な豪傑にでっちあげてしまったのであろうか。史家の罪とでもいうべきだろう。

対して、氷のように冷静であった。

信長は、毎夜のようにどこかへ行って、濃姫と寢室を共にしたことがない。夜になると近侍とともに、どこへともなく出かけて行き、明け方近くなって帰って来て、そのままやすやすと眠ってしまう。

濃姫は、なさけなかった。愛情のない夫を見ると、心が冷々としてくる。そして、むらむらと、反逆心までおこってくる。父秀竜の武勇が恐ろしくて、斎藤家と結んだ織田家ではないか。それなのに、自分は、どうして、こんな味気ない思いをしなければならないのだろうか。

アゴまで布団にうずめて、快さそうに眠っ

ている信長の顔を見ていると、なんだか、よその女のおいさえ感じられる。

「まだやすまぬのか」

濃姫はだまっていた。

濃姫は、信長の身体に身を投げかけて、すすり泣いていた。

「どうしたのじゃ？」

濃姫は、ようやく顔をあげて信長を見た。

「泣いているようじゃのう」

信長はやさしく言った。

もし、心を通じあっている女があるのなら、隠さず言ってもらいたい。決して、自分は嫉妬などはいたしません。ただ、隠しだてをされていると思うと、悲しくなる。濃姫はすすりなきながら、そういうのであった。

信長は、そういわれるとにやりと笑った。

「濃姫、わしに女はそち一人じゃ。どんな美しい女を見ても、わしは、心を動かしたことがない」

「それでも、毎夜おでかけなされるのは？」

「うむ、面目ないが、わしは、女より男が好きなのじゃ」

「男と申しますと……」

「うむ、数々あるが、青山、斎藤、村田とい



う連中じゃ」

青山、斎藤、村田というのは、いずれも、年若い近侍の者である。そういわれても、濃姫には意味がわからなかった。これらの美少年と信長が、いったい、何をして遊んでいるのか、さっぱり見当がつかないのであった。しかし、女に關係がないと知ると、ほんとと安堵の胸をなでおろしたのである。

こんなわけで、信長が妻の濃姫に対して、本当に夫となったのは、結婚後、父の信秀が

死んでから、濃姫の積極的な攻勢に合って、やむなく応じたのである。

「女はつまらん。女ぐらい、きたないものはない」

それが、信長の女性感であった。

だから、信長は、秀吉や家康が好色で有名であったのにくらべると、不思議なくらいに艶聞がない。

ところが、彼の乱行は、女に対して向けられなかった代わりに、美少年や美青年に向け

られていた。美しい若者と見ると、彼は容赦なく自分の性欲の犠牲にした。

彼の晩年で、もっとも愛したのは、明智光秀と森蘭丸の二人である。ことに明智光秀との交情は、とくに長くつづき、二人の間柄はただならざるものがあつた。

明智光秀は、妻のある身であるのに、妻をかえりみず、主君に肌をもつてつかえ、ひところは、信長あるところには、夜となく昼となく光秀の姿が見られた。

信長は一時、病的に男色を愛して、陣中といえども、光秀と醜態をさらけ出して、たびたび家臣の顔をそむけさせた。

だから、柴田勝家なども、「柴のけむり」

という随筆のなかで、

「君のからだにさはりなきかと思へども、女人をうとむ性なれば、しひて遠ざくるは道ならず、我も人とともに、嘆きしこと、しばしばなり」と言っている。

光秀との愛情がやや下火になったころ、あらわれたのは、森蘭丸である。蘭丸は、森五郎左衛門が京都のみまという女に生ませた隠し子で、当時、京都小町といわれたほどの美女の腹に生まれた男だけのことはあって、水

もしたたるばかりの、美少年であった。

人あって、蘭丸をお小姓にとり立てたとき以来、信長の心は、すっかり彼に寄せられてしまい、それと同時に、光秀に対する愛情は煙のように消えさってしまったのである。

ほんとうに、蘭丸の美しさは、歴史上まれに見るほどのものであったという。〃柴のけむり〃にも、

「女に見まがふばかりと言はんもさらなり。女にもかかるうるはしき女はあらじ。君の溺れ給へるも、決して故なきにあらず」と書いている。

ずいぶんたくさんの女が、蘭丸に思いをよせたようであったが、信長の寵児となるや、女たちは、もはや高嶺の花とばかり、彼を見るようになったから、蘭丸は、死ぬまで、女一人を知るよしもなく、ただひたすら、信長から肌を愛されて、自分でも満足していたようである。

文泉三年、万招寺で、故信秀の法会があった。その日、万招寺の境内で、光秀と蘭丸の最初の鞘当てがあった。

「蘭丸。貴殿は、心をもって君に仕えるのか、それとも尻をもって仕えるのか」

光秀の言葉には、トゲをふくんでいた。

「これは異なることを承る、光秀様。蘭丸、何しにもって尻などと……」

「いうな、蘭丸。おのれ、君の寵に満心して光秀を愚弄致すか」

光秀は鉄扇で、蘭丸の腰のあたりをぐいとついた。鉄扇でつかれたのだから、蘭丸は苦痛のあまり、その場にどっとたおれた。

嫉妬に燃え狂った光秀は、蘭丸に馬乗りになり、彼のハカマを引っさいて、蘭丸の大切な場所にさんざん痛い目を見せたのである。

忠実によれば、光秀が信長のために眉間を割られたのは、文泉三年三月五日、その夜の出来ごとであった。彼は、絶望と憤怒のために、ギリギリと歯ぎしりした。例の本能寺の事件は、こうして起きたのであった。

嫉妬に狂った光秀は、本能寺に夜襲を計画し、まず蘭丸を一刀のもとにたち切って、次いで信長を暗殺した。

色の道ともなると、いずれも同じで、女色も男色も、大して相違のないものである。

信長は、あたら男色に耽溺したために、長い生涯を、だいなしにしてしまったもののようである。

宮内庁に秘蔵される奇書の
一字の伏せ字なき完訳版！

医心方

房内記

乾・坤全二巻を収録

丹波 康頼・著
原 一平・訳

定価 二五〇円(送料)

本書は、中国の黄帝とその女医素女の共著で、日本では円融天皇の時代に、天皇御用の医者たちが、「日本伝統の奥義にあわせ」て天皇家用として著わしたものの。原本は現在でも宮内庁に秘蔵されているという。閨房の秘戯、テクニク、性欲増進の秘薬の処方など、性愛に関する、あらゆる心得を教えている。

本書はその完訳、限定版であるが、「東京都千代田区神田神保町一・星文館」風奇係「あてお申込みくださればお取次ぎします。図書目録進呈

◀週刊新潮・文芸春秋にとりあげられた問題の書▶

尻掘り番頭

花島 清次

(女) 同士の転倒的性欲、つまり、わかりやすくいえば「女の同性愛」では、むかしから、「ト一ハー」という方法が行なわれていた。要するに、お互いに、その肉体の鋭敏な感覚帯に刺激を与える方法である。現代風に

シャレていえば、ソワサント・ヌーフはフランス語であり、シックスティ・ナインなら英語というわけである。

女の同性愛の場合は、そういった相互オナニー式が多かったし、また現在でも多いのだが、それを「ト一ハー」とは、まったく粹な言い方ではないか。

それに対して、男性同士の転倒的性欲、すなわち、「男の同性愛」では、鶏姦つまり男色が、いちばん多く普及(?)していたようである。

その証拠には、湯島とか芳町、芝神明前は

「陰間」の岡場所として有名であった。僧侶が多く通ったのだが、

裏門は情がうすいとげんが言い

という川柳で皮肉っているくらいである。

げんとは坊さんのことをいう遊里ことば。

(さ) て、その陰間だが、これまた古くから行なわれていたことで、ことに織田信長のそれは有名である。その信長のことで、

松永の釜を信長ころがけ

という古川柳がある。つまり松永弾正の持っていた「平蜘蛛」という名器を信長が欲しがったわけであるが、それと同時に、衆道をとネラったというわけである。

それは、ともかくとして、江戸時代におもしろい話がある。

(弘) 化二年の暮れごろから、江戸市中の子供たちが、

へ島屋の番頭、尻掘り番頭、小僧は難儀、早桶だんノウ、丸焼きだんヨウ

というわらべ歌を、口々にはやしたてて歌っていた。そのいわれは、「藤岡屋日記」に次のようにある。

「天保十五辰年五月五日のことであるそうだが、小伝馬町一丁目の島屋吉兵衛という呉服屋があった。その番頭で、上州者(群馬県人)が、小僧の後門を男色し、小僧を気絶させてしまった。そこで、小僧の親から嚴重な掛け合いがあり、金で解決はついたものの、番頭はヒマを出されてしまった。

その番頭が、のちに吉原の川津屋に住み込んだが、こんどの火事(弘化二年十二月十五日)は、京町二丁目の、その川津屋鉄五郎方が火元で、郭中が全焼で、丸焼けになってしまったので、このわらべ歌がうたい出されるようになった」

このわらべ歌の流行によって、毎日、島屋へ番頭を見物しに集まるので、営業に差し支えて、とうとうしばらく店を閉じたという。それほど大評判だったので、その後「島屋の番頭」という語が男色の代名詞として使われたいくらしいである。

△女性同性愛実話▽

白い肌同士の陶酔

神 山 孝 吉

新入社員の教育係

角田邦枝(25歳)と正木房子(23歳)がはじめて顔を合わせたのは、四年前、大阪北区の某鉄工場であった。当時、邦枝は経理課に勤めており、新入社員として同課に配属となってきた房子たちの指導に当たっていた。そこで、とかく口うるさい女子社員の間では、「なによ、威張りくさってさ。ほんとに、いやらしいいったらありやしない」

とヒガんで陰口をたたくものも少なくなかった。しかし邦枝は、実によく、親切、ていねいに、手を取り足を取って、新入女子社員を教えた。いや、教えたというより、面倒をみた、といったほうが、適切な言葉かも知れない。

なんといわれようと、見ていようがいまいが、ただ黙々と、新入女子社員の世話をやく邦枝を、上司も捨てておくはまらない。新入社員の三月の教育が終わるのを待って、邦枝に破格の昇給があった。これがまた、同僚間のネタミの的となった。

もっともそれには、邦枝にも全然責任がないとはいえなかった。その容貌は十人前だが、一見非常に冷ややかで、秀才型だったことや、自分から求めて、同僚のなかに飛び込んでいき、友人を作ろうとしなかったこと、仕事を命じられてもソツがなく、いつも同僚たちとかけ離れた存在にあったことが、その反感を買うところとなっていたのだ。そんなふうには邦枝が同僚と交際を持たず、ただ一人孤立していたことは、

「おかしくって、私たちと、つき合えないのや。お高くとまりくさって、おもしろくもない」

といわれる原因をつくっていた。だが、邦枝としてみれば、持って生まれた性格なのだから、なんといわれても、一朝一夕に改まるものではなく、そのため、ずいぶんと努力もしてみた。このことが、なおさら、邦枝に不利を招かせた。

「いまさら頭をさげて貰わなくてもええわ。仲間はずれにされるのがいややったら、はじめからおとなしゅうおつき合いすりゃいいやないの」

陰でこういわれているのを聞いて、邦枝はそっちがその気ならこっちだつてと腹を立てそれ以来、同僚たちへの仲間入りを断念した。



それからというものは、ことごとくに意識的に対抗することさえあった。そのことは、同僚たちの不興を買い、ますます反感をあおった。そんなことは、邦枝も百も承知のうえのことであつたから、涼しい顔でみていた。

房子たちが入社してきたのは、ちょうど、そのころで、そんな邦枝をみて、「なんていやなヤツだろう」と思ったのは当然のこと。しかも、この邦枝が、新入女子社員の指導者と知るに及んで、

「なんてことだろう。あんなガリガリに教えられるんじゃ、先が思いやられる」

と仲間たちとささやき合った。ところが、

実際に邦枝に接してみても、

「おや？」

と思った。それでもまだ、邦枝を完全に信用することができず、

「そのうちキジを出すにきまっている。親切

ごかしはじめのうちだけなんだ」といふかった。

ところが、その心配は全くなかった。一日

たち、二日、三日、一カ月と過ぎたが、邦枝は相変わらず、だれかれなく、わからぬことはわかるまで教えてくれたし、その教え方もよくわかるよう、まことに親切だった。

房子が、邦枝に一番感心したのは、骨身をおしまないこと、責任感の強いことだった。

そうしたことを次第に知っていくにつれ、

新入女子社員のなかで、邦枝を悪くいうものは、一人もいなくなった。純粹で、多感な乙女たちだけに、その人柄がわかると、邦枝への尊敬の念も早かったのだ。その結果は、新入女子社員と、まえからいる女子社員の感情的な対立が、必然的に生まれてきたが、邦枝

はそれにつれて、

「なんといつても、古くからいる人には、可愛がって貰うことです。それに、団体生活のなかで一番大切なことは、融和です。このことだけは、決して忘れないでください」

といい、かなり気を使っていた。

房子には、こういう邦枝の気持ちがよくわかった。それだけにまた、可哀想な人だと思った。邦枝がそんなことをいった日、偶然、房子は帰りぎわに、会社の門の外で、邦枝に会った。

「お帰りになるのね。あなた、天満から電車でしたわね。私もなの。それでいて、一緒になったこと一度もなかったわね」

「ええ、わたくし、角田さんが同じ電車を通ってらっしゃると思ひもしてませんでした。これからせいぜい気をつけて見ますわ」

「私も、あなたの帰るのを見て思ひ出したんですもの。知らないあなたが、私に通っているのを知るはずないわ。私ってウカツね。これからは、お友達が乗っていると思うと、気が強いわ」

恐らく、邦枝の会社での友達というのは、あとにも先にも房子だけだったろう。

末っ子と長女

それ以来、邦枝と房子は、影の形に添うように、会社の行きも帰りも一緒だった。そして、それは房子の三カ月の教育期間が過ぎ、邦枝の昇給があったのちも同じで、新入女子社員のひとつしく羨望の的でもあった。邦枝の同僚はこれを見て、

「だれも相手にならんさかい、新しい娘を手に入れたんや」

とか、ひどいになると、

「きっと同性愛なんやで。二人でよろしゅうやってんのさ。あの人ならやりそうなことやない。その証拠に、みてみ、新しい娘、ちょっと可愛いやない」

といっていた。これは、むしろ二人の耳にも入った。それを聞いて房子はカッとし、

「あることないこと、あんまりいわんといてよ。私たちがどうだろうと、あんたたちに関係のないことやない。あんまりよ、角田さんが可哀想やわ」

と食ってかかったこともあったが、邦枝は、「いいたいものには、なんとでも言わせておきなさい。相手になるだけ腹が立つものよ。」

私のことだったら、心配しなくてもいいの。馴れっこになっているもの」

逆に房子をなだめた。これがよけい房子を邦枝にひきつけた。

「可哀想な角田さん……」

房子は、心からそう思った。その邦枝は、カユイところに手が届くように気を配ってくれる。それやこれやで、つい房子は甘えてしまふ。邦枝も、それを喜ぶ。こんなことから、ある日、房子は、

「私、これから、角田さんのことをお姉さんて呼ぶわ。だって、実際そうなんですもの」と邦枝にいった。それに対して邦枝は、いとも、悪いともいわなかった。ただ、いつもの親しみに満ちた微笑を浮かべて、房子の茶目っ気を見守っていただけだった。

房子が、邦枝を姉さんと呼ぶということは、あながち、茶目っ気ばかりからではなかった。四人兄妹の長女として生まれた房子は、姉というものを知らなかった。同じ年ごろの娘で、

「お姉さん」

と呼ぶ言葉を聞いたたびに、房子は、「自分にも姉さんがあったらなあ」

と思った。その、望めない願いを、邦枝でかなえようとしたのだ。

しかも邦枝は、房子のマボロシの姉にびつたりだった。優しく、いたわってくれ、いつもうしろから、影のようについてきてくれる。問題は、血のつながりがないだけのことだった。そんなものはどうでもいい、血のつながった姉妹でも、喧嘩もするし、ときには新聞沙汰になるようなことを仕でかすではないか。

とにかく、そんなわけで、その日から房子は、邦枝のことを、

「お姉さん」

と呼ぶようになった。これが、二人の間にさらに親愛の度を深めていた。

邦枝は、そんな房子が可愛くてならなかった。これは慈母の子に対するようで、一にも二にも、

「房ちゃん」

となった。邦枝は、房子の場合とまったく逆で、五人兄妹の末っ子。それに、幼くして母親を失い、義母に育てられた。その陰性な性格は、案外こんなところにあるのかも知れない。だから、母親の愛というものは知らない。

かった。それだけに、愛情には人一倍うえていた。

しかし邦枝は、その愛情を与えてくれる相手に、不幸にして恵まれなかった。そりゃ会社の社員で、邦枝をネラってモーションをかけてくるものもあったが、根が引っ込み思案で交際べたな邦枝だけに、結局は、そのままオジャンになってしまった。

そんな自分を邦枝は、なんて馬鹿なんだろう、と思うことも一度や二度ではなかった。

そうはいっても、その性格がすぐ直るものでもなく、しまいには、半ばあきらめていた。

と同時に、邦枝に触手を伸ばす社員もなくなってしまう。そしてその揚句の果てが、変人扱いであった。

それでも邦枝は、じつと歯を食いしばって我慢した。普通なら、とっくの昔に会社をやめているはずなのに、なお踏みとどまっていたということは、多くの人のなかには、邦枝を知っていてくれるものもあったからだ。

こんな邦枝が、新入女子社員にもそうだが、とりわけ、房子に愛情を湧かさないうけがない。とくに房子に対しては、盲愛といっていほど、その愛情を傾けていた。だが、この

二人の愛情は、多分に、危険なものを含んでいた。

はじめての陶酔

邦枝の異性との接触のないこと、それに房子の異性をみる目の成長が、二人に同性愛を次第にはぐくませていったのだ。当初、邦枝は、房子が可愛くてならなかったことは、考えようでは、稚児ちごに対する大名と似たものがあったといえるし、房子が、邦枝を姉さんと呼ぶに至った過程にも、邦枝のなかに房子が男性を、よみがえらせていたとも思える。

一昨年の夏のことだった。二人は、会社が退けてから、帰りに御堂筋で映画を見た。冷房がきいているとはいっても、夏場の映画館はがら空きだった。二人は、そのなかで、仲よく映画を見ていたが、スクリーンにキッスの場面が映し出されるや、突然、房子が、

「お姉さん、キッスしたことある」

と、そっとつぶやいた。

「ないわ。だれも相手にしてくれないんだもの」

「そう」

「あなた、あるの」

「私も、お姉さんと同じ。ね、お姉さん、二人でしてみない」

「あなた、それ本気」

「本気よ。ね、だれもないわ、ちょっとしてみましよう」

房子は、唇をとんがらせて目を閉じ、ぐつと邦枝に肩をもたせかけてきた。それをみて邦枝は、なぜか胸が激しく波打った。もう、そうになると、なまじっかの理性では、制止できなかった。

邦枝は、ぬめるような生々暖かい唇の感触を知るとともに、自分が異常に興奮しているのを悟った。房子も、唇を吸ったまま肩で息をしていた。二人は、無言のうちに、ながいながい接吻を、二度もくり返した。

唇を離れたあとにも興奮はおさまらず、それでいて、精も根も使い果たしたといった格好で、動くことさえおっくうだった。それは二人とも同じだった。

このことがあってから二人は、よく接吻し合った。そのときの房子、邦枝は、狂おしいばかりで、互いにひしとかい抱いたまま、身をもがくほどだった。

二人が、日曜をかけて白浜に遊びにいった

のは、その年の九月のこと。つかれた身体を夜、旅館の湯槽にひたしながら、二人は接吻をくり返していたが、

「ね、房ちゃん。夫婦の営みって、知ってる？」

ふいに邦枝がいった。

「大体わね。お姉さんだって、ほんとのところは知らないでしょう」

「当たり前よ。結婚したことも、男の人と関係したことも、ないんですもの」

「じゃ、処女ね」

「ええ、あんたもそうでしょう」

「うん。でも、私……」

房子は、ためらった。瞬間、邦枝は、ハハソとうなずいた。自慰を気づかっているのだと思ったのだ。これを知ると邦枝は、

「お部屋にいったって、いいこと教えたげるわ。

あなたのきつとよろこぶこと」

といった。房子も、うすうす承知はしていたが、

「なによ、いいことって」

と聞いた。

「いまは内緒、お部屋でね」

二人が部屋に戻ると、すっかり夕食の支度

ができていた。それをみて邦枝が、

「あら、ちゃんと支度ができているわ。ねえ房ちゃん、暑いから、お食事の前にビール一本飲まない」

「そうね、こんなときでなきや飲めないわ。大賛成よ」

といった。そこで邦枝は、改めて女中にビールを注文し、それがくると、房子と差し向かいで、飲んだ。これが房子に、よほど気に入ったらしく、

「ちょっとした新婚気分ね」

とはしゃいでいた。一本のビールを一時間もかかって飲み、やっと食事を済ますと、十時を過ぎていた。

女中が、食事のあと片付けをし、布団を並べて二つ敷いて出ていくと、ほんのりマブラを赤く染めた邦枝が、

「さあ、房ちゃん、寝ましよう」

こういつて先に布団のなかに入った。この邦枝を見習って、房子が、その横に敷かれた布団のなかに入ろうとすると、

「房ちゃん、今夜は一緒に寝るのよ。さ、いらっしゃい。さっき風呂場でいったでしょういいこと教えてあげるって」

といった。

「お姉さん、ほんとに一緒に寝るの」

信じられない、といった顔付で房子が聞くのに、邦枝は、

「いやなの。でなかったら、早く……」

房子は、邦枝にいわれるまま、その布団のなかに入った。それからあとのことは、恥ずかしいことばかりだったが、それはまた、かつて味わったことのない、陶然たるものだった。その最中、喘ぎ、身体をくねらせている房子に、邦枝は、

「こんなこと、ちっとでも恥ずかしがることありやしない。男と女は、みんな誰もしていることなのよ」

そっとつぶやいた。そんな言葉のうちにもはつきり、房子が身をもがいているのが、邦枝にはわかった。

このときを契機として、邦枝と房子は、激しい同性愛愛好者となり、町をすっかり手をつないで歩くことはもとより、人目のないところに出れば接吻、抱擁をくり返し、ときには感極まってペッティングに進むことも珍しくはなかった。

このころになると、当然の結果として、邦



枝にとって房子は、かけがえのないものだったし、房子も邦枝とは不可欠の間柄になっていた。それにつけても、この二人の同性愛は男の役柄は、邦枝だったし、女役は房子だった。したがって、これを夫婦にたとえようと、夫は邦枝であり、妻は房子といったところだった。

縛って打って

邦枝に結婚話が持ち上がったのは、房子との仲が頂天に達したその年の十二月。ことがこれだけに、房子に隠しておくわけにもいかず、そのことを話すと、

「いやよ、お姉さんを男に取られるなら、私は死んで、二人にたたってやる」

と凄じ剣幕で、とりつくしまがなかった。

それでも、やっとのことで房子をなだめ、「今夜、二人で旅館にいったってゆっくり話し合いましょう。お互いに、今後のことがあるんだから」

と邦枝はいった。房子もこれを承知した。会社が退けるのを待って、二人はミナミに足をのぼし、小じんまりした旅館をみつめてあがった。女中に案内されて、部屋に入るな

り、房子は、女中の出ていったのを見届け、

「お姉さん、ハダカになって」

と、やぶから棒にいった。

「どうするの」

「いいから、なってよ、早く」

不承無承ハダカになった邦枝をみると、

「手と足をいわくわよ。そして、悪いけど、

口もハンケチで、声がたてられないようにするの」

といいながら、手足を、邦枝のバンドや紐で縛りあげ、最後に、自分のハンカチを取り出して猿ぐつわをはめた。

「さあできた。あとは、泣こうとわめこうと私の知ったことじゃない。あなたが二度と変な気を起こさないように、ちょっと痛めつけてやるのよ、わかったわね」

その言葉が終わるか終わらないうちに、部屋の片隅にぶらさげてあった衣紋かけを取ったかと思うと、シユミーズまで剥ぎ取った、白いむっちりとした肉体めがけて、ピシッと振りおろした。

「あっ、う……」

まっすぐにすわっていた邦枝は、前にのめってうめいた。それに向かって、さらに一撃。

「うううん」

また打ちおろした。こんどは邦枝は、声も出なかった。それをさも憎らし気にみて、

「これでもか、これでもか」

と、一回、二回、三回と思いきり打った。

そして、ちょっと邦枝の顔をノゾき見して、

「わかったか。まだ変な気を起こす気か」

といったあと、

「この痛さをよくおぼえておけ」

といって、もう一度強くピシッと打った。

房子が、邦枝の縄を解き、猿ぐつわをはず

したときには、邦枝は、半ば失心していた。

しかし、それほど痛い目にあいながらも、邦枝は、不思議と、痛いとは思わなかった。か

えて、そうされることによって、得体の知

れない魔力が、ひしひしと身内ふかく感じら

れるのだった。

邦枝と房子の変態的行為は、これに端を発

し、二人の仲は、これによって一段と固く結

ばれていったわけだが、このころになると、

二人の評判は、会社のなかで相当ひろまっ

いた。それをみるにつけて、

「相当な心臓やわ。普通だったら、とっくに

やめるのが当たり前よ。それを図々しく、毎

日知らん顔して出てくるなんて」

などというものもあったし、邦枝も房子も、

上司に呼びつけられて、

「まさかとは思うが、二人とも結婚まえなん

だから、変な評判を立てられないようにして

くれ。これは、会社というより、君たちの親

ごさんたちを思っただことだが……」

といわれたこともあった。そんなわけで一

時は、二人も会社のなかだけははばかって、

そ知らぬ顔をしてみたが、それはながくは続

かなかった。

そうしたことあったか、今年になって、

会社の不況を口実に、邦枝と房子はクビにな

った。そこで二人は、相談した結果、

「会社をやめれば、いままでのように会って

もいられないし、どうせ、こんなうるさい世

の中なら、いっそ死んで、あの世でしあわせ

になろう」

ということになり、二人ではじめて泊まっ

た白浜の旅館を訪れ、そこで、しっかり身体

を寝巻きの紐でゆわえ合って、プロバリンを

飲んだ。

翌朝、女中がみつけたときは、二人は笑顔

さえ浮かべていたという。

絵姿フェチズム

洪川

久

肖像姦というのがある。変態性欲の一種で、絵像性フェチズムといわれるやつである。異性の立像に恋着心を抱いて、これを汚瀆するピグマリオンズムに似ている。

「古今集」の序に、遍照僧正の和歌を評して「歌のさまは得たれども実少なし、たとえば絵にかける女を見て、いたずらに心を動かすごとく」とあるが、単に美人の絵を見て心を動かしただけでは、変態性欲ではあるまい。

「太平記」には、一の宮の源氏の優婆塞宮の女の絵姿に恋いこがれて病いになったという、それに近い部分があるので、次にぬいてみよう。

「洞院左大将のいだされたりける絵に、源氏の優婆塞宮の御女、真木柱に居隠れて琵琶をしらべ給ひしに、雲隠れしたる月の、

俄かにいとあかくさし出でたれば、扇ならして招くべかりけりとて、撥を挙げてさしのぞきたる顔つき、いみじくらうたけて、にほやかなる気色言ふばかりなく、筆をつくしてぞ書きたりける。一の宮この絵を御覧ぜられ、限りなく御心の懸かりければ、この絵をしばし召し置かれ、見るに慰む方もやとて、巻きかへしまき返して、御覧ぜられども、御心さらに慰まず。(中略)あやにくなる御心胸に満ちて、限りなき御物思ひなければ、かたへの色異なる人の御覧じても、御眼をだにもまはされず、云々」

江戸時代の小説には、絵姿恋愛を一つのエピソードとして使っているものも少なくない。

西鶴の「三代男」には、陸奥のある名家の女が、絵にかいた美男の姿に愛着して都

へ上り、その男にめぐり合って契りを交わしたという話がでてゐる。

また、山東京伝の「安積沼」には、平清盛が厳島弁天の絵姿を恋いしたった話や、隠士千代鶴が、石山寺に参詣して紫式部の絵姿に恋いこがれた話がでてゐる。

「お伽百物語」には、京都の儒生篤敬という男が、名匠・菱川師宣の描いた衝立の美人画に恋したところ、その美人が、絵からぬけ出て、篤敬と夫婦になったという話がある。だが、これは、瘦啓という書生が、絵美人と契るといふ支那の小説の、たぶん翻案であろう。

絵像そのものに恋着するのではないが、愛人の姿を絵に描いて、恋いこがれたというのには、「本朝二十四孝」の中に、八重垣姫が、愛人勝頼の絵姿に向かつて、「回向しようとして、お姿を絵には描かしはせぬものを、魂かえす反魂香、名画の力もあるならば、可愛いと、たつた一言のお声が聞きたい、お声が聞きたい」と恨みごとをいうくだりは、よく人に知られた話である。

マゾッホの被虐待契約書

間瀬 照 夫

ザッヘル・マゾッホは、マゾヒズムの名を生んだ、その道の元祖とされている。西暦一八三六年に生まれ、一八九五年、六十歳で没した。

彼の祖先は、スペインの出で、数代前から、オーストリアのプラークに移住していた家である。父は、レンベルグ市の警察部長のような重職を勤めていたので、マゾッホは、その官邸でココの産声^{うぶごえ}をあげたのである。

幼いときから身体は虚弱であったが、とにかくも法科大学の課程を終了して法学士の称号をとり、二十歳のときには、出身大学の講師となった。成人してからは、背が高く、薄着が好きで、貴公子然たるやさ男であったという。

三十歳のころから盛んに小説を書いたが、その著作の中には、マゾヒズムの傾向が露骨に記述されていたので、世間は奇異の目で迎えると同時に、もてはやした。

マゾッホは二度結婚した。最初の妻はリュメリンであったが、彼女との間柄は、はじめは情人関係であった。そして、のちになって

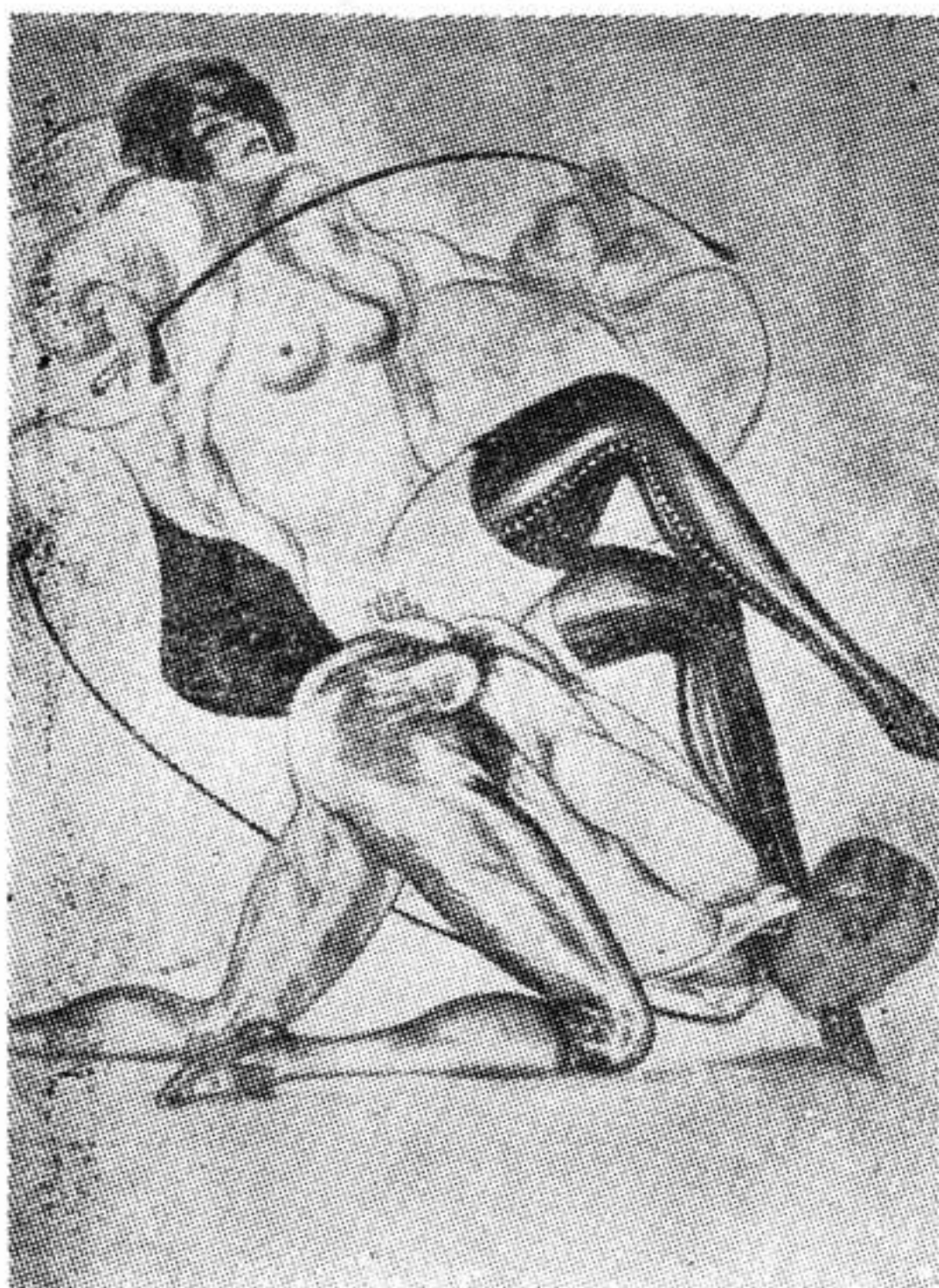
正式に結婚したのである。

二人の関係は、そもそものはじめから、マゾヒズムの傾向がいちじるしく現われていたが、これはどうも、夫人の閨中の魔力で、いよいよ強くなっていたものらしい。

彼が、リュメリンと結婚したのは二十七歳の時であるが、それ以前に彼は、有名な「毛皮を着たヴィナス」を発表している。この小説の主人公ワンダ・フォン・ズナエフは、すなわち、リュメリンのちのフォン・コトウィッツ夫人をモデルにしたもので、このワンダのドレイとなり、犬のようにそのムチのもとに喜んで忍従したセヴァリンこそ、マゾッホ自身のことを書いたものである。

このマゾッホも、恐らくは、はじめは空想まじりに、この種の小説を書いているあいだに、だんだん自己暗示にひき込まれ、自身の中に眠っていた変態的傾向をいっそう強めることになっていったようである。

そして、この「毛皮を着たヴィナス」が多くの人々に読まれるにつれて、マゾッホ夫人は、フォン・コトウィッツという名前よりも



この小説の主人公のワンダという名で、世間から呼ばれるようになった。

ここで考えられることは、このワンダが、もう少し教養があり、理想をもつ夫人であって、夫をうまく操縦したとしたら、あるいはマゾッホも、あのように病的な変態性欲の持ち主とならなかったのではなからうか、ということである。ワンダは、マゾッホが、自分にドレイのように服従し、どんなムチでも喜んで受けることを、内心おもしろがり、ますますマゾッホの変態的性向を強めるようにしていったようである。

その結果、マゾッホは、身体的苦痛を受けるだけでは物足らなくなり、その小説に書いたように、妻をわざわざ他の男と姦通させ、

姦夫といっしょになって自分を虐待することを望んだ。

ワンダが、マゾッホの意志に従って、いやいや姦通したのかどうかは少々疑わしいが、とにかく彼女は、ローゼンタールと通じ、しきりにマゾッホを虐待した。だが、ワンダとローゼンタールが仲違いするに及んで、マゾッホも、ワンダに対する興味を失ったものか離婚してしまった。

そこで、マゾッホは、二番目の夫人フィルダ・マイステルと結婚した。ところが、この夫人は、どんな夫操縦法をしたものか、この第二の結婚後は、マゾッホに、マゾヒズムの傾向は消失してしまい、おもしろい逸話を残していないようである。だが、毛皮に対するフェチズム（節片淫乱症）だけは、もちつづけたようである。

こう見てくると、変態性欲というものは、その発展持続には、相手となるべき配偶者の仕向け方いかんが、その消長に大いに影響するということがわかる。そしてマゾッホも、年中、変態的方法ばかりに終始したわけではなく、正常の性愛生活も送っていたようである。その証拠に、ワンダとのあいだに子供が生まれていることでもわかる。そしてワンダの書いたものによると、マゾッホは、この第二夫人とも、まもなく離婚してしまったということである。

ところでマゾッホは、身体的なマゾヒズムだけでなく、精神的な面でも、その傾向を発揮していた。その実例として、マゾッホが書いたと伝えられている、片務的被虐待の契約書の代表的な三通を、ここに紹介しよう。

まず、マゾッホが三十三歳のときに、当時の友人フォン・ピストル夫人に与えたものだといわれるもので、シュリヒテグロールが公けにしたものである。



ファンニー・フォン・ピストル夫人とザッヘル・マゾッホとの間に締結した契約書

レオポルド・フォン・ザッヘル・マゾッホは、誓ってフォン・ピストル夫人の奴隷となり、夫人のいかなる求めにも、いかなる命令にも、絶対に服従することを、ここに堅く約束する。ただし期間は六カ月とする。

しかし、ファンニー・フォン・ピストル夫人は、レオポルドに対して、破廉恥な行為をすることを命じてはいけない。つまり人間として、また市民としての名誉を失うような行為を強制することはできない。なお夫人は、レオポルドが自分の所用を果たすために、一日に六時間を限って自由を与えることとする。また、レオポルドの日記および来信などを見ることはできない。レオポル

ドの怠慢、義務不履行、とくに夫人に対して反逆心を抱くことに對しては、ファンニー・ピストルは、その奴隷レポルドを、自分の思うままに嚴重に処罰する。

要するに、その女主人公に対して、あくまでも奴隷的従順さをもって仕え、そのかりそめの親切といえども、この上ない喜びとしなければいけない。かりにも、女主人の愛を求めたり、また、その愛人であるからという権利をふりまわしてもいけない。

ファンニー・ピストルは、これに報いるに、できる限り頻繁に、かつ、レオポルドを残忍に扱うときは必ず毛皮の衣装を着ることを約束する。

(六カ月を経過した時は、この奴隷契約は自然に無効となり、これについてお互いに代償を申し出てはいけないこととする。過去の出来事はすべて水に流し、ふたたび以前どおりの恋愛関係に復帰するものとする) (この部分は、のちに抹消された)

ここにいう六カ月間とは、コヨミの上で継続した日数をいうのではなく、つごうによって中断しても差し支えはない。つまり夫人の勝手次第で、思う日にやめ、一時中断ののち、また勝手の日に、ふたたび開始しても差し支えない。

一八六九年十二月八日よりはじめ

ファンニー・ピストル・バクダノフ

レオポルド・リッテル・フォン・ザッヘル・マゾッホ

ワンダ・フォン・ズナエフ夫人とマゾッホの間に交わされた契約書

わが奴隷よ、わたしがおまえを奴隷として採用し、側近において



やるについては、左の条々を堅く守ること。

一、絶対に自我を捨てよ。

一、おまえは、わたしに奉仕する以外、どんな意志をもっていない。

一、おまえは、わたしに盲従する道具以外のものではない。わたしの命令にはすべて口答えることなく、必ず服従しなければならぬ。もしおまえが、わたしの奴隷であることを忘れ、従順の務めを欠くときは、わたしは、権利として、わたしの欲するままに、おまえを処罰し、こらしめる。おまえは、これについて一言も恨みごとを言うことはできない。

一、わたしがもし、おまえに愉快、幸福の思いを与えることがあ

れば、それはこの上ない恩恵と心得て、感謝三拝して有難く受けよ。しかし、わたしは、おまえに対して、なんの義務も責任も負うものではない。

一、おまえは、わたしにとって、子供でもなく友だちでもない。ただ、わたしの塵にも等しい奴隷であるだけだ。

一、おまえの肉体だけでなく、おまえの精神もまたわたしのものであるから、したがって、おまえの感覚も感情も、わたしの思うままに苦痛をなめさせることもある。

一、いかなる残虐の行いも、わたしには許されている。おまえを虐待のあまり不具者にするようなことがあっても、決して恨んではならない。おまえは、どこまでもわたしの奴隷として労働しなければならぬ、わたしが足でおまえを踏みつけたとしても、恨むことなく、その踏みつけた足に接吻しなければならぬ。

一、わたしは、時によってはおまえに自由を与えることがあるかもしれない。しかし、わたしの許可なく、一瞬たりともおまえはわたしの側を離れることはならない。もし、わたしから逃げようとするようなことがあれば、わたしは、最も残酷惨烈な処刑を課し、そのためにおまえを死に追いやったとしても少しの差し支えもない特権をもっている。

一、おまえは、おまえ自身がなければ、なんの権利もないのだ。

わたしは、おまえのすべてのもの、すなわち、おまえの生命、おまえの将来、おまえの幸福、おまえの不幸、おまえの苦痛、おまえの快楽など、すべてのカギを握っている。

一、わたしが求めることは、良かれ悪しかれ、何事でも、おまえ

は即座に実行しなければならぬ。わたしが、おまえに犯罪を犯すことを命令したならば、わたしのために、おまえは、法律をも犯すことをしなければならぬ。

一、おまえの名誉は、おまえの血、おまえの精神、おまえの労働力と同じく、すべてわたしに従属する。わたしは、おまえの生殺与奪の特権をもっている。

一、もしおまえが、わたしの支配に堪えられず、奴隷のクサリを重すぎると感じたならば、自殺せよ。わたしは、どんな場合でも、おまえに自由の解放を与えることはしない。

追記 私儀、誓って、ワンダ・フォン・ズナエフ夫人の奴隷として、いかなる要求にも、決して抵抗または違背いたさないことを誓約します。

ドクトル・レオポルド・リッテル・
フォン・ザッヘル・マゾッホ

これもまた、シュリヒテグロールが公けにしたもので、マゾッホと最初の夫人ワンダとのあいだに取り交わされたものであると、言われている。

あて名のない契約書

本日、X女とY男とのあいだに、次の契約を結ぶものなり。

一、Y男は、X女を心から愛し、かつ敬することを宣言する。

二、Y男が、もしX女を愛せないようになったら、それを公然と敬意をもってX女に宣告しなければならない。

三、Y男がX女を愛する限りは、Y男は、X女の許可なくしてA市を離れてはならない。

四、X女は、Y男がその側にいるときは、いつもビロードの上着を着ていること。

五、X女は、たとえ他の男と肉体的愛欲に陥ることがあっても、Y男と離れてはならない。

六、X女は、自分の氣にいった、どんな男と相許してもいい権利を有する。そして、X女がこの男と交歓するあいだは、X女はY男を友人または崇拜者として遇することなく、奴隷として遇するものとする。Y男が嫉妬するときは、とくにムチをもって叩打するものとする。

七、X女が、もしY男を愛せないようになったときは、それを公然と敬意をもってY男に告げ、Y男が、X女との将来の交際を思い切るか、またはX女の奴隷としてなおその側近に止まるか二つのうちの一つを選ばねばならない。

八、Y男は決して二度とふたたびX女と仲直りしてはならない。

九、Y男は一編の詩をつくり、その中で、X女を賛美して歌い、かつ、この詩をX女に捧げること。

X Y 署 名

これは、クラフト・エーピングが手に入れたものである。恐らくマゾッホが、どこかの女と取り交わそうと考えて、かねて腹案として考えていた草稿ではなからうかと、エーピングは言っている。それにしても、文中、毛皮というかわりにビロードの上着という字が使われているところが、疑わしい点である。

△諸者入選作▽

マゾヒストの美酒

真 崎 伸 一

ノゾキ部屋

私は、偶然の機会に、マゾヒズムの実体というものをこの目で見る経験をしました。ある男に誘われた結果なんですが、それがまた奇妙なことでした。その男というのが、自分が、女にいじめられるところを私に見せたというわけなんです。

あとで考えてみれば、彼としたら、私に見せることによって、より快感を満足させようと思ったのかも知れませんが、ともかく、ちよっと珍しい体験でした。まあ、聞いてください。

私は、指定された旅館の門前に、約束の八時きっかりに到着いたしました。私は、恐らく出鱈目だろうという軽い気持ちもあったの

です。無駄足を踏んだとしても、もともとだと思っていました。ところが、あの男、山下青年は、約束通り待っていてくれたのです。門柱の影から、すいと月の光の中へ、泳ぐような姿勢で出て来ました。

「やあ、先生。よく来てくださいましたね。有難うございます。感謝しますよ。実際のところ、あまり期待はしていなかったのです。私の唐突なお願いで、まさか来ていただけたとは思ひもありませんでした」
「いいや。その気持ちは、私も同じだ。でもまあ、来るだけは来てみようかと、出て来たのですよ」

「それはどうも。恐縮のいたりです。ではどうぞ、おはいりください」

山下青年は、まるで自分の家でもあるかの

ように、その旅館の中へ、私を招じ入れてくれました。

案内された部屋は、奥まった三畳の、息もできないくらい狭く美しいところでした。山下青年は、馴れた手つきで、薄っぺらな壁のカーテンを引きました。すると驚くべし、そこは壁じゃなく、ガラス張りになっておりまして、隣室の内部がまる見えなのです。話にはたびたび聞いてはおりましたが、こんな仕組みの装置を見るのは初めての経験でした。つまり、ノゾキ部屋ってやつなんです。

ガラスに映る隣室は六畳ぐらいの広さで、マットレスの上にフトンが敷かれてあり、その上に、三十歳ばかりの、小肥りの女性が横すわりにしどけない姿勢ですわって、何か週刊誌に読み耽っておりまして。ページをめく

る音まで聞こえてくるような気がしまして、ひやっとしましたよ。他人の部屋をひそかにノゾき見るなんて、まったく、卑劣なことですからね。

女性は、ちらっと視線をこちらへ向けました。思いがけなく妖艶な顔立ちでした。そうです。むしろぶりつきたいほど、色っぽかったのです。

「先生は、この部屋で、ずっと隣室をノゾき見てください。今に面白くなりますから。それと同時に、われわれの愛情交換の奇怪な方法も、おわかりになるでしょう。したがって、さきほど言った私の、愛すればこそ優しくしないって言葉の意味も、理解なさることでしょう。それから、この部屋は、絶対に隣室からは見えませんから、安心して、心おきなくノゾいてください」

「き、君イ……」

「では、ごゆっくり」

山下青年は、私の制止の声を振り切って、私一人を残して、部屋を出て行きました。

私は、仕方なしに、だが深く興味もそられて、ガラスのほうへ向き直りました。女性には、相変わらず熱心に週刊誌に目を落としておりました。

その時、突然、フスマが開いて、山下青年が、私の視界の中へ飛び込んで来ました。彼は、女性の前にすわって、二言か三言話し合ってたが、彼らの声は、少しも私の耳に達しませんでした。金魚のように、口のパクパク動くのが、話すつど見えるだけでした。特殊な防音装置が施されてあるようでした。

女性は、話がすむと、さっと立ち上がって、するすると帯を解き始めました。私は思わず生ツバをぐくりとのみ込み、身を乗り出しました。年甲斐もなくお恥ずかしい次第です。彼女は、躊躇することなく、派手な模様の長襦袢も脱ぎ去りました。今や、彼女のむっちりとした白い艶麗な身体を包むものは、ピンクのパンティーとブラジャーを残すだけです。腰のふくらみぐあいなんかは、まさに天下一品の垂涎ものでした。

山下青年も、すぐ裸になりました。さあ、これかな、どのような場面が展開するのでしょうか。私は、迫りくる次の濃厚な情景を想像して、食い入るように、ガラスをニラみつけました。

だが、私の予期は、見事に覆えくつがされました。いや、その予期以上のことになって、私は、おのれの目を疑ったのです。

女性は、いきなり山下青年のアゴを蹴りあげたのです。彼は、不格好な姿で、どっと仰向けにひっくり返りました。彼女は、女豹めひょうのようにしなやかな動作で、そんな彼に襲いかかって、自分の腰紐などで、彼を後ろ手にぎりぎり縛り上げました。そして、足首もそろえて、きっちり結えてしまったのです。

彼は、されるがままに、おとなしくしていました。完全に無抵抗でした。

女性は、不自由な姿の彼を、しっかりと自分の豊満な胸の中に抱き込んで、目や鼻や頬や唇や、顔中いたるところに、キッスしました。それから最後に、耳に白い歯で噛みつけました。彼の全身が、その痛さに反応してびくんと動きました。女性の鋭い瞳に、ちらりと勝者の歓喜の色がかすめ過ぎました。

尻責め

キッスが終わると彼女は乱暴な手つきで、彼を突き放しました。今度は、とても見えないような残酷な場面となりました。彼女は、仰向けになっている彼の身体の上に乗ったのです。彼女の白い爪先に全身の体重が集中しているのです。彼の腹は、彼女の白い爪先が食い込んで、ペコリと、気色悪くなる

ほど、へこみました。

彼の顔が苦痛にひしゃげました。齒を食いしばって、必死に耐えているようでした。

あまつさえ、彼女は、彼の身体の上を歩き始めたのですから、たまりません。彼が、無意識のうちに身体をゆすつてもがいたのでしょう。彼女は、もんどりうって畳の上へぶっ倒れました。大きなお尻が、もっこりして宙に躍動する有様は、みものでした。

彼女はむくむくと起き上がりましたが、その顔は、怒りで震えておりました。そして、大きなお尻を、どっかりと彼の胸の上に乗せて、手当たりしだいにツネリ始めたのです。

ツネリも案外に苦しいらしいですね。彼は彼女の尻の下で、身もだえて苦しがつていました。やがて、彼の半身は、赤い小さなアザだらけになってしまったのです。

その間、彼女は、じわじわとお尻を移動させて、彼女の巨大なお尻は、全面的に彼の顔をぺたりと包み込んでしまいました。



彼のからだがしなしなと女体のようにもだえました。彼は、呼吸孔を、ふわふわした女のお尻でびたりとふさがれているのです。

五分もたたぬ間に、彼のからだは大なる動きを停止して、びくびくと痙攣的にかすかに動くだけとなりました。このままじゃ窒息死してしまうぞと、と見ている私のほうも、はらはらと気が気じゃありません。

だが、女性も馴れていると見え、その辺の手加減はよく心得ており、窒息寸前で、お尻をよっこらしよと、ずらしました。彼は、ぐ

ったりと、河岸に上げられたマグロのように醜くくのびておりました。

そんな彼に、むしゃぶりついて、狂ったように、女性は愛撫を続けました。彼女の目は情欲に狂って、火のように燃えていました。

私は、ほうほうの態で、旅館から退却しました。あんなことってあるもんですか。その後、彼には一度も会っておりませんが、年寄りには、ちよいと刺激が強すぎました。あれは男子のマゾヒズムに、女子のサディズムのカップルなんですね。こんなのは非常に珍奇なわけではありませんでしょうか。

恐らく、うまく、彼らの刺激材料として利用されたのかも知れませんが、その青年は、マゾヒストであると同時に、露出症的な要素も強かったと見るべきでしょうか。自分の責められている、恥ずかしい場面を、他人にノゾかれているという意識は、被虐感を一そう強めるという作用もしますからね。

しかし、異常性欲も、そこまで発展すると危険極まりないものです。もう一分か二分、彼女のお尻の動くのが遅ければ、彼は極楽往生ですよ。快感に溺れて死ぬなんてのは、いかにも知れませんが、こんな危険な遊びは、どうも私としては、賛成できませんな。

幽霊と恋愛し結婚した人々

若 月 泰 明

伝説の美女幽霊と契る

上野国平井の城は、上杉憲政の住んだところであるが、北条氏康は、これを攻め落とし、たので、憲政は越後に落ちていって、長尾謙信に頼った。

平井の城には、北条新六郎を入れておいたが、城中のある一間に、金銀をちりばめた屏風や障子をはめ、これにみな、花鳥草木の絵を描き、美しいというばかりでなく、庭には築山や泉水を造り、いかにも、立派な部屋であった。

その昔、憲政の息女弥子といって、十五歳になる美人がいたが、見る人、聞く人、弥子に恋をしないものはなかった。

憲政は、当時の城持ちの思想として、弥子

を高貴権門の輩と結婚させて、自分の勢力の増大をもくろんでいた。

その弥子の住んでいたのが、この立派な部屋であった。

家来に、白石半内という小姓がいたが、一目、弥子を見てからというもの、彼女のことを心の中心にとどめておいたが、それだけではどうしてもいたたまれず、意を決して、恋文をとどけた。ところが、これが発覚されて、ひそかに首をはねられてしまった。

その後、百日ばかり過ぎると、弥子も、ぽっくりと死んでしまった。

人々は、半内の亡魂がとりついたからだろ
うなどと、ウワサした。

さて、新六郎は、この話を聞いて、たとえ幽霊にもせよ、そんな美人を妻とすることができたら男子の本懐である、今生の思い出に
そういう美人と添いたいものだと思ったが、それが病みつきとなって、見たこともない弥子の姿を胸に描いて、楽しむようになってしまった。

そして、しきりに思いを染めて、朝夕、香をたき花を手向けて、人知れず、恋心を散じていた。

ある日の暮れ方、どこからともなく、女の童が一人来て、新六郎に向かい、

「わが君は、その昔、ここに住みたまいしが、君の御志にひかれて、これまであらわれ、ただ今参られますが、会っていただけますか」といい、そのまま姿を消してしまった。

しばらくたって、異香燻じ、前の女の童に

つれられて、一人の美しい女が、築山のかげから出て来た。新六郎は、これを見たとき、これこそ、聞きおよんでいた弥子の幽霊だと、日ごろの自分の念願が通じたのである。と、女を引き入れて、時のたつのも忘れて語り、契りを固めた。

やがて、その女が帰るとき、

「このことは必ず人に語ってくださいな」

といい残して、煙のごとく、消え去っていった。

その女は、その次の日の暮れ方にまた来て、泊まって行き、明け方に帰って行ったが、その後六、七日間、夕方に来ては、朝帰って行った。

金閣寺の幽霊と契った武士

中原主水正は、美男のうわさ高く、色好みの名をもつて、生年二十六歳になつても、決まった妻がなかった。

だが、春は花に、秋は月に、官に仕えながら、風流傷恨の多感な男であつた。

大永乙酉の年の春、金閣寺に行き、春の風色を楽しんでいたが、すでに日は暮れて、おぼろの月が東の方にあらわれて来ると、まこ

ある日、新六郎は、家来を集めて、さまざま話をしてゐるうちに、うっかりして、女のことを洩らしてしまつた。

家来は、これは不思議なことだと、壁をほり、のぞき見をしたが、女の姿は見えず、女の童というのは伽婢子であつた。

その後、ある夕暮れに女が来て、大いにうらみをなげき、

「あれほど人に洩らし給うなという言葉がたがえて、人に語るなど、うらめしゅうございます。それゆゑに、契りは絶えて、もはや会うことが出来なくなりました」

といつて、消えていった。

(瓢水子松雲作「重婢子」巻の十より)

とに春宵一刻値千金で、花にうつる月の光のもとを離れがたく、池のほとりをめぐり、金閣寺の建物に近づいていった。

応永十五年、金閣寺の建立者足利義満が死んでから、すでに百十八年の歳月が経つており、その昔、あんなにも賑やかであつた金閣寺も、次第に住む人もまれになつていき、礎傾き、柱も老朽して、わずかに金閣だけが、

昔のすがたを残しているばかりであつた。

主水正は軒に立ち寄り、欄干によりかかつて、昔を思い、今を感じて、ふけ行く月にくそぶきながら、古木の桜の少なく咲いているのを見やりながら、

桜花いざ言問はん春の夜の月は昔も朧なりきや

と詠っていると、そこへ十七、八の美人

が、召し使いの女を一人つれてあらわれ、

あるじなき住かに残る桜ばなあはれむかし

と僧正遍照の詠んだ古歌を吟詠した。

主人はこれをきいて、胸をときめかせながら、心もそぞろに惑いながら、うつつなきうちに、

さく花に昔を思う君はたぞ今宵は我ぞあるじなるもの

と詠んで立ち向かうと、女は、ことさら驚く様子もなく、

「私は畠山の家生まれ、昔、義満公この所に引きこもりたまひし時宮仕えせしもので、年二十にしてこの世を去りました」と言う。

義満公在世の時と言へば、百十何年前の昔のことである。さては、その女の亡霊かと、



一時は驚いたが、あまりの美しさに心をひかれて、女がよりそって来て話すままに、しばらくの間、ともに枕をならべた。

それから、毎夜のように、主水正は金閣寺に通い、女のあらわれるのを待って深い約束を交わしたが、二十日ばかりの後には、昼間でも、その女があらわれるようになったのでとうとう家に連れてもどった。

その女は、なにごとにつけても憤しき深く、物言う言葉のすべてに才知があつて、主水正の一族にまじわりを親しくして、主水はよい妻を得たと、周囲のものからうらやまれながら、三年をすごした。

その三年目の七月十五日、その女、

「いつか召し連れておりました、召し使いの女のことか気にかかりますから、今日は行って訪ねてやりましょう」

というので、主水正は彼女とつれだって金閣寺に行った。

日はすでにとつぷりと暮れて、満月の光は

塚に入つて幽霊と契る

西国大伴家の侍浅原平六は、世に名をうたわれた武士であつた。

娘が二人あり、なお、亡弟の娘のみなしご

いともさわやかに、池の蓮は南の池に開き、柳はしだれて露をふくみ、竹は風にそよぐという涼しい夜となつた。

すると、どこからともなく、いつぞやの召し使いがあらわれて、

「あなたは人間に返つて楽しみ遊ぶこと、すでに三年になり、楽しみを極めながら、お住みかを忘れ給うか」

とうらめしげに言つた。

その言葉をきくと女は、主水正に向かつて、「君の情けの深さにひかされて、三年の月日は夢と過ぎ去りました。なお飽くことなき契りのうちながら、今宵はお別れせねばなりませんぬ」

といい、香炉を入れた蒔絵の箱を渡して、煙のように消えていった。

主水正は、胸こがれ、身もだえて悲しんだが、ついに女は二度と姿を見せなかつた。

(瓢水子松雲作「伽婢子」巻の九より)

を養い、三人の娘が年ごろになつたのを、自分の娘だけを縁づかせて、亡弟の娘には縁談さえもきかせなかつたので、

「娘うちうらみてよめる、

をし鳥のとりどりつがふつばさにもいかに我のみ独り住むらん、

この娘、心地わづらひて、つるにはかなくなりたり」

そこで塚に埋めて葬った。

同じ家のとなり、筒岡権七という二十ばかりの美男子がいたが、ふと、どこへともなく急にいなくなってしまった。おどろいて人々がさがしまわると、平六の姪を葬った塚の間から、黒い小袖の裾が見えた。

「さらばこそとて引き出しければ、土の底より権七が声として、何ものなれば人のかたらしをさますらふといふ。いづかたより匍ひ入りたるらん。棺の中に女と権七とひとつにふして、女の屍はなほ生きたる人にことならず

亡霊と不義を働いた庄屋の妻

むかし、備中の国松山の近く、竹の庄という村の庄屋の妻が、山伏と不義をしていた。山伏は、庄屋の妻によほどの愛着と執念があったものとみえて、死んでからも、亡霊がときどき、女房の閨へあらわれるのであった。山伏が死んでから、すっかり気を落として

臥したるしたに杉原に書きたるものあり、とりあげみれば歌なり。

流れてのうき名洩らすな草がくれ結びし

水の下さはぐとも

独りねをならはぬ身にはあらねども君帰りにし床ぞさびしき

また、権七が手にて書ける歌、

契るてふ心のねより思ひそむ軒の忍ぶの茂りゆく袖

笛による男鹿もさぞな身にかへて思ひ絶えせぬ習ひなるらん

この歌ども取りそへて宿に帰りしかども、

権七は只もうもうとして人心もなし」

その夜、権七は空しくなってしまった。

(「狗張子」巻の四より)

いた女房は、せめて亡霊に会えるだけでも、嬉しくてたまらず、しかも亡霊とはいえ、あらわれている間は、生きていると少しも変わらないのでよろこんで、逢瀬をつづけていた。しかも、それが五、六年もの長い間つづいていた。

すると、あるとき、女房の亭主が、女房のそぶりのおかしさに、かねがね注意していたが、ようやくのことで、そのわけを知り、火のように怒って、女房をのしり辱かした。そのために、女房は逆上して、次第に気が狂って、しきりと乱暴を働くようになった。

そこで、ほとほと持てあました亭主は、座敷牢を作って、狂った女房を入れておいたが、いつの間にか顔形が変わり、髪は針のように逆立って、目は異様な光を帯び、妖しい光を放つようになり、口は耳まで切れて、頭から二本の角が生え、生きながら蛇体となった。さて、蛇体となってしまった女房は、座敷牢ずまいがせまくて、窮屈でならないので、近所にある大きな池に入ってしまうと思ひ、人々に向かって、

「わたしをあ池へ送ってくれ。送ってくれには、鐘を鳴らし、太鼓をたたいて、賑やかにして送ってくれ。もし、さもないければ、村のものを一人残らず、とり殺してしまう」と言うので、亭主をはじめ村人も、おそれおののいて、彼女のいうとおりにしたというが、亡霊と五年間も不義をつづけていたというのは、なかなか珍しいことである。

(「因果物語」より)

亡霊と契って男児を生む

むかし、大内左京太夫義弘が、ある年、京へ上って滞在中、ふと、玉屋という糸屋の娘と恋におちいった。が、夢のような楽しい日は、矢のごとく過ぎて、いよいよ帰国の途につかなければならなくなった。つづらなヒトミ、紅の唇、恋しいかずかずの思い出を胸にえがきながら、西へ西へと下っていった。

一緒につれて帰りがたかった大内義弘は、事情をいって、おだやかにだめすかして、自分が下っても、間もなく使いの者を出して迎えに来るからと約束をして、娘と別れたのであった。

ところが、どうしたのか、義弘からの使いはちっとも来ない。朝に夕に、娘は泣きぬれて、はるかに遠い義弘のことを思っていた。そして、それが原因となって重病に打ち臥してしまい、ついに死んでしまった。

たった一人の娘に先立たれた両親も、あまりの悲しさに発心したのであった。

間もなく、不思議にも、娘は周防の山口に行き、義弘のもとをおとずれ、おん跡をしたって、わざわざまいりました、と申し入れた。

はるばるこの遠い山口へ、女の身一人で、恋いこがれるままにやってきた娘を、義弘はしっかりとだきしめて、遠い日の恋を回想したのであった。

それから、二人は、夫婦になって、仲睦まじく暮らすうちに、一人の男児をもうけた。

こうして、すこやかに成長した男児が、ちょうど三歳をかぞえたとき、老夫婦の諸国巡礼が、周防山口の城下へたどりついた。

先に、世をのがれた娘の両親が、娘の恋人

義弘殿を一目見たさに、やって来たのであった。そして、かねて見知っていた人をたずね今日までのいっさいを打ち明けた。

「さてさて不思議なこともあるものじゃ。そのほうの娘は、すでにお邸に住まわれ、若君さえ出来、はや三歳にならせられたのに」

と、相手は、不審の眉をひそめ、ただちにしかじかとその由をお邸に注進にいった。

義弘は、大そう喜んだ。そして、さっそく両親を迎え入れ、娘にほえみながらいった「さあ、そのほうの両親が来たから、あつてやれ」と、娘は何を思ったのか、奥の間へ行った。なっかしい両親に会おうともせず



に、それっきり娘は出て来ないのであった。不審に思つて、フスマを明けてみると、奇怪にも、そこには娘はおらず、そこにぬぎすててあった衣をとってみると、五輪の塔が一基残っていた。

幽霊と知らずして妻とする

むかし、羽州最上の商人某が、商用で京へ上つていった。

彼はそこで、一人の女を得、これを妻として、しばらく暮らしていたが、まもなく女を捨てて、最上に帰ってしまった。

京におきすてられた女房は、最上の商人をどうしても忘れることができず、ついに、慕つて、遠路はるばる尋ねていった。

すでに女房のあった最上の商人は、困惑したが、結局、最上の女房を離別して、京の女を女房として家に置いた。

間もなく、かわいい男の子が生まれた。

それからというものは、最上の商人は、絶えて京へは上らなかつたのであるが、こうして、約三年の月日が過ぎた。

ふたたび商人は、商用で京へ向かつた。女房の親父にも会つて、長い間のご無沙汰をゆ

さすがの義弘も、これにはおどろき、また娘の心事を大そう哀れに思つて、ねんごろに跡をとむらつたという。また、その男児は、成長の後、石丸某とよんで、石丸氏の祖となつたそうである。

るしていただこうと思つたりしながら――

京はさすがに、最上とちがつて、人通りも多い。遠い夢のように、女房とはじめて、この地で契つたころのことが、よみがえつてきて、彼の脳裡を右往左往した。

「年の経つのは早いものじゃ」

と、ひとりごとをした。そして、ようやく、なつかしい女房の親の家へたどりついたのであった。昔ながらの静かな家であつた。

わらじをといで、きやはんをぬいで、まず久しぶりのよろこびをわかち合つたのであつた。女房をふりすてて帰ってしまったことをわびたのち、

「だが、あれも、今では子供もできて、なかよく暮らしていますわい。子供を連れて来たかつたのだが、なにせ道中が遠いものだから」すると親父はびっくり目をみはつた。

「えつ、なにをいっているのじゃ、わしの娘は、もう三年も前に、ふとした病気が原因で死んでしまつたのじゃが、不思議なこともあるものじゃ」

と、キセルをひざのそばへおいて、相手の顔をみつめた。

「いや、不思議じゃ、不思議なことを聞くものじゃ、はるばる最上へ、わしを訪ねてきたので、それから三年というもの、一緒に暮らし、三つになる子供まであるのじゃがなあ」最上の商人は、いきおいこんで、きめつけようようにいった。

「そうかい」

そういった女房の父親も、夢かどばかりによろこんで、

「さては、娘は生きてくれたか」

そこで、いよいよ二人で、最上の家へ帰る約束をした。ところが帰ってみると、女房は一間へ入ってしまったまま、中から戸を閉ざして、容易に会おうとしない。変だなあと思つたが、会いたさ一念の親は、たまりかねて、室の戸を押し破つて入って行つた。おどろくべし、そこには、女房の姿は見えず、しかも、三年前京で立てた、あの卒塔婆が、一本さみしく立っていたという。

女だけに加えられる拷問

△女の肉体の最も女性的な部分に加えられる拷問は、そのまま性に直結している▽

雪 俊 遥

水筆でくすぐる

終戦間もないころ、極東軍事裁判の新聞記事を読んでいたら、「木刀や竹刀しなを使った、女性にだけ加える拷問」という言葉が出て来て、当時まだその面に無経験だった私は面食らったものである。

むろん、この「女性にだけ加える拷問」がどういうものであるか明確に理解するまでにはちよつと時間が掛かった。しかし、理解がゆくと間もなく、日本の憲兵とか警官というのは、実にこの「女性にだけ加える拷問」の愛用者が多かったことまでわかって来た。考えてみれば、これは当然の話なのだが——つ

まり、男が女を拷問する場合、性的亢進を媒介としないと考えられることは非常にまれなので、だから、その拷問が、まっ直ぐに、女性の身体の中でも最も女性的な部分に向けられることに不思議はないだろう。女の豊満な太腿や臀部をムチ打つというような行為も、私に言わせれば、太腿や臀の肉づきの工具や柔らかみが女性的であるために、行なわれるのだから。

ところで、この「女性にだけ加える拷問」は、日本軍が、中国とかフィリピンで、現地の女性に愛用した例は、戦後ずいぶん暴露されている。数年前、日本に來た、あるフィリピンの名流女性も、夫を日本の憲兵に殺され

た時、まだ新婚間もなかった彼女も、夫の目の前で、この「女性にだけ加える拷問」を受けた、と当時「婦人公論」に寄せた手記の中に書いていた。

中国では、特務機関員が、重慶政府の女スパイに、これを加えたそうだ。もっとも、この場合、小道具は棒ではなく、洗面器と水と小筆だというのが、ちよつと変わっていて、私の記憶に残っている。

その方法は、まず、どんな拷問を加えても口を割らない女を全裸にし、脚を広げて、椅子に後ろ手に固くくくる。それから、小筆の穂を湿らせて、女の乳首と下腹部の粘膜部とを、何時間でも根気よく、くすぐるというか

水で塗りつぶすというか、ちよつと表現のしようがないが、とにかく、コチヨコチヨ、コチヨコチヨ、やり続けて行くのだそうだ。どんなに気丈な女でも、この拷問をやられると、始めはシクシク泣き出し、ついには半狂乱になって、必ず口を割ったものだそうだ。

虐待の中の陶醉

明治以前の話は別として、維新後この「女性だけに加える拷問」の記録で、一番古い物



は、私の知る限りでは、明治三十六年、農商務省商工局編『職工事情』附録一のなかの、埼玉県春岡村（現在大宮市内）金子工場事件だろう。この事件については、別の雑誌に何回か書いていたので、詳しくは触れない。要するに、機織工場の工女虐待事件である。これによると、少なくとも二人の女工、田畑ツヤと柿本フサが、このリンチを受けている。

その方法は、「裸体ニシテ板ノ間ニ仰向ケ

ニ寝サセ皆ノ見テ居ル前デ種々慰ミ半分ノ折檻ヲシタノデス」（ツヤの直話）「ツヤヲ裸体トナシテ縛シ、コレヲ仰向ケニ倒シ置キ、竹片ヲ以テ、ソノ陰部ニ差入レ、コレヲ搔回シ」「フサヲ裸体トナシテ縛シ、竹片ヲソノ陰門ニ差入レ、コレヲ搔回シ」（東京控訴院宣告文）「ソノ夜十時ゴロヨリ十二時ゴロマデ約二時間（ツヤを）、前項ノ如ク真裸体トナシ藁縄ヲ以テ両手ヲ背後ニ縛シ、（中略）同人ノ兵子帯ヲ用ヒテ口ヲ縛リ、綾竹、マキニテ再三殴打シ、（中略）糸（織物用）ヲ包ミタル青色紙ヲ纏メ来リテ、コレヲツヤノ〇〇ニ押込ミ、黒須元次郎（機頭）ハ藁縄切レヲ採リ来リテ、コレヲ、ツヤの〇〇ニ挟ミ、再三拷責ヲ加エタル後（中略）、交ル交ル綾竹ヲ採リテ、ツヤノ〇〇ヲ突キタテ、後、元次郎ハツヤノ〇〇ノ毛ヲ抜キタリ」（埼玉県知事ヨリ農商務大臣への調査報告書）というから露骨なものである。

人権思想などカケラもなかった当時としては、雇い主が、使用人を所有物視して、この種の折檻を加えた例は、金子工場だけではなかったのだろうが、それらの大半は、歴史の闇から闇へ葬られてしまったわけだ。

田畑ツヤは、石川県堀村出身で、当時十六

蔵。今の満年齢なら十四か十五の中学生だから、折檻の痛々しさが想像される。

が反面、直話の中で、「私ハ恥ズカシイヤラ苦シイヤラデ、ツイニハ夢中ニナツテシマヒマシタ。」と、複雑微妙な被虐心理を表現しており、この種の拷問が、女にとっては、必ずしも辛いだけではないことを、無意識に告白している。

宙吊りにされた女工

また、藤沢カナ、岡田セキ（十五歳）などという女工たちは、〃荒縄吊りの折檻〃を受けたが、その方法は、「二人ノ女ヲ全裸体ニシマシテ、台所ノ鴨居ノ下へ連レテ行キ、鴨居ノ内外ニハ太イ釘ヲ打込デ、ソノ内側ノ釘ヘ荒縄ノ端ヲ縛リ付ケ、ソレカラ女ヲ背中合セニシテ、釘カラ垂レ下ガツテ居ル荒縄ヲ兩人ノ女ノ股ノ間へ通シ、ソノ端ヲ外側ノ鴨居ノ釘ヘ縛リ付ケルノデス。（中略）（その縄を）無暗ニ引キ詰メテ、足ノ爪先バカリデ立ツテ居ルヤウニ仕向ケルノデス。コレで一晩中ヤラレルノデスカラ、堪リッコハアリマセン」（工女桶谷ハルの直話）「マダアルヨ。縄ヲ股ノ下へ入レテ、股カラ肩ヘ纏ニ縛ツテ、ソレヲマタ腰ノ処デ縛ッテサウシテ高イ鴨居

へ宙吊ツテ打タレタノデス」（カノの直話）。また、「ブリキノ銅壺（石油缶ナリ）ヲ矢ツ張り股ニ挟（挟）ンデ、ソレデ（残酷卑猥ニ付キ中略）ト云ツテ来タケド、ソノ時ハ友達ガ詫（謝）ツテ止シタノデス」（カノ直話。）という個所もある。これらは「女体だけにしか加えられぬ拷問」の変形と見てよいだろう。

同書にはまた、明治三十六年三月、埼玉県与野町与野で警察に保護された、渋谷ムツ、青木リイという、ともに十五歳の二人の少女が、「自分（達）兩人ヲ他ノ工女ノ面前ニ於テ陰部ノ上部ニ施炙シタ」旨申し立てたが、調査したところ、二人には寝小便の悪習があるので、直してやろうと思って、炙がよいことを教えたなら、「兩人ヨリ希望ヲ申出デ他ノ工女ノアラザル室ニ於テ施炙し」たとわかった、という、知事から商工局への報告書が載っている。

そのまま信じててもよいようなものだが、当時、埼玉県は、県下に女工虐待事件が相次いで、主として東京の新聞から摘発され、それを読んですぐ農商務省から報告を求められるという状態で、意地になったのか、成績にかかわることを恐れたのか、ことごとに工場主の肩を持って、女工のほうがウソをついてい

るので、虐待の事実はない、という報告を出している。だから、この場合も、事実、寝小便癖があったとしても、一種の私刑としてやられたのではないかと思う。

女党員に与えられた刑

時代が昭和に移ると、左翼思想が勃興して拷問者は特高刑事に、被拷問者は女子共産黨員、と変わって来る。ここでも「女性にだけ加えられる拷問」が大活躍している。

「俊子も捕えられて警察へつれてこられるなり着衣をはぎとられて丸裸にされ、五人も七人も大男の刑事たちの目の前で、四方から靴でふまれ、うしろ手にしめあげて乳房をいじくる、恥毛を抜く、という目にあわされた。それは、肉体に加えられる拷問のほか、同時に人格に加えられる凌辱であった。

二度目になると、更にひどい目にあった。（中略）全裸のまま、板の間におおむけにおしつけられた。両手両足を大の字にひきあけられて、下腹も、乳も、男の泥靴で、さんざんにふみつけられる。その間に、一人の大男が、竹刀のさきで、かの女の恥部をこぜりまわすのである。こぜりまわしただけで満足せず、古新聞紙一枚を丸いボー（棒）にして、

さきに火をつけて、もやしながらかの女の股の間に焼くのである。」

これは「りべらる」昭和二十六年三月号の山脇茂氏「女共産党員検挙始末記」の一節である。主人公は長谷川俊子という二十三歳の女子大生。実姉が「銀座のマネキン・クラブの会長で名を売った駒井伶子」で、俊子は獄中三年で転向し、「新聞にかの女の『更生の体験』を語ったり、そのころあった『大法輪』という真宗の雑誌の婦人記者になったり」したが、前記の拷問のため「女性としての大切な器能部を失い」、恐らく異性との生活を知らないまま尼となり、この世の表面から「姿を消して行った」ということになっている。

この文章は、熱海事件の時の中央委員の名が偽名になっているところから見て、多少の粉飾はあると思うが、全然根も葉もない話ではないだろうと、私は思っているが、とにかく火で焼かれてしまったというのが凄い。

向井啓雄氏の外国通信に、ロンドンのストリート・ガールが、仲間の女を酒場で押えつけ、スカートも下着もすっかりまくって、ジョンか何かをぶっかけ、ライターで火をつけてしまった話を書いていた（数年前の『中央公論』）が、被拷問者が素っ裸で手も足も出な

い状態、しかも美人で才女で勝気な処女という設定なのだから、この種の拷問の記録としては圧巻である。

しかし、疑い深い読者がいて、少しでも粉飾のある文章は信じられないと言うかもしれない。そこで、社会的にも有名な人の手記の一章を抜スイしよう。ここでは、さすがにそういう露骨な描写はないが、長谷川俊子のような扱いを受けても不思議はないのだ、という推定を、客観化するには役立つだろう。

「七月下旬の土用酷暑の中で、警視庁の特高係の私服が三人、谷中署の二階の一室に私をよびだし、誘導尋問の手にのらない私の身体から一片の布まではぎとり、なぐり、けり、後ろ手に結えあげて逆さに吊るそうとしました。幸いそこには、吊るすべきものがないので、今度は箆（はうき）を逆手に持って来て、私の両脚のおくへ突っこもうとしました」（中本たか子「わが青春の不死なるもの」『知性・昭和三十一年六月号』）

「検挙の当座、四、五日間、真知子は酷いテロを食わされて、着物は衄血（はちち）に染まり、両腿は硬く暗紫色に膨れ上がり、そのため、八十日目に釈放された時ですら、まだ跛（びこ）をひいていた。（中略）（もし、この原稿が、幸運にも

一世代後の人々によって読まれるような機会があったら、かくのごときは何故の拷問だと怪まれもするだろう。だが、当時こうした拷問は、決して珍しいことではなかった。別になんらかの、白状させるべき事柄はなくとも、それは面白半分に、留罪者に対する一種の懲罰として、係りの巡査が勝手気儘に行なっていたものである。若い女子は、そうした場合、真裸にされるのが常であった。（河上肇「自叙伝」三）

中本たか子は、当時二十七歳の新進女流作家で、読売新聞社主催の婦人作家講演会にも名を連ねていた著名の文化人だったが、特高の手にかかっては、「痛さに悲鳴をたてて泣きもがく私をしばったまま、くっ強（きん）な男たちの三人が代る代る二、三時間も（責）つづけ」「一匹の家畜をほふったように苛（さい）まれていく。河上肇は言うまでもなく当時の左傾青年のアイドルだった。京大教授、法学博士。文中の真知子は、本名芳子。博士の次女で、女子大を中退して地下運動に入り、話題をまいた人である。

逆さ吊りの自白強要

こんな拷問は、もちろん特高の専売特許では

ない。一般罪の容疑者はもとより、夜おそく町を歩いてたカドで保護された、なんでもない娘が、下穿きまで脱がされて、全裸にされていたケースさえあったと言う。ひどい看守になると、以前盗品の貴金属をかくしていたのがいた、などと口実を設け、片っ端から尋常ではみられない肉体の部分まで探っていくのさえいたと言う。

十年ほど前の東京日日新聞に、こんな読物があった。伏見かどこかの警察での話。窃盗容疑で二十七、八の粹な若夫人が挙げられ、泥を吐いた。

公判と決まって、弁護士に選ばれた、立命館出の青年が夫人に会ってみると、何か物言いたげなので、これはクサイ、と取り調べの刑事に当たって見たが、証拠らしいものがない。なかなか擲めない。しかし、持ち前のフアイトで探索を続け、ついに確証を得て、美しい年増女は無罪となった。

証拠というのは、デカ部屋の鴨居から引き抜いてゴミ箱に捨ててあった瀬戸の帽子掛けだった。刑事たちは、その若奥さんを、後ろ手に縛り上げ、両脚を別々の縄でくくって、帽子掛けに逆さに吊るしたのである。苦痛に身をくねらせると、それにつれて和服の裾が

まくれ下がる。昭和七年ごろの京都の粹な女性だから、下穿きなどはしていない。ついには真っ白な腹部にポツカリ黒い穴のあいたおへソまでが見えてしまった。

すると刑事たちは、大きな皿にお刺身と醤油を持って来て、箸で刺身をつまんで醤油にドップリと浸け、それを、開かされて逆吊りされた太腿の要のところに付けてからムシャムシャと食ってしまった。醤油が粘膜にしみてヒリヒリと痛む。

逆吊りの苦しさ。お尻を丸出しにされている羞ずかしさ。とうとう彼女は「自白」してしまったのである。

そうすると男たちは、今度は尺八を逆さに突き立て、ショウゴのように水を注いで、醤油を洗浄してやった、というから、徹底している。

これは確か菅原通済氏の書いていた続き物の一つだった。弁護士は、その後も京都地方でメキメキ名を挙げ、戦後、自由党から代議士に当選した、その名まで明記してあったのだから、信じて読むのが礼儀だろう。その人は今も自民党にいるT氏だったと記憶しているが、肝心の新聞の切抜きを紛失してしまっただので、いま明記することは遠慮申し上げ

る。「女性だけにしか加えられない拷問」もこの辺が白眉と言えようか。

やはりこのころの青春を描いた椎名麟三氏「美しい女」の中に、左翼運動に関係して検挙され、特高にアソコへ竹を入れられて以来少し頭のおかしくなった娘が登場したりしているのを見ても、女の責められる姿態や責め道具こそ変わるが、同傾向の拷問が、よく行なわれていたことが推察される。

終戦時の官憲の拷問

小説と言えば舟橋聖一氏「情婦の手帖」の蘆子は、自由主義的な学校の文化団体に関係していた女学生で、マルキストでもないのに特高に検挙される。舟橋氏のよく描くタイプで、あるいは氏の青春に忘れられぬ人の分身でもあるのかもしれない。特高は蘆子を一糸もまとわぬ裸にして椅子に縛りつけ、「筆の尻で蘆子の股の裏を気絶するまで摩擦した」蘆子は、終戦まで各署を転々とタライ回しされ、係りの刑事の玩具にされている。「その度に責道具が持出された。」

堀田善衛氏「記念碑」の安江は、転向して右翼へ走った夫を物足りなく思っている、往年のバス車掌組合の女闘士。だが、終戦が近

いと見た夫は、急に姿を消してしまふ。安江は、疎開先の信州で検挙され、拷問され「煙草の火を押しつけられてシリシリと恥毛を焼かれた。」終戦後釈放された時、彼女は、「臀の肉が一握みに掌へ入ってしまう程に」やせている。

また、やはり「りべらる」の旧号に、本土



決戦に備えて地方の町に分駐していた小部隊の隊長が、ある家の娘を見初めて手に入れようとしたが、母親にことわられる。怒って母娘を素ッ裸にして、荷車に大の字にくくりつけ、町を曳き回した後、肝心の肉体の部分に剣を突き立ててしまった、という話が載っていたこともある。

これらは、いずれも、戦争末期の官憲の暴

虐さを描いているが、フィクションの形を取っているのが少々物足りない。そこで、この時期の「女性だけに加えられる拷問」の代表格はというと、私は横浜事件に指を屈する。

これは情報局が、「中央公論」「改造」を廃刊させるために無理矢理でっち上げた架空シンパ・グループの弾圧事件で、石川達三氏「風にそよぐ葦」のモデル事件、戦後の東京都労働委員会事務局長川田寿氏の夫人など、女性容疑者も含まれていた。

その婦人容疑者の一人が次のような手記を書いている。

「松下（特高係長）は、私の取り調べにあたり、夜間長時間にわたり、腰部を裸にして床上に座らせ、両手を綱で後ろ手に縛り、声が戸外に洩れないように窓と入口にカギをかけてとざし、さらに猿ぐつわをはめたうえ、靴かかとの踵で腿と膝、頭をけるの暴行を加えたため、内出血はなはだしく、かつ血腫脹を生じ、靴のみみず腫れが全身に生じ、さらに火箸と洋傘の先端で突いた結果、歩行が困難となりました。また、時には、陰部を露出せしめて棍棒で突くなどの凌辱の行為を致しました。」

（黒田秀俊「血ぬられた言論」・双川喜六「拷問」）

裸体への電気責め

戦争が終わると、さらに新しいスタイルの「女性にだけ加えられる拷問」が登場した。

一つは、進駐軍の将兵に犯された女やパンの手記に登場して来た新手である。裸にしてベッドへハリツケに縛り、口とは正反対の位置にある器官へバターや砂糖をタップリとなすりつけられる。何をされるのかと不安に思っていると、突然ドアがあいて、クサリでつながれた猛犬が連れて来られる。そしてその犬にバターや砂糖を、最後の一塊までなめさせるのだ。犬は、そういう場合、なめるだけで、噛ったりはしないものらしい。噛じられたという告白は見当たらない。この場合も女は結局、氣を失う例が多いようだ。

次は、朝鮮戦争中、呉軍港に休暇で一時帰還したイギリス兵のやった行為である。被害者は、付近の村の中学女教師で、彼女はサイズに合わないにもかかわらず処女を奪われ、血に染んだ太腿を開いて、海岸に沖を向いて座らされ、血を洗い流すに過度の塩水をもつてさせられた。

最後は、海の彼方のお話である。比較的新しい事件なので、まだ、ご記憶の方も多いた

ろう。その事件を詳説した当時の読売新聞の記事から抜粋しておく。

「私は裸にされ、長イスにくくりつけられ、ぬれた服の上から、ナワでしばられました。（裸身の上に、一旦脱がせた服を濡らしてのせ、その上から縄をかけたの意）それから彼らは、私の恥部、耳、口、手のひら、乳首、ヒタイと、ところどころ電気器具を押つけて感電させました。朝の三時、私は失神しました。意識を回復したあとも、精神錯乱状態でした。それでも彼れらは、少しもひるまず、一人が電気器具を操作するかたわら、もう一人が調書をとりました」

「こうした拷問が一月続いた」と、その記事は書いている。ジャミール・ブイレドという、二十二歳の、白人のように美しいアルジェリア女子学生の受けた拷問である。

拷問者は、フランスのナチと言われる降下部隊の将兵で、ジャミールの軍人法廷に証人として呼ばれた、ある女性は、すでに降下部隊の捕虜のまま死んでいた。別の証人ジャミール・ブアザという十九歳の娘は、「やはりおそらく拷問で気が狂ったためであろう。三年越し精神病院に入っていた女だが、質問にこたえる時は、たいていタタタ……と言いな

がら、機関銃をうつ真似をしている始末であった。彼女は、証人台で服を脱いで裸になるうとした」

別の外電は、アルジェリア反乱分子の容疑者は、たいてい素っ裸にされて、「身体中のあらゆる柔らかい部分に電線がはりめぐらされ」ている、と報じている。つまり、粘膜部ばかりを選んで電気拷問しているわけだ。

こういう記録は、ナチにもあまりないようで、（「痛ましきダニエラ」のように、「女性器は除去され、人工の性器と取りかえられた」という例ならあるが。ついでに言う、残酷行為はナチの専売特許だったわけではなく、フランスあたりでは、抵抗団員が、解放後、ナチと通じた女性を素っ裸にして、町中を歩かせた後、机に縛りつけ、下腹部の毛を抜いたという。）報道の上ではこの事件などが嚆矢ではないかと思うが、電気責め自体は、日本でも、第二次大戦中から記録があり（許広平「暗い夜の記録」など）真似する者が次第にふえて来るのではないかと思う。

「女の身体でなければ加えることの出来ない拷問」も、次第に恐ろくなつてゆくようだ。なにしろ、アルジェリアの戦闘はまだ終わっていないのだから。

女の切腹

—その心理を分析する

小 仏 京 太

女の切腹——これは、ある種の風俗誌に
ときどき見かける切腹マニアのためのお話
かと思っていたら、なんと、若い娘が、立
ち腹を切って、ひん死の重傷を負ったとい
う地方新聞の記事をみて、いまさらながら
世にも恐ろしい女丈夫を見つけ出したもの
である。

事件のあらすじを追ってみよう。

十文字腹を切る

京都市上京区寺町広小路にある竜泉寺と
いう名刹が、こんどの娘ハラキリ事件の舞
台であるが、この寺には、住職の好意で、若
い四人の娘が一室を借りて下宿していた。
四人の娘は、京都外大の学生で、いずれ

も地方からきた、はちきれんばかりの青春
に富んだ娘たちで、その四人のなかでも、
腹を切った仲川圭子さん（21歳・仮名）は
美貌で、見事な肢体と、セクシャルな、す
きとおるような肌をしていた。

二月二十四日の朝、寒気がピリピリとす
るような、京都でも珍しい寒波のきびしい
日であった。

八時半ごろ、住職の妻くにさん（49歳）
が、部屋の掃除をすませ、朝のお茶の支度
でもしようかと、お勝手にゆく廊下をわた
りかけたとき、ふと目にとまったのは、黒
びかりした廊下に、点々として風呂場のほ
うへつづく血痕であった。

それが、先にゆくにしたがって、血痕の

量も多く、やがて、血だまりになっていた。

不吉な予感が、くにさんの脳裡を走った。
最初、猫に食いちらされたネズミの血ぐら
いにしか思わなかったくにさんも、べっと
りとしたたって血紋をえがき、ドス黒く光
っているのに、むしろ恐怖さえ感じ、それ
でも勇気を出して風呂場に近づいたとき、
クモリガラスの戸に仕切られた風呂場の中
に、確かに、人の気配を感じた。それも、
異様な、押しつぶすような悲鳴に近いうめ
きさえ聞こえた。

ガラス戸を開いてくにさんが内部をのぞ
きこんだ途端、「ヒァッ」という悲鳴をあ
げ、ヘタヘタと、その場にすわりこんでし
まった。

そこには、仲川圭子さんが、シュミーズ姿のあられもない姿で、右手にした刃渡り十三センチぐらいの部厚い出刃包丁を逆手にもって、目をすえ、女幡随院長兵衛よろしく、血だるまになって突っ立っていた。

「だ、だれかッ、来てーッ」

いったん腰の抜けかけたくにさんは、その叫び声さえ出すのがやっとだった。仁王立ちになった圭子さんにすがりついて止めることもできない。ただ、圭子さんのつぎの動作を、ブルブルとふるえながら見守るばかりだった。

圭子さんは、不意のくにさんの出現に、いっそう狂気のごとくなって、シュミーズをひきちぎると、やにわに、ふっくらと脂肪のついた下腹のやわ肌を、逆手にもった出刃包丁をグサッと突き立てた。

一瞬、みずからのけぞり、切先がしっかりと刺しこまれたのを知ると、こんどは、両足をふんばって首を前におとし、かがみこむようにして、グイグイと右方に引き裂いた。厚い脂肪に切先がすべって抜ける。その瞬間に、湯殿の白いタイルに血がピュッととび散り、成熟しきった女のからだは

硬直する。

「うッ、クッ、ッ」

パンティーのゴムと一緒に、デルタから突き刺した出刃包丁は、音もなく、上方にかき開く。

くにさんの叫び声が、やっと庫裡にいた住職に通じたらしく、それにつづいて同宿の友人三人が、飛び出して来た。

「止めてッ、止めてッ、圭子さんッ」

泣きながら風呂場の入口でさけぶ三人の制止も、圭子さんには通じない。

「包丁を出しなさいッ」

住職が風呂場に入り、近よろうとすると、圭子さんは、ふたたび引き抜いた出刃をふりまわしながら、胸、首、腰と、めった突きにおのがからだに突き刺す。

「止めてッ、死んじゃうッ」

くにさんが、やっと氣をとり直して、這いながら圭子さんの足もとに近寄った時、圭子さんは、力をこめて首のあたりに出刃をさし込み、ふりしぼるような絶叫を残して、ぼったりと倒れた。

くにさんの通報で、パトカーと救急車が現場に到着した。係りの警官たちは、かつ

て経験したこともないような凄惨な血の海の現場に、顔をそむけた。

圭子さんは死にきれずに、手足をふりしぼって、もがきつづけていた。

さっそく、京都第二日赤病院にかつぎ込まれたが、ふつうなら出血多量で、とても生命のおぼつかない致命傷なのに、圭子さんの場合は、幸いにして、十文字にかき切った腹部の傷は、豊富な皮下脂肪に助けられてさほど致命場までには至らなかったが、それでも、腹部五カ所、顔面四カ所、首筋一カ所の裂・刺傷は、おそらく、圭子さん以外の女なら、即死という、きわどいものだった。

悲壯美の極致？

では、なぜ、女の身でありながら、自殺するのに、よりによって彼女は、切腹などという手段に訴えたのだろうか。原因は、自殺を決意する一カ月ほど前に、ふとしたことから交際した東京都在住のT君にあったことにあるようだ。

T君は京都外大に受験のため京都へ来てそこで、圭子さんに知り合うという、スビー

ドぶり、まもなく二人は、新婚気分も晴れやかに、一週間、京都市中を泊まり歩いた。

もともと、文学少女趣味の圭子さんは、性格がとかく内攻性であったために、今まで男の友達というものを知らなかったせいもあって、T君とのわずか一週間の交際期間中、女心のすべてをT君に傾けつくしきってしまったようだ。

こうなると、女は融通がきかなくなるものだ。いづとか、T君あてに書いたラブレターは、そのまま出さずに机の中にしまいこまれていたが、それは、誰がみても、顔を赤らめるような熱烈なもので、乙女心のすべてが燃えあがったように、情熱にあふれた文面であった。

T君が京都外大にパスし、二人で愛の巢をかまえ、はやりの学生結婚をあげて青春をかけようとした圭子さんの願いは、まもなく、T君からのハガキによって、無残にも打ち破られた。

京都と東京の二つの外大にパスしたT君は、やはり、自宅のある東京をえらんだ。そして、T君は、〃京都の一週間は、ほんとに小生にとってはたのしい毎日でした〃

と、さりげなくむすんであった。

冷酷というのはあたらな。T君のほうが、学生としての将来を冷静にみきわめたにすぎないからだ。

すっかり自信を失った圭子さんは、死をみつめるまでの短い間、T君への思慕に耐えつづけるため、日記をかきとめていった。

すでに、肉体的に成熟した圭子さんは、他の同僚のように、夜をすなおに過ごすことさえできなかった。

(ねえ、どうしたらよろしいの、わたしは強いよ、おそろしい復讐だって出来ますわ。胸には勇気がいっぱいなの、覚悟は出来ます。わたしは、さげすまれたくない。むしろ、生きながら墓場に埋められましょう)

これは、T君からおくられたソクラソフ作「デカプリストの妻」という本の中の一節に書かれた妻のセリフであるが、そこには一枚のしおりをはさんでおいたことは、暗に、圭子さんの自殺を思わせるようなものだった。

すると、同じ自殺をするなら、女性に多い睡眠薬か、投身が考えられるが、出刃包丁という不粹(?)な凶器と切腹は、圭子

さんの性格からは、とても想像できないものだ。

もちろん、彼女が、風俗誌に書かれているような切腹マニアではあるまい。しいていえば、自虐趣味が潜在的にあって、それがT君との失恋によって、発作的に爆発しよというよりほかに解釈できそうもない。

悲壮美の極致というが、それにしても、腹を切るとは、ちよつと考えられない。

同室だった学友の安西君校さんは、事件の日のことを、

「圭子さんは、Tさんのことで、あんなことまでして自殺する必要はなかったんじゃないかしら。もしTさんに失恋して、そのつらあてにお腹を切るんだったら、少し圭子さんが異常すぎたんじゃない」

といっているし、最初の発見者住職の妻くにさんは、

「出刃包丁をふりあげて、自分のからだにところきらず突き刺していた姿は、まるで、夜叉のようでした。ただもう、死にとりつかれて、責めさいなむ姿は、平常の圭子さんではありませんでしたね。女の執念とでもいいでしょうか。これでもか、これ

でもかと、血だるまになった姿をみて、私が台所の土間に這いつくばったのも、私は少しも気がついていないんですよ」と生ま生ましい悲惨な現場を思い出しながら、語っている。

自虐の終着駅

この若い娘の切腹事件について、後日、風俗研究家として著名な山下誠一氏（風俗奇譚四月号「鞭打の歴史」の筆者）は、圭子さんの切腹事件を裏づけるような資料、写真を多数提示しながら語ったところによると、現在、いくつかの女性だけのマゾヒストのグループが組織的にあって、そのグループのメンバーは、決められた日に集まり、いろいろと自分の経験を話しあいながらマゾには絶対的な器具、小道具を交換し合うことになっている。

ふつう女性のマゾの場合は、サディストの相手が必要であるが、そこは、一人一人がひそかなプレイをたのしむとあって、自分の操作できる範囲の器具にかぎられる。

たとえば、張り形に似た自慰器具である。それと俗にいう切腹マニアである。

切腹マニアは、サディズム、マゾヒズム、露出症、自虐症、ナルチズムなどの、すべての変態に通ずる性的倒錯のマニアであって、実存する女性のマニアたちも、マゾと自虐の極致をゆくグループである。

美容院の助手の青山利子さん（22歳）は、このグループに入ってから二年になるのだが、最近、ペーパーナイフから、さしみ包丁に、刃物を変えて自虐している。

静かにもろ肌を脱ぎ、ゆたかな乳房に訣別の抱擁を与え、ふっくらとした下腹をあらわにパンティーをずり下げて、前に置いたさしみ包丁を手にするときは、正に恍惚とした気分になる。ドキドキした胸の高鳴りが、しだいに息苦しく迫るころ、なでまわした左手を止めて、包丁を突き刺す（？）ほどばしる鮮血、グイグイ苦痛に耐えながら左から右へ引き裂いてゆく強烈な自虐、やがてオルガスムに似た快感がつきあげ、両手で自分の下腹をかきむしるように悶えながら、からだを投げ出す。

自慰行為の代償として、利子さんの場合は行なわれている。山下誠一氏のコレクションの中に、利子さんの下腹部を引き伸ば

した写真があるが、肌にくっつもの、左右に伸びるような切り傷が走っている。

おそらく、多少の血がふき出したものであろう。

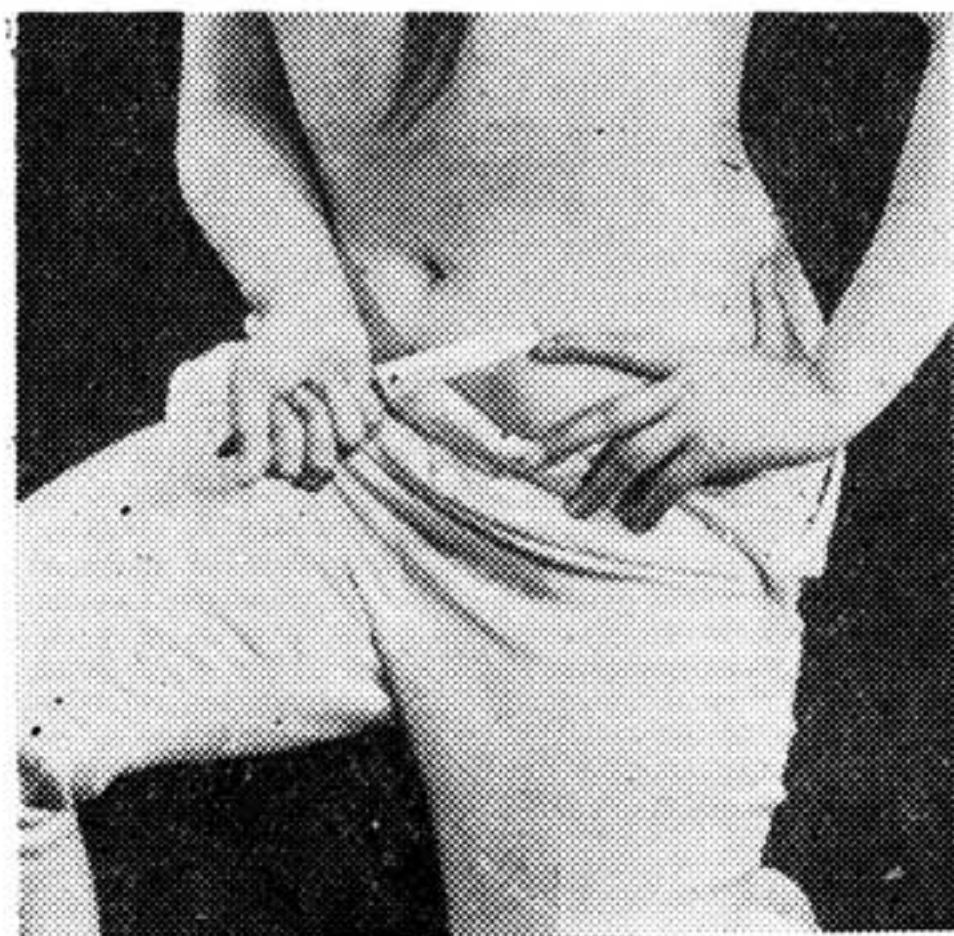
切腹マニアの告白

『私たちは、ただ、お腹を切るだけでは満足しません。いろいろと、切腹をするまでのストーリーを頭の中に考えるのが、私たちのマニアのたのしみなのです。』

ですから、私も、人妻になったり、それこそ麻薬団のボスの情婦になって、純情なボスの子分と姦通して私刑（リンチ）を受ける破目になることなどを想定します。

私の目の前で、男は天井から吊るされたロープに両手をくくられ、ベルトにはめこまれ、その鉄針で五体のところきらず、ザクッ、ザクッと打ちおろされて、そこそ血だるまになってのたうちまします。鉄針は皮膚をひきさき、肉をえぐり、私は椅子にくくられて、その男の最期をみつめます。

断末魔の最後をかざる私刑のフィナーレは、二本のバーベキューのはがねの串で行なわれます。その一本は、まず私の太モモ



に突き刺し、十分に血がのりかけてから、男の局部を左右にぶちぬきます。

この二本の串は、その後、私のどこかに同じように刺されるのかと思うと、もう、生きた心地もしません。

「どうだ、利子、かわいい男の最期だ。水をのませてやれよ」

ボスが、手にしたグラスになみなみと注いだ黄色の液体が、私の鼻の先で白い煙をあげ、ツンとさすような異臭が、脳天をつらぬきます。

「オレの作ったカクテルだ。オイ、のませ

てやんな」

私は、恐ろしくて首をふります。グラスの中の黄色の液体は、もちろん硫酸です。私がいやがるので、ボスはますます凶暴になって、男の口をあけさせると、そのグラスを、思いきり口の中に流しこみます。死んだようになった男は、ふたたび顔面を白煙にもうもうとつつまれて絶叫します。

私は、あまりの恐ろしさに、気を失います。しかし、それも一分と許されません。

つぎつぎに並べられた拷問具から、私が想像できることは、生体解剖でした。メスが十二本、その一本一本に特徴のある鋭い刃、そして、私がボスによって選ばれた張り形には、なんと小形のメスがはめこまれています。

「裏切者の女の処刑だ。たっぷり時をかけて殺してやるぜ」

ここで私は、必死になって哀願します。「へえ、お前が腹を切るんだって……」

ボスをはじめ仲間の立会人は、一様に私の下着の下に盛り上がった腹部を、まざまざとみつめます。

「いさましいじゃねえか。オレの情婦おんなにふ

さわしい度胸だぜ」

私の願いがかなえられます。床にムシロをしいて、私はその上にすわります。

こんなストーリーが、私の頭の中に組み立てられて切腹するのですが、どうかすると、そのために、夜もしらじらと明けることもあります」

このように、秘められた切腹マニアは、自慰の代償として行なわれている。

ことに、そのプレイが重症になると、ふとんの中で仰向けになり、ぬれた手ぬぐいを四つに折りたたんで下腹にのせ、その上に、柄の長いナイフの切先をあてて、ふとんの重みを加えて、長い時間、徐々に重みの加わるナイフの切先に耐えて自虐する女性もいる。

これなどは、なにかの拍子に息づかいを荒くすると、たちまち加速度的に肌に突き刺さる。

まさに、神技とはこのことだろう。こうして考えると、最近の京都で起こった女子学生の切腹自殺未遂事件も、あなたがちお話だとはいいきれないようだ。



サディストの餌食になった美女

ビル・マーカス

真夜中の女の死体

アリゾナ州ホールブルックの西数マイルの西六六号国道の、ドウディのトレーラー・キャンプから1/4マイルほど先で、一台のトレーラーが、道の脇の下水溝に車輪の片側を落として止まっていた。そのトレーラーから両手を縛りあげられ、サルゲツワをかまされた男がひとり飛び出してきて、通りかかる車を待っていた。やがて一台のトラックが走ってきたが、そのヘッドライトの光輪の中に、その男を見つけてブレーキをかけた。運転手は、カンサス州ヴィクタのB・P・ゴーフという男だったが、ヘッドライトに照らし出された男が、電気のコードで両手を縛りあげられるのを見ると、あわてて運転台から飛び下りた。そして、その男を縛りつけていた綱を切ってやると、その男は、

「あいつを殺してやる」

といって、ゴーフのトラックに飛んで行き、運転台の座席の下に隠してあった連発のレボルバー銃を見つけ出し、トレーラーのほうへ駆け出した。

トレーラーは、アルミニウム製の二つの部屋を索引車が引いていたのであるが、前部の部屋へ駆けよつた男が、踏み台を上がろうとすると、そこへ、ぬーっと一人の大男が顔を出した。

「お前さん、どうして抜けられたんだい？」

と冷たい笑いを投げかける大男めがけて、問答無用とばかり、連発銃が火を吹いた。

だが、興奮しすぎていたためだろう。六連発の引き金をひいたのだが、わずかに一発だけが的を射当て、その腹に深い穴を掘った。大男は、材木が倒れるように、トレーラーの下に下水溝に、頭からころがり落ちた。

ちょうどそのころ、ゴーフは、通りかかったもう一台のトラックを止めていた。カリフォルニア州ビューモントの、ビル・ランキンとジョー・ペントリーの運転してきたトラックである。

三人は、下水溝に半ば車輪をつっこんでいるトレーラーのところへ、全速力で駆けつけた。そして、下水溝にころげこんでいる大男と、レポルバー銃を手に抱えて呆然としている男とを発見した。

同時に、トレーラーの中で泣き叫ぶ赤児の声を聞きつけて、踏み段を上がった。そこに

は、全身いたるところに火傷をした全裸の女の死体があった。その女は、わずかに小さな毛布が顔にかけられ、首すじにシーツを巻きつけられて、倒れていた。そのかたわらで、生後一年足らずの赤児が、火のついたように泣いていた。

ランキンとペントリーは、ドウディへ走り、電話で、ホールブルックの巡査派出所へ事件を告げた。

パトロール・カーが、サイレンを鳴らしながら、夜の闇をつん裂いて駆けつけた。一九五三年十二月一日の、夜もふけて、十二時に近い時刻だった。

殺された女は、ベティ・アーレンという二十二歳の新妻で、連発銃の引き金をひいたのが彼女の夫のレイモンド・アーレンであった。赤児は二人のあいだに生まれて十カ月になるチャリシー・アーレンちゃんだった。

そして、レイモンドの銃弾に下水溝にころげ落ちたのが、カール・ホールクという、変態性欲の持ち主であり、この惨劇をひき起こした淫獣ともいうべき男であった。

奇妙な旅行

事件というのはこうだった。

その朝、アルブクォーケの西六六号国道にあるサービス・ステーションへ、車を駆つていた一人の大男があった。カール・ホールクである。そこには、一台のトレーラーが止まっていたが、これがレイモンド・アーレン夫妻のトレーラーで、レイモンドの仕事の関係上、生後十カ月のチャリシーちゃんをつれてペンシルバニア州アリーから、カリフォルニア州サン・ヨーゼへ旅行中のものであった。索引車でひっぱられるトレーラーの二部屋はピカピカ光るアルミニウム製のもので、快適な雰囲気のものであった。

ホールクは、車をとめると、トレーラーに近よつた。トレーラーの踏み段の下には、ちょうどベティ・アーレンが立っていたが、彼女は、からだ全体がふくらとした感じで、人形のように可愛い顔立ちをしていたし、愛敬もあった。

ホールクは、ベティに、みだらな目向けながらも、彼女のトレーラーを、ほめちぎった。そして、幾度かのことばのやりとりから彼女の旅行の目的を聞きだした。

そのサービス・ステーションを出発したのは、アーレン夫妻のトレーラーのほうが先であった。だが、ホールクの車は、トレーラー

と前になり後になりして走った。つまり、上り坂にかかる、ガタゴトとゆっくり進むトレイラーを追い越し、平らなところでは、スピードを落として、わざと、アーレンたちに追い抜かれた。そのたびに彼は、アーレン夫妻に手をふったり、ほほえみかけたりして親密の合図を送るのだった。

夕方、アーレン夫妻のトレイラーは、レストランと車庫のあるドウディのサービス・ステーションで夜を過ごすことにした。ステーションから電気を取り、食事はレストランですましたアーレン夫妻は、十時にベッドにはいった。午後おそくなってからは姿を見せなかったカール・ホールクのことなどは、二人ともすっかり忘れてしまっていた。

ところが、ベッドにはいつて一時間とはたたないうちに、レイモンドは、何かで顔を照らされた光で、ハッと目をさました。懐中電灯の光だった。

「誰だッ！」

レイモンドが誰何すると、返事のかわりに強烈なパンチがアゴに飛んできて、レイモンドはその場に叩きつけられた。そして、手足を綱で縛られてしまった。

ペティもまた、同じように手足を縛りあげ

られた。

そのときになってアーレン夫妻は、彼らを襲った男が、昼間、自分たちと前になり後になりした、あの白髪の大男のカール・ホールクであることに気がついた。

ホールクは、例のみだらな目で、ペティを見ていたが、

「お二人さん、心配することはないよ、ただの追いはぎだから……ところで、金は、どこにあるんだい？」

といった。レイモンドが、「金などない」と断ると、ホールクは、俄然、狂暴な目の色になって、飛び出しナイフをつきつけ、

「言わないと、可愛い奥さんの、からだのうちでも一番大事なところを、えぐりとってやるぜ」

と、スゴんできた。

レイモンドは、やむをえず、金のあり場所を口にした。

だが、ホールクは、金をフトコロにしたものの、格別急いで立ち去るそぶりも見せず、愛想笑いを浮かべながら、

「これから、どちらへおいでになるのですかとたずねた。

レイモンドは、ここでいたずらに彼を怒ら

せるのは得策でないと考えたので、正直に、カリフォルニア州へ行くことを答えた。するとホールクは、

「そいつはいい。おれもそっちの方向へ行くつもりだったのさ。それに、こんな快適な移動する部屋を使ってみたかったとこだ。どうだい、ご一緒願いたいね」

と、周囲をぐるっと眺めまわしながら、言った。

それからホールクは外に出て、ステーションから引いてあった電気のコードをはずすと索引車のエンジンをかけた。

かくてアーレン夫妻は、縛られたまま奇妙な旅に出発したのである。夫妻は、こんなバカげたことがあるものかと思いつつも、あの男は、いったい、どうするつもりなのだろうかと、疑惑にとざされながら、ころがされたまま、車にゆられていた。

マッチで焼かれた髪

車の走る振動に身をまかせながら、レイモンドは、気違ひのようにからだを動かして、なんとか緊縛からのがれようとした。

と、ふいに、トレイラーが一方に、ガタンと傾いた。その拍子に、レイモンドの手を縛

っていた乾し物ヒモが、ゆるんだ。

そのとき、ホールクが何か叫びながら、懐中電灯を照らして、レイモンドに近づいてきた。そして、レイモンドを縛ったヒモがほどけているのに気がつく、また、飛び出しナイフをつきつけて、こんどは手も足も、しびれるほど強く縛りつけてしまった。

それからホールクは、上着をぬいで、狂おしい情欲をたぎらせた顔をゆがめて、ベティの顔をみつめていた。と、さっと片手をのばすと、ベティが着ていた薄いナイト・ガウンをはぎとった。そして、大きく、毛むくじやらの両手を、ベティののどにまわして、しめつけはじめた。

ベティは、声を限りに助けを求めた。赤ん坊のチャリシーも、泣きはじめた。

するとホールクは、ベティをしめつけていた手をほどくと、レイモンドに近づき、彼をまるで赤ん坊のように軽々と抱きあげて、奥の、もう一つの部屋へ運びこみ、その床へころがした。

こうしておいてホールクは、ベティにたいして、姦淫の限りを尽くしはじめた。ベティがいくら哀願してもホールクは、ツンボのように耳をかさず、無慈悲にベティのからだを

利



せめた。

レイモンドは、隣の部屋で、妻の苦しみ叫ぶ声をききながら、身を切られる思いにさいなまれた。そして、なんとかして綱をはずして、妻を救い出したいと身をもがいた。

身をもがいているうちにレイモンドは、足を縛りつけていた、ヒモを切ることに成功した。そして、トレーラーの外に飛びだして、ハイウェイのまん中で、通りかかる車を待っていたのである。そのとき彼は、トレーラーの片側の車輪が、下水溝に落ちこんでいることも発見した。

このとき通りかかったのが、はじめに書いたように、ゴーフのトラックで、そこではじめて事件が明るみに出たわけである。

やがて駆けつけたパトロール・カーは、レイモンドに撃たれて下水溝にころがり落ちたホールクを地方病院へ運び、そこで治療を加えるとともに嚴重な監視下においた。

そして、憂いに沈んだレイモンドは、母親を亡くした幼い赤児とともにホールブルックの、ある学校の先生の家に保護され、そしてベティの死体は、検死のため、ホールブルックの火葬場へ運ばれた。

それとともに、ナヴァホ地方警察は、犯罪

現場を綿密に調査した。午後になって、ドナルド・デ・マーセ博士は、A・G・マック・クロスキー地方検死官に、彼の検死報告を提出した。

それによると、ベティ・アーレンは、カー・J・ホールクにより絞殺されたうえ凌辱され、さらに、六時間以上ものあいだ、無残きわまる拷問によって苦しめられたことが判明した。

ベティの髪と眉毛は、マッチか、火のついたタバコで焼きこがされ、アゴ、首、乳房、腹、そして太腿にも、ひどい焼けこげが見られた。そのうえ、全身いたるところ、噛み傷、打ち傷でおおわれ、しかも何度も姦淫されていた。

そして、取り調べがすすむにつれて、さらに驚くべきことが判明した。それは、ホールクが、以前にも、同じような残虐きわまる犯行を犯しながら、被害者が精神錯乱者であるということと釈放されたことである。彼が、かつて犯した犯行とは、いったい、どんなものであったのだろうか。

砂漠の悪魔

話は四年前にさかのぼる。一九四九年の夏

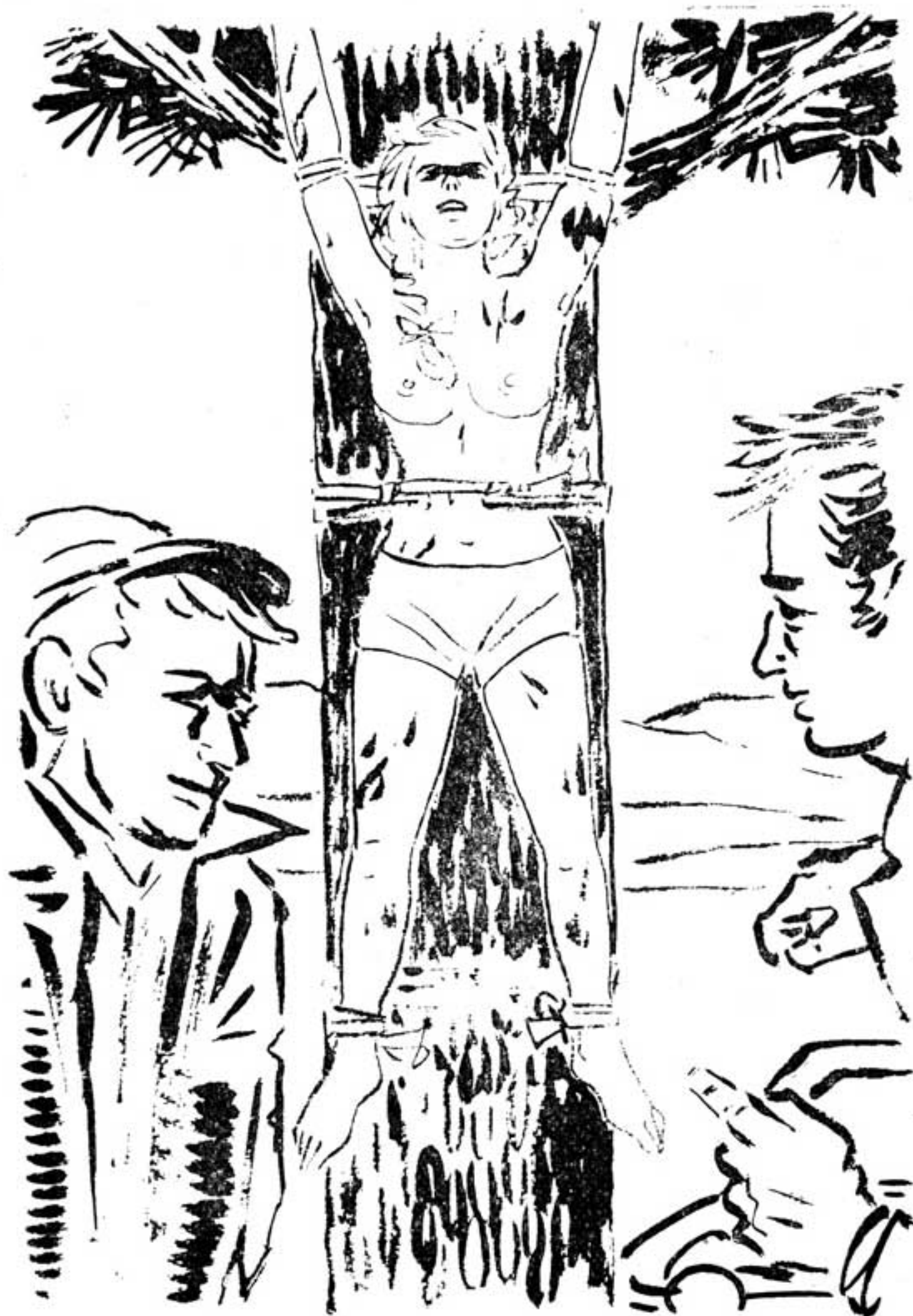
のこと。四四号州道は、南西に広がる、絵のように美しい砂漠の風景の中を、ニュー・メキシコのサン・ヨシドロ方面へと伸びていた。

この道を、夏休みを利用して古いボロ自動車で旅行をつづけていた二人のイースタン・カレッジの学生があった。ところが、彼らの前に突然、思いもかけない、驚くべき光景が展開されていた。もちろん、どんな旅行案内書にも記されていないような、もの凄い光景だったのである。

一人の、若く美しい、というより可愛らしい娘が、全裸で、松の木に結えつけられていたのである。四肢をひろげた姿勢で、着物を裂いてつくったヒモで、しっかりとくくりつけられていたのである。

若い二人の旅行者は、危うくハンドルをきりそこなうところだったが、それでも、やっとなと速度を落として、とまった。二人は、急いで車から飛び下り、その娘を縛っていたヒモをときはなした。

ところが、さらに驚くべきことには、彼女のからだは、無数のミミズばれと、裂傷と、火傷でおおわれていた。そして全身は、砂漠の強い太陽に、ピリピリと焼きつけられていたのだ。



二人は、彼女に、自分たちの着替えのシャツを着せ、パンツをはかせると、ボロ自動車に乗せて、一番近い州警察へと走り、そのまま病院へと運んだ。

彼女の舌と唇は黒ずんで、のどは、かわきのためにはれあがっていた。しかも心が錯乱していたので、何一つ、警官の質問に答える

ことができなかった。

だが、医者が診断したところによると、彼女は、全身いたるところに、火のついたタバコを押しつけられて拷問にかけられていた。

指のつけ根には、マッチで火をつけて苦しめられた跡も認められた。そのうえ、少なくとも三度は強姦された模様であった。

彼女はこんこんと眠り、やがて目ざめたとき、はじめて、州警察のナッシュ・ガルシア部長に、ことの全貌を話した。

彼女の名は、エレオノラ・メイヤーで、十七歳だった。

エレオノラは、パート・タイムのメイドの職を求める広告を、アルブクォーク新聞にのせた。すると、一人の男から電話がかかってきて、郵便局の前で会うことになった。

会ってみると中年の大男で、白髪をしていて、物腰は父親のようにやさしかった。だから、彼に誘われたとき、別段ためらいもせず、彼の車に乗り、彼の奥さんに会うためのドライブとなった。

ところが、砂漠のまん中にあるサン・ヨシドロを出て、十八マイルほど行ったら、北へ方向を変えたので、そっちへ行っても町がないのを知っていたエレオノラは、急に不審の念を抱きはじめた。そこで、どこへ行くのかと男にきくと、彼は笑いながら言った。

「うちの女房は、おまえとオレが、どこへ行こうと騒ぎはしないさ。あいつは、テキサスにいるんだからな」

・エレオノラが、ハッとするのを見た男は、ニヤリとして、彼女の着ているものを、一つ

一つはぎとっていった。そして、医者が診察によって判断したように、タバコの火をあちこちに押しつけながら、彼女の肉体に、情欲をぶっつけてきたのである。

エレオノラは、幸いにも、その男の乗っていた自動車のプレート・ナンバーを覚えていた。それを手がかりに、ガルシア部長はすぐ手配をして、男を逮捕した。

その男がカール・J・ホールクで、当時十五歳だった。そして彼は、アルブクォーカに本拠をおく、巡回カーニバルのホールク・セレブレイション・ショウの座長であった。彼は、エレオノラがいったように、大きく、がっしりとしたからだをしていた。

ホールクは、暴行の事実をあっさりと認めた。だが、それと同時に、巧妙な逃げ道を彼は用意していた。精神異常者の訴訟は成立しないという法律をタテにとったのである。

つまり、肝心のエレオノラが、精神錯乱状態に陥っていたからである。彼女は、可哀想にも、ひどい仕打ちを受けたショックから、反狂乱の状態で、しかもそれが、日一日と、だんだんひどくなっていたのが、ホールクのつけ目となったわけである。

あろうことか、ホールクは、逆に、精神錯

乱者の訴訟を取り上げて逮捕したことに対する損害賠償の請求さえ起こしてきたのであった。

そして、一九四九年十一月一日、地方検事のR・F・ディーコン・アルレッジは、エレオノラの精神異常を認めざるを得なかった。そしてエレオノラは、ラス・ヴェガスの州立精神病院へ収容された。

だが、ホールクの犯行は、婦女暴行、未成年者凌辱の罪名で、裁判にかけられた。そして有罪とされ、婦女暴行については十年以上十五年以下の不確定懲役、未成年者凌辱については五年の禁固、しかも、この二つは併合して執行されることに判決が下された。

だが、ホールクは、州の上級裁判所に、上告した。そして刑の執行は留保された。

新しい裁判では、原告のエレオノラ・メイヤーが法律上、精神異常者であることを認め、彼女が正常な頭脳の持ち主であると証明されるまで、ホールクの刑の執行はなし得ない、という理由のもとに、三年後、つまり一九五二年の十一月まで罪の確定はできないと宣告された。ニュー・メキシコ州の法律が、そう決められている以上、いかんともできないことであつた。

エレオノラ・メイヤーは、もはやまったくの精神異常者になってしまったので、その証言は法廷で認められないことになっていた。それに、ほかの証人は、すでに他州に去っていた。

ホールクに対する婦女暴行罪は、却下された。そして、彼の請求した下級審に対する損害賠償は認められ、刑務所にいた五年分の賠償金が支払われた。

かくて、罪もない少女をいけにえに、無残にも野獣のごとき虐待を加え、姦淫をほしいままにした男は、自由の身となり、弁護士の手保護のもとに、刑務所から釈放されたのであった。

民衆は激怒した。だが、州の法律が尊重されねばならない現実はいかんともしがたい。法の盲点をうまうまと利用した性の淫獣は、かくして刑の執行を中止させたのである。

カール・ホールクとは、そういう男であつたのだ。

合法的な殺人？

一九五三年十二月十五日、ホールクは、レイモンド・アーレンに撃たれた傷も回復しつつあった。だが、こんどは、とうてい罪をま



殺人のカール・ホールク

ぬかれなないと考えたのだろう。地方弁護士のエメリペン・T・シェリーが、必要な訊問を行なったとき、今度は、自分が精神錯乱の状態にあると思わせようとして、まともに応答できないふりをした。と同時に、第一級の殺人罪の嫌疑は不当であると言いだした。

一方、レイモンド・アーレンは、妻のなきがらと、幼い息子をともなうて、ペンシルバニアへ帰った。そこで、愛する妻ベティを埋葬した。カリフォルニアで、家族とともに、新しい生活にはいるとした彼の希望は、無残にもついえ去ったのである。だから、今後

の方針をどうするか、決めることさえ出来ない状態であった。

だが彼は、ホールクの裁判で証言するためアリゾナへ行くことだけは、決して忘れさってはいなかった。いや、それだけが、あの悪鬼のようなホールクを法の裁きによって葬り去ることだけが、目下の彼の生き甲斐だといえよう。

それとともに、ニュー・メキシコやアリゾナで、民衆の抗議の声が高まっていった。ホールクのように恐るべき淫獣者が、一度罪を犯しながらも釈放され、そして第二の、罪なき犠牲者を彼の好色のいけにえにするこの法律の矛盾に対する抗議であった。

ニュー・メキシコ出身の上院議員クリントン・アンダーソンは、次のようにいっていた。

「私は考えてみてゾツとした。われ

われは法律に従わねばならない。そしてまた私刑を廃止することにも成功した。だが、それと同時に、犯罪者が、法を逃がれてはびこる「法律の盲点」をつくっていることを、われわれは考え直さなければならぬ」

アンダーソン議員のいうとおり、ホールクは、首尾よくはびこっていたのだ。だが、こんどは、そうは問屋が卸さなかった。一九五四年二月十八日、上級裁判官ドン・T・コールドは、ホールクを第一級の殺人犯とし、ガス室で死刑することを宣告した。

ホールクは上告したが、結果は変わらなかった。そして一九五五年三月四日朝七時、ホールクは死刑椅子に縛られ、数分にして死んだと、刑務所医師のE・L・ヘープ博士によって発表された。

かくて、凶悪無残な野獣のごとき婦女暴行者は、法の裁きを受けて死刑に処せられたのであるが、法律の抜け道さえなければ、少なくともベティ・アーレンは被害を受けなくてすんだらう。

民衆は、「合法的な殺人」が許されているのかと、法律の盲点を非難しているが、エレオノラ・メイヤーも、ベティ・アーレンも、生き返ってきはしない。八池崎新太郎・訳V

性的イレズミ考

千石 仙太郎

イレズミは、もともと、性的な意味合いを含んでいる。ことにそれが、女性に施されるときは、いっそうその感が深い。

女性にイレズミをすることによって性的興奮ないし満足を得る男性の一群もいれば、逆に、イレズミされることによって性的興奮ないし満足を得る女性たちもいる。

だが、そうしたイレズミも、類別してみると、宗教的、魔術的、呪詛的な意味をもつものから、肌を見せるにしても勇み肌のほうがより相手を感じさせるし、自分も満足できるといったものもある。ある種族では、結婚習俗として施すものもある。

だが、ここでは、そのフェチズム的な意味合いをもつものとして、むかし、遊女がその肌に施した「起請彫り」と、挑発的イレズミについてみてみよう。

ミについてみてみよう。

命と誓う「起請彫り」

「起請彫り」とは、偽りなきことを神仏にかけて誓うためのイレズミで、言うまでもなく、男女の恋愛関係にもとづく起請のためのイレズミである。これは古く、慶長、元和のころから行なわれていたといわれている。

その方法は、右腕か左腕などに、恋する相手の名を、その人に書かせて、その筆跡をそのまま彫り入れ、その下に「命」という字を加えるのがふつである。もちろん、その人のためには、命にかけてもという心ばえを示したものである。

宝暦ごろから以後は「……命」のほかに、「一心」などという文字も加えたが、この、

「一心」などは、おきやんで、粹な、江戸前の女ごころを、いかにもよく現わしているではないか。

この「起請彫り」は、西鶴の「男色大鑑」などにも書かれているように、徳川のはじめごろ、例の色若衆がもてはやされた当時では、男色関係の男子のあいだでも行なわれていたが、もちろん男女間のもののほうが、さらに古く、また多い。

こうした性的なイレズミをする様子や、それにかままるロマンスなどを、たくさん取り扱ったものとしては、古くは畠山箕山の「色道大鏡」などがある。

そんなわけであるから、この起請彫りについては、江戸芸術の浮世絵や小唄にも取り入れられて、美しく詩化され、なまめかしく美化されている。たとえば、清元の「月雪花蒔絵」のなかには、

へほんに腕へ入れボクロ、互いに名をばほりの内……

とあるし、常盤津の「乗合舟」には、
へ互いに二世と墨さして、誓文楔放れぬなかを……

とあるし、長唄の「菖蒲浴衣」では、
へ髪びんのほつれをカンザシの、届かぬ愚痴も

惚れた同士、命と腕に堀切りの、水に色ある……

と、美しくぼかしてある。また、清元「かさね」の前段くどきの終わり、のほうに、へ入れぼくろ入れぼくろ、起請誓紙は反古にもなるが、五月六月はまんざらほぐにもなりやせない……

という文句がある。

この起請彫りを反古にしてしまう場合は、そのイレズミの上に、炙をすえて、これを消してしまうことになっていた。だから、そのころの川柳で、

太えアマ腕に火葬が二つ三つ

などと、浮気女を鋭く皮肉っているのが見えている。

また、歌麿のかいた「おさん茂兵衛」をはじめとして、浮世絵のよい題材として、しばしば取り扱われている。

色とりどりに挑発的

挑発的なイレズミは、はじめは単に、異性の注目をひくためにされたものか、あるいはその目的で一種の変態的な装飾程度のものであった。それが、文化の爛熟するにつれ、彫り師の技巧の進歩と相まって、次第に遊戯化

され、ついには、まったく挑発的なものとなってしまうようである。

文化のころ「蟹のお角」という女は、その秘所の近くにカニを彫りつけ、それがまさにハサミをふりたてて没入しようとする図柄であった。彼女は、それを公衆の面前にさらして、もしそれを見て笑う人があれば、それを口実に、金銭をゆすったということである。

また、下谷黒門町の近くにいた「紋ちらしのお玉」という女は、上野の坊中に出入りして寺侍と密通し、そのたびごとに、その男の家紋をからだに彫りつけた。その後、芸妓になったが、肉体に紋を彫ることをつづけて、百数十。全身いたるところに及んだと伝えられている。

こういうイレズミの場合、その図柄は、多くは、松タケ、挑、フグ、赤とうがらし、ひよっとこ、猫、カニ、ダルマなどが選ばれたが、中には、そのものズバリに男女のモノを形どったり、明らかに春画を描き彫ったものも少なくなかった。

ことに、豊かな女の肌に彫る場合は、その筋肉が流動するときの表現効果を、極致にいたるまで利用して、巧緻をきわめているものもあった。

この挑発的なイレズミは、イタリア、フランス、ドイツ、アメリカなどの各国でも行なわれているもので、戦前、昭和のはじめにドイツで出版された性話大辞典の「ヴィルダ・レキシコン」の「Tatowierung」の項に、その代表的な写真が何枚が挿入されていた。

それらの中には、肩の背にカルタのクラブやハートを彫った、比較的上品なものもあるが、腹部前面いっぱい、男性のシンボルを無数に彫りつけたものもある。

フランスの売春婦が、ヘソの上に「A Tol」（あなたのもの）と彫り、下腹部に「Amour」（愛）と彫りつけ、その矢が秘所を示しているのなどは、なかなか洒落てもいる。

戦後、アメリカ兵が進駐してきたとき、彼らのあいだに、イレズミが流行していたことは、一般に知られていることである。だが、これは、日本のイレズミ式のものでなく、特殊な薬品によって描かれたものである。

それにしても、その図柄は、挑発的なイレズミと軌を一にして、頭文字から、女性の名前、女性の裸体やら、男女の性器、あるいは接吻抱擁の図など、そこには少しの洒落っ気も感ぜられず、享樂的なおいの強かったのも、やはりお国柄というべきであろうか。

混

線

結

婚

—— 妹のかわりに兄が花嫁となり、兄のかわりに妹が花ムコとなつた話 ——

佐 野 和 彦

病氣の花ムコ、嫁取りのこと

いつ、いかなる時代でも、結婚というものは、運命によって支配されるものである。

運命がそうしたいと思えば、どんなに遠く離れている男女でも、結合することができ、運命がそうすることを望まなければ、たとえ壁一重の間柄でも、顔を見合わせることもさへ、さまたげられる。それらすべて、生まれる前から定められているので、人間の力では、どうすることもできないのである。この物語りは、こうした運命をマザマザと取りあつた一つの例といふことができよう。

かつて、ラン・チューに、劉りゅうという医者が住んでいた。劉には男女二人の子供があつて、兄はディアマン・ピエルジュといい、当年十七歳であつた。そして、ディアマンは、孫家そんけの娘ペルルと許婚の間柄で

あつた。

彼は、頭がよく、學問が非常に得意だったので、だれもかれも、近いうちに、この若者は文官試験に及第して、立派な名譽を得るだろうと期待していた。

妹の名前はサゼツスといつて、当年十五歳になつたが、最近、近所に住む藥商のフェイ氏の息子と婚約が成立して、結納品を受けたばかりのところであつた。

ある日、フェイ氏のところから人が来て、息子とサゼツス嬢との婚禮の日をいつにするのかと催促した。しかし劉家では、兄のディアマンの結婚式のほうを、妹より早くかた付けたいといふので、その理由をフェイ氏のほうへ知らせ、しばらくの延期をねがい、一方では、いよいよ日を選らんで、ディアマンと孫家のペルル嬢との式を挙げることにした。



ところが、不幸にも、その日がさしせまってから、ダイヤモンドは重い病気にかかってしまった。そこで父親は心配して、結婚を一時中止したらどうかと、夫人に相談をもちかけた。ところが彼女は、夫の意見に大反対であった。

「だって、おまえ、もし、あの子が無理をしたために死ぬようなことがあったら、どうするんだい」

「なーに、よござんすよ。すぐ結納返しをしてしましましょう。そうしたら、だれも文句のいいようはないでござんしょう」

この、人のいい医者は、世間一般の男と同じように、細君に対しては、綿のように軟弱だった。それで、万事は細君の采配のもとで行なわれた。

ところが、不幸なときは不幸が重なるもので、劉家の隣人の中に、一人金棒引き^{かなぼうひ}があつて、劉氏の息子のダイヤモンドの重病をかぎつけると、よせばいいのに、そのことを、手柄話をするように得意な顔をして、孫家へ知らせにいったのであった。

これを聞きつけた孫氏は、娘の前途を心配して、ただちに、仲人を劉家にさし向けて、ムコの病状をたずねさせた。

両家の間にはさまった仲人婆さんは、困りきってしまった。だが、仕方がないので、劉家へいって、この結婚は、一時中止してもらいたい。それから孫氏のほうから、ダイヤモンドの病気見舞いかたがた様子を見るため、ペルル嬢さんの乳母が来るから、ということを告げた。

劉氏は、この不意うちにびっくりしてしまって、どうしたらいいのやら、さっぱりわけがわからなくなってしまった。そのうちに孫家の乳母が、見舞いに来たので、やっと挨拶はしたものの、さて、なんとしても仕方がないので、そのお客の相手を仲人にたのんで、自分は夫

人をさがすために奥にひっこんでしまった。

そして、そこで、乳母の来訪を妻に話してから、

「だから、わたしは、結婚式の日を変更したほうがいいと、いったんじゃ」

「どこまで、おまえさんときたひにや、トンマなんでしょう。あの娘は、もう私の家のヨメじゃありませんか？ まあ、いいから、わたしのやることを、だまって、みていらっしゃい」

夫人は、妹のサゼッスを呼んで、

「おまえは、大いそぎで広間をかたづけしてくれ。孫家の乳母さんが氣にないように、飾っておくんだよ」

夫人は、すぐ孫家の乳母の待っている部屋へ行って話しかけた。

「いらつしゃい。なにか、花嫁のお母様が、おっしゃったのですか？」

「はい、奥さま。実は、うちの奥さまが、ディアマンさまのご病気を心配なさいますして、もし、あまり悪いようでしたら、今度のご婚礼は、すこし延期したらどんなものかといひますので、お見舞いかたがた、そのお話をうかがってこいと、申されましたわけでございます」

「まあ、それはそれは、ごていねいさまでございますことですが、息子はちよつと風邪を引いただけでしてね、日を延ばすなんてことは、私どものほうでは少しも考えてはおりませんよ。それに、用意もすっかり整ったし、招待状も、それぞれにもう出してしまつてありますからね。もしも、延期なんかしたら、それこそ世間では、あなたのほうが、この縁をぶちこわしたようにいひますよ」

「では、ちよつとお見舞いしたいものでございますが……」

「いえ、実はいま、薬を飲んで眠っているのですよ。それに、ほんの

ちよつと風邪を引いただけだといっているではありませんか！ おまえさんは、わたしの言葉を信用できないとおっしゃるのかい？」

「どう致しまして」

乳母は、狼狽しながら、ていねいにいった。

「どう致しまして。さようでございますれば、わたくしはこのままお暇をいただくばかりでございます」

「まあ、まあ、そういわずに、せつかく来たのですから、お茶でも、めしあがつていってください。それから、部屋部屋の様子も、ついでに見ていってくださいな。もうもう、すっかり取りちらかしてはおりますが……」

乳母は、すすめられるままにあがつて、新夫婦の部屋がどんなになつてゐるのかを調べてみた。

「この通り、まあどうやら整頓が終つたばかりというところですが、これから、もっときれいにするつもりですよ。もし息子が、式の後でさっぱりよくならなかつたら、いつもの通りになるまで、わたしの部屋で介抱してやるつもりでございますのよ」

と劉夫人は、乳母にいった。

花嫁の兄、花嫁に化けること

お茶が終つてから乳母は、いとまをつげて帰つていった。

そして家へ帰ると、乳母は、主人たちに、劉家の様子を、一々復命した。

孫氏夫妻は、迷わざるをえなかつた。もし式を挙げてからムコが死にでもしたら、娘はあわれなものだし、といつて、ムコの病気が先方の言う通り軽いものであつたのに結婚を中止すれば、今までの準備も

先方に送った結納品もフイになってしまふ……。

すると、そばにいた息子のユー・ランが、不意に口を切った。

「面会させないようじゃ、ディアマン君の病氣は重いようですね。ぼくは、妹をそんなところへやりたくはありませんよ。ところで、ぼくにいい考案があります。あの仲人を劉家へやって、結婚の日を厳守することは承知しました。だが、嫁入り道具と持参金とは、ムコさんが全快してから運ばせます、といわしてご覧なさい。先方ではおどろいて、ことわって来ますよ。そしたら、こちらでうまくやって、世間の非難を全部、向こうさまへおしつけてしまふのですね」

両親は、息子のいったことを、しばらく考えていたが、

「しかし、おまえ、先方が、それでもいいといったらどうするね」

「なに、絶対、承知するわけがありませんよ。だれが、持参金も持って来ない余分な人間を貰うもんですか」

この時、父親はふいに言った。

「よし、先方が承知したらだね、お前、妹に変装して行きなさい。もしムコが本当に悪かったら、向こうだって、世間の非難がおそろしいから、なんともいうまいよ」

「だって、そんなことはダメですよ。第一、すぐわかってしまふじゃありませんか。それに、そんなことをすれば、あとになってから、なんとか、かんとかいうに決まっているじゃありませんか」

「なんの、世間じゃ、おまえがうまくやったというだけさ。おまえはまだ若いし、それに、妹とはよく似ているから、知らない人の前だったら、十分ごまかせるよ。嫁入り支度をしてかぶり物をつけるから、だいじょうぶだよ。そうすりゃあ、ムコが悪い場合には、娘も、持参金も、やらずにすむわけだ」

劉夫人は、孫家からの申し出に接したとき、持参金なしではと、一時ちゅうちょしたが、もし断れば、こちらのウソがばれてしまいそうだから、ついに決心して、全部、先方の言う通りで承知したからとことずけてやった。

ついに結婚の当日がやって来た。ユー・ランは、花嫁に変装しなければならなかった。

ところが、二つの大障害にぶつかってしまった。第一は、足の問題であった。妹の金蓮三寸という美しい足を、いかにして模するか？同時に、髪も困ったものである。それから、あのそよ風に揺られて動く花のような、なやかな歩きぶりをどうすればよいか？

仕方がないので、皆で相談した結果、ユー・ランに、地までたれた長い上着を着させて、妹の歩き方を練習させた。

妹のペルルは、兄の不器用な歩きぶりを見て、涙を流して笑っていた。つづいて、耳輪を用意しなければならなかった。ところがこれは幸いにも、ユー・ランの左の耳たぶは、子供の時から、悪魔よけのために、女の子のように、穴があけて輪が通っていたので、非常に都合がよかった。だが、右の耳には穴をあいてないので、やむをえず、ごく小さなこう薬を張って、穴のようにごまかした。

それから、真珠でかざったカツギを顔から肩までたれさせた上に、金銀をちりばめた衣装で身体全体をつつみ込み、唇にも、ほおにも、すっかり化粧を施して、こうして、やっと、変装ができたのであった。

いよいよ、その晩になると、タイコやフエが鳴りわたって、花で飾られた輿が、部屋の中央にそなえられた。まんまと一ぱいくわされたとも知らぬ仲人は、輿の幕をかかげながら、ニセ花嫁の美しさを、ほ

めちぎった。しかし、兄のユー・ランの姿が見えないので、家の者に問いただすと、ちょっと具合が悪いので寝ていますと、何気なく返答した。いつわりの花嫁は、通例通りにむせび泣きながら、父母にイトマを告げた。

こうして、嫁入りの行列は練り出したが、道具としては、皮のカバン一個が吊られて行くにすぎなかった。

花ムコの妹、兄の代わりをすること

話変わって劉家のほうでも、大さわぎであった。

「花嫁が着いた時、息子が儀式通りにやれなかったら、婚礼の式は挙げられないじゃないか？ 花嫁が一人で先祖におまいりするなんて、出来ることじゃないよ。そんなことは、きいたこともない。いったいどうしたらいいんだろう」

「ヘン、それじゃ、おまえさんは、どうしたいというんだね？ なにも、妹を兄の代わりにすればいいじゃないか。あの娘なら、儀式通りうまくやってくれるにちがいないよ」

実際、妹のサゼッスは、立派にやった。

興から花嫁を迎え降ろして、礼式通りの挨拶をしてから、神前へ導いた。

多くの列席者は、二人の男女が、結婚の式を挙げるのを、晴れやかに笑いながら見守っていた。

劉夫人は、花嫁を息子の床へ連れていったが、肝心の花ムコは、さつきからのさわぎのため、気が遠くなっていた。それで、大いそぎで熱いスープをいくさじも、いくさじものませなければならなかった。

それから人々は、やっと花嫁を、準備しておいた別室へ連れて行っ

たが、大きなカツギを取りのけると美しい生き生きとした顔があらわれたので、一同は思わず声をあげてしまった。しかし、さすがに劉夫人は、こんな病人で、共に夫婦の生活を満足に楽しむことが出来ない夫を、この美しい花嫁に運命づけてしまうのが気の毒になって来た。

ニセ花嫁のユー・ランのほうでは、自分をジロジロ見るお客のぶしつけさにすっかり困ってしまったが、それよりも、なによりも、サゼッスのあまりの美しさには、おどろくとともに、なんとも言いがたい感情にとらわれて、自分はサゼッスのほうばかりが、気になってしかたがなかった。

「ああ、あの娘に、許婚の男があるなんて、なんという不幸だろう？ あの娘こそ、オレにさずかった本当の女だのに——」

一方サゼッスはサゼッスで、ユー・ランに、なんともいえない魅力を感じていた。彼女は、母や仲人婆さんに言った。

「まあ、兄さんは、今、病氣だなんて、本当に気の毒だわ。あんなきれいな花嫁さんを。でも、花嫁さんだって、今晚一人ですぐすということがわかったら、どんなに寂しがることでしょう。だけど、あの人は、ほんとうに美しいわ。私のおムコさんも、あの花嫁さんくらい美しい男だったら、申し分はないでしょうにね」

そのうちに、式もようやく終わりをつけて、音楽も止み、お客たちもみな、それぞれ退席した。それでニセ花嫁は、付き添いの乳母に守られて自分の寢室へ退き、やっと自分一人になったが、もう眠ろうなんて心持ちは、どうしても起こらなかった。

また、劉夫婦のほうでも、さて、これからどうしたものかと、相談をはじめていた。

「婚礼の夜に花」を一人でねかすということは、どう考えてみても無

理な話だね。どうだろう、サゼッスに今晚、花嫁の寢室へ行ってくれ
るように話してみたら？」

サゼッスは、むろん賛成であった。そこで母と娘は、花嫁のいる寢
室へ行つて、幕で閉ざされた寢台へ近寄つた。

「嫁ごや、お前さん、今晚はお前さんの美しい義妹いもうとと一緒に寝てくだ
さいね」

ユー・ランは返答に困つた。自分が男であることを発見されては大
変だというので、幕の中で蒲団をかぶつて、小さな声でやつと答えた。

「でも、わたしは、いつも、一人で寝ますのよ」

「なんの、お前さんたちは、ちょうど同じくらいでしょう。それに、
もう姉妹じゃありませんか。ちつとも心配することはありませんでし
よう。なかよく、お話でもしてちょうだいね」

ユー・ランは、怖れと喜びとで身ぶるいつていた。

サゼッスのお母さんが、みずからオレのところに来てくれる
なんて、こんな機会がまたと来るだろうか？ しかし、サゼッスがオ
レのことを言いつけたら？ ……彼はまた、考えこんでしまった。

「あの娘は、もうすでに十五歳になっている、身体も心も十分発達し
ているようだ。オレが注意して、徐々に言いつたら、もしかしたら、
オレの釣り針に引っかからないこともあるまい」

そのとき、もう劉夫人は部屋から出ていった。サゼッスは、の扉錠
をしめてしまうと、菊のように美しい顔に一ぱい笑みをうかべながら
ユー・ランに話しかけた。

「姉さん、あなた、ちつとも休まないじゃないの。お腹がすきやしな
くって？ 欲しい物があつたら、おっしゃいね、なんでも探して来て
あげるわよ」

「本当に、親切にありがとう」

サゼッスはランプの心しんがまだ長くて、灯が赤く、真っ直ぐに立ちの
ぼっているのを見て言つた、

「姉さん！ これ、あなたが幸福なしるしのよ」

ユー・ランは、思わずふき出さずにはいらなかった。サゼッスは
真っ赤になつたが、一緒に笑い出して、

「まあ、あんた、たくさん着ているのね！」

このようにして二人は、語りはじめた。とうとうサゼッスは、花飾
りのかぶり物も着物もぬぎすてて、自分の寢台へはいつていった。

「姉さん、あなたは、どっちを下にして寝るの？」

「あんたの好きな通り」

「じゃあ、おんなじようにして寝ましようね」

「ええ」

サゼッスはすっかり裸になるために、蒲団の中へもぐりこんだ。

ユー・ランも、同じように衣類をぬぎはじめた。寢台の側の小卓に
乗せられたランプは、薄い幕を透してボーッと寢室を照らしていた。

ユー・ランはたまらなくなつて来た。

「あんた、いくつになつて？」

「今年で十五だわ」

「もう、おムコさん、決まつて？」

サゼッスは、なんだかはずかしいような気がして、だまつた。ユー
・ランは、やさしく娘の耳のそばへ口を持っていつて、小声でつぶや
いた。

「なぜ？ はずかしいの？ だって、わたしたちは、二人とも女じゃ
なくって？」

サゼッスも同様に、きわめて小さな声で答えた。

「あたし、じつは、藥屋のフェイさんとこの息子と許婚なのよ。みんなは早く式をあげたらっていうけども、まだ、決定したんじゃないから、いいのよ」

「あんたは、急いでいるんじゃないって？」

サゼッスは、静かに自分の頭をかきながらいった。

「そんなこと言って、あたしをからかっちゃいやよ。あたしが急いでないより、あんたのほうが、もっと急いでないようじゃないの？」

「まあ、この娘は、どうしてそんなことを知っているの？ 第一、わたしたちは、女同士だもの、なんともしようがないじゃないの」

サゼッスは笑いだした。

「姉さんたら、うちの母さんのようなこというのね」

「わたしの年ごろは、ちょうどあんたのおムコさんにうってつけよ」

と、ユー・ランは、娘の心をとろかすようにいった。

「あら、それは、あたしのほうだわ。なぜって、あたし、兄さんの代わりにあんたと式をあげたじゃないの」

「もう、ケンカはやめやめ。これからわたしたち、夫婦同士のようにしましょうね」

身がわり花嫁は男、花ムコは女ということ

二人は氣を入れて話し合っているうちに、ますます浮き立って来た。やがて、耐えきれなくなつて、ユー・ランがいった。

「わたしたちは夫婦でしょう。だのに、なぜ一緒に寝ないの」

といいながら、ユー・ランは、厚い羽根蒲団をおしやって、サゼッスの上半身を、静かにやさしく愛撫しはじめた。

彼女は、下着を一枚着ているだけだった。こうしているうちに、ユー・ランは、思わず胸がときめいてきた。

サゼッスも、なんとなく熱っぽくなって、あえて、ユー・ランの手を押しのけようとはしなかった。

そこで、彼の手はだんだん下にさがって、トサカのように赤く堅い、なんともいいようのない、素晴らしい乳首のある胸のところまで来た。サゼッスのほうでは、半ばじょうだんに、ユー・ランの乳をさぐりはじめた。

すると、ぼつちりとした乳首もないので、ぎょう天して考えた。

「——この人は、わたしとおんなじぐらい大きいのに、どうして、こんなに発育が悪いのでしょうか？」

しかし、ユー・ランのほうは、しじゅう戯れのような風をよそおいながら、すっかりサゼッスをだきしめて、自分の口を彼女の口におしつけた。

そして、大胆にも、舌を差し入れて、娘の舌をかんだり、また、かませたりした。

彼は、この若い娘の身体が溶けてしまいそうになるように、やわらかく愛撫しつづけた。

それで、サゼッスは、絶えだえの声でつぶやいた。

「お遊びごとじゃないわ……これじゃ、ほんとの夫婦だわ……」

ニセ花嫁のユー・ランは、はやくも娘の氣が移って来ているのを見てとった。

「まだ、だめよ。そうなるには、この下着もぬがなくちゃ……」

「だって、だれかがおしゃべりすると悪いは。下着はぬがないほうがよくなくって？」



彼は、おもわず笑い出してしまった。娘のいうことは少しも耳に入れず、その下着をだまてぬがしてしまった。そして彼の手が、なお進んでサゼッスの大事な場所へ行こうとした時、娘は思わず大きな声をだして、両手でそこを押えた。

「マ、姉さん、姉さん！ そんなこと、イヤよ！」

しかし、ユー・ランは、まだ娘の口に接吻していた。

「あんた、かくさなくっていいのよ。あんたも、わたしを、そうすれば、いいじゃないか」

サゼッスも、意気地なしに見られたくないもので、自分も、相手の下着をぬがして、こわごわ手をやって見ると、たちまち変なモノにぶつかった。

その時の娘のおどろきといったら？ しばらくは、あまりのおどろきに、口もひらくことが出来なかった。そして、やっと、

「お前さん、だれ？ 姉さんに化けて来たの……」

「ボクはおまえの夫だよ」

ユー・ランは、娘をしっかりとだきしめながら答えた。しかし、サゼッスは彼をおしのけて、厳格な調子で語った、

「本当のこといわなきゃ、あたし、大きな声を出して、みんなを呼ぶわ、あんた、あとになって悔いるわ」

「怒らないでネ、ボクは本当のこと言っちゃまうからね。ボクは孫家のユー・ランだよ。今夜の花嫁の兄さ。両親が、あんたの兄さんの病気をききこんだので、妹を家から出したくなかったんだよ。ところが、あんたのお父さんやお母さんは、結婚の日を変更しないのだから、仕方がないので、ボクが妹に変装して、ダイヤモンド君のよくなるまで、身代わりをつとめることにしたわけさ。だが、ボクは、あんたの夫に

なることを天が許してくれるなんてことは、夢にも思わなかったよ。ボクたちの心持ちは、ボクたちだけが知っているのだ。だれだって、それを破壊することは出来やしないんだ」

ユー・ランは、ますます強く娘を抱擁した。サゼッスとしても、今や、しばらく自分の胸の奥にしずんでいた女性というものを意識して来た。彼女は、はじめは彼を、友情をもって遇した。ところが、今では、友情がとつぜん、はげしい若者の熱情にあおられて、燃えるような愛情に変化したのに気がついた。処女の羞恥もいっしか無恥におおわれて、ついには、完全に男のものになってしまった。

ユー・ランは、この生き生きとした、若い、むしろ、まだ無邪氣とさえいいたいほどの娘に対して、変わらぬ誓いをささやいた。

愛は山よりも高く、海よりも広い。結合ということは、見さかいのないほど幸福なものなのだ。それでこそ、許婚も、親も、羞恥も、なにもかも忘れてしまうのであるなどと話をして聞かせた。

サゼッスは顔に手をあてたまま、もう、少しの抵抗もしようとしなかった。

やがて雲雨が晴れると、二人ともしっかりとだき合ったまま熟睡に落ちていった。

しかし、付き添いの乳母にしてみると、いかにゴマ化すことにはなれているといっても、初め当家の娘サゼッスがニセ花嫁の部屋で寝るということを知ったときは、ギョッとせずにはいらなかった。

そこで、乳母は、となりの部屋に忍びこんでいった。そして、きき耳をたてて中の様子をうかがったが、うれしそうな笑い声、それからタメ息がもれて来たが、その後には、もうなんにも聞こえて来なかった。乳母は、事の終わったのを推察した。

病氣の花ムコ、全快すること

朝になって、サゼッスが、化粧のために、両親の部屋のほうへ行つた。あとで、乳母は、ユー・ランの仮装を手伝いながら、声をひそめていった。

「まあ、若主人さま！ あなたは、うまいことなされたね！ けれども、それが、わかったらどうなさいます？」

「どうしていいか、ボクにもわからんよ。あの娘の母親が、自分でボクのところに連れて来たんだもの、ことわりようがないじゃないですか」

「だが、ガマンのしどころで、ございましたよ」

「あんなにすばらしい娘と、一緒に寝てもかい？ じょうだんじゃないよ、鉄や石で出来た男だって、ガマンがなるものかね。それに、お前さえだまっていたら、あのことがだれに知れるものかね」

やがて、ユー・ランの仮装が出来上がると、劉夫人のところに挨拶に行った。

そのうち、親類のものや、家内の女たちも、花嫁に会いに来た。最後に、サゼッスが入って来た。二人は、顔見合わせて、意味深長な微笑をかわした。

その日は、恒例によって、嫁方の両親、親戚を招待して、盛大な宴会が催された。

夜になって宴会も終わり、静かになると、サゼッスは、昨夜通り、花嫁の寝室で寝ることにした。

ところが、今晚は、昨夜の比ではなかった、胡蝶は力の限り羽ばたき、海棠は熱情のためにはげしく身をもがいた。

翌朝、孫夫人が帰宅する前に、乳母は、ひそかにユー・ランとサゼッスとの関係を告げた。

聞いた孫氏は、全く驚いてしまった。

「なんだって……と、とんでもないことをしてくれたな。……とにかく、あれを家に引きとるようにしなくては、いかん」

で、孫氏は、仲人を通じて、三日目には花嫁の里帰りをゆるしてくれるように、劉夫人に申し込ました。

しかし、劉夫人は夫人で、今、ここで花嫁を引きあげられては、このままもう返してくれないかも知れないという心配があるので、

「ムコもまだ病気で、婚礼の式も完全に終わったわけではなし、里帰りはもう少しのばしていただきたい」

という口実で、孫氏の申し出を拒絶した。

孫氏のほうでも、ニセ花嫁の手前、しいても言えず、この返答に甘んじなければならなかった。

そこで心配は、乳母一人にふりかかって来てしまった。

夜になると、だれかが、あの恋人たちのさけび声を聞きつけはしまいかと、なみ大抵の苦労ではなかった。

こうして、日が過ぎ去って行くうちに、ディアマンの病気は、おいおい回復して来た。

彼は、自分の花嫁を見てからというものの、一日も早くこの病気から立ちなおれるようにと、いのりつつけて来た。それが、非常に効を奏して、今日では、フラフラはするが、起きあがる事が出来るようになった。

それで、彼は、女中たちにささえられながら、花嫁に会うために、そろそろやって来た。彼が部屋の前へ来た時、乳母は、ちょうどそこ

にいたので、大声で叫んだ。

「若旦那さまがいらっしやいましたよ！」

ユー・ランは、サゼッスをだいて戯れていたが、この声を聞いて、あわてて娘をはなした。

サゼッスは戸口へ走りよって、

「まあ、兄さん！ あんた、起きられたの！ そんなことをすると疲れてよ」

「なんでもありませんよ」

と、重々しく花嫁に挨拶して、ディアマンは答えた。

「本当によろしゅうございましたわ」

ユー・ランもしとやかに言った。

「まあ、なんという似合いの夫婦でしょう！」

息子の幸福を思つて劉夫人は叫んだ。

花嫁の美しさは、病人の生活力を刻々と甦えらせた。また、ユー・ランのほうでも考えていた。

「ディアマン君は、病気でさえこんなに美男なんだから、妹は幸福だよ。しかし先生、病気がよくなったら、オレと寝るつもりだろうな。

こいつは、うっかりしてられない、早く逃げださなければ、いけないや」

その夜、彼は、自分の考えをすっかりサゼッスに話して聞かせた。

「お母さんが、ボクを家に帰してくれなきゃ、困るんだよ。ボクは、さっそく妹と変わらなけりゃならないんだらう？ もう、ちよつとでもぐずぐずしていたら、すぐ見付かってしまうからね」

「あんた、帰りたいの。じゃ、あたしはどうなるの」

「なに！ そんなことはちゃんと考えてあるさ。ボクたちはもう約束

してあるじゃないかね。それじゃあんたは、どうしろというんだい」
「あんたが、もう生きたわたしに用がないんなら、あたしは死んでしまふ。あんたについていくわ」

そういつてサゼッスは、果てしなく泣き出したので、ユー・ランは、娘の涙をぬぐってやりながら、

「ね、お前はちっとも心配しなくともいいんだよ、ボクの考えているとおりにやらしてくれさえすれば」

身代わり夫婦、手を取り合つて泣くこと

劉夫人は、このごろサゼッスがあまり花嫁のそばに、夜も昼もひっついてゐるのを多少いぶかし気に思ひはじめた。だが、まだ持参金問題もかたづいていないので、なにごととも言わずに、だまっていた。

ちょうどその日、花嫁の部屋の前を通ると、中からもれる泣き声をききつけた。夫人は、そっと近よって、窓の障子の穴からのぞいてみると、二人はだき合つて泣いていた。

「どうも変だと思っていた！」

夫人は、どなろうとしたが、息子がまた悪くなつては大変だと思つたので、そっと扉をおしてみると、意外にもそれは堅く中から閉ざされてゐた。

「昼日中、扉を閉めておくなんて、妙な話だねえ」

と夫人は叫んだ。

室内の二人は、夫人の声を聞きつけた。

そこで、大あわてに涙をぬぐってしまったから、扉をあけた。

夫人ははいつて来た。

「どうして、おまえさんたちは、昼間から、部屋にとじこもっている

の？ それに、だきあつて泣くつていうことは、いったい、どうしたというのです！」

狼狽して二人は真ッ赤になったが、一言も返答をしなかった。

劉夫人は、ムカムカとして来た、夫人は娘を捕えて言った。

「お前は、たいそううりっぱなことをしたんだね。おいで、言うことがあるから」

そして夫人は、サゼッスを一室にひきずりこんでいった。

女中たちは、どうなることかと思つて聞いていたが、夫人はピシャリと戸を閉じてしまった。

そこで女中たちは、鍵穴から中の様子をうかがつた。夫人がおこりながら、杖を振りあげてゐるのが見えた。

「不孝者め、本当のことをおいい！ でなきゃ、うつよ！ なぜ、泣いていたんだね」

サゼッスは最初、なにかも否定しようと思つたが、今ここで全部うち明けたほうが、フェイ氏の息子との許婚を破つて、ユー・ランと結婚させてもらうのに都合がよくはなるまいかと思ひなおした。もし両親が結婚を許してくれなかったら、死ぬばかりだ。そう覚悟すると、サゼッスは、なんなくすべてが話してしまえそうに思えた。

そして口を切つた。

「あたしたちは、もう夫婦ですの。あたしたちの愛は、百年も千年も長続きしますわ。兄さんがよくなつたので、わたしたちは別れなければならぬので、二人で泣いていたんです。あの人は、妹さんと代わるために家へ帰ると言うのです。あたしは、一人の女が二人の夫を持つことは出来ないと思いますわ。もしユー・ランが、わたしを嫁にしてくれなければ、あたしは、いさぎよく、死ぬことが出来るのよ」



これを聞いた劉夫人は、地ダンタ踏んで、おこった。

「あのおいぼれめ！ 悴をよこして、わたしたちをだましおったな！ ああ、うちの娘はキズ物になってしまった！ 本当に、死ぬほどケツとぼしてやりたいくらいだ！」

そこで夫人は、杖を持ったまま、戸を明けて走り出していった。

サゼッスは、恥も外聞も忘れて、母親を引きとめようとしたが、夫人は、じゃけんに娘をつきたおした。

サゼッスは、それでもまた、母親のあとを追う、たおされてもまた立ちあがっておいかけた。女中たちも、一体どうなることかと、娘の後から走っていった。

こちら、ユー・ランは、劉夫人がサゼッスをひきつれていったとき、なにもかもバレてしまったことを知ってしまうと、どうしてよいのか迷った。

そこへ乳母が急いではいつて来た。

「坊ちゃん、もうダメですよ。おじょうさまは杖でおびやかされていらっしゃいますよ」

ユー・ランは、これを聞いて、胸がはりさけんばかりだった。彼は泣き出してしまった。しかし、乳母は、かいがいしくユー・ランに支度させて、すぐ戸口から出してやった。

それで彼は、間もなく無事に家へ帰ることが出来た。

お芝居がバレて、てんやわんやのこと

父親の孫氏は息子につめよった。

「わしはおまえに、嫁になっておれと言ったじゃないか。だれが、男になれと言った？ なぜそんな、天理にそむいたことをしてかしてし

まったのだ」

こんな具合で、ユー・ランは、両親からさんさんにこずきまわされた。そこへ折りよく乳母が味方してくれた。

「まあ、まあ。先方からなんていって来ますか、とにかく坊ちゃんをうまく二、三日隠しておいたら、自然にうまいくと思います」

しかし、劉夫人のほうでは、ユー・ランの乳母が逃げる時に閉めておいた戸の前まできて、まっかになって戸を明けようとした。

「ちくしょう！ 死んでしまえ！ 悪者！ わたしをだれだと思って
いるんだい！ お前の生命はもらったから、そう思い！ あけない
か？ あけないか？ あけなきゃ、やぶってはいっていくよ」

中からは、だれも返事をする者はいない。サゼッスは、なお母親をとめようとしたが、彼女はガンとしてきかなかった。そのうちに、夫人は、とうとう戸をやぶってしまった。中に入ると、室内はからっぽで、鳥はすでに飛び去ったあとだった。

夫人は四ツ這いになってベッドの下や家具の隅を、狂人のように捜しまわった。しかし、どこにも強奪者のあとさえ残っていなかった。

それでサゼッスは泣きながら言った。

「フエイさんの家では、みんなこのことを知っていますわ。お母さま、後生ですから、あたしをユー・ランさんのところへやってください。そうでなかったら、あたしは、恥ずかしくって死んでしまいますわ」
「それもそうだね。そんなことをしてかしてしまったお前を、いまさらほしいという人もあるまい」

劉夫人も落ちついていった。しかし、なんといっても母親は母親で、夫人は娘のそばによって来た。

「思えばかわいそうだよ、こん度のことは、おまえが悪いのではない

からね。みんな、あの孫のジジイが悪いのさ。だが、フエイの家との
婚約を、こちらから止めることはちょっと出来ないことだよ」

そこへ劉氏がやって来て、今までのイキサツを聞きとったが、あまりに意外なので、あいた口がふさがらなかった。

彼はしばらくして口を開くと、第一に妻の失策をせめた。

「今度のことは、全部、おまえがやったワザだ！ わしは、なんと言
ってよいのかわからなくなった。あの時、式を延期さえしたらよかつ
たのだ。そのうえ、おまえが、自分で娘を、孫の忤のところへ連れて
いったんじゃないか。それで娘が、あの忤と一緒にならずにいられる
と思うのか？」

夫人の怒りは、まだすっかり消えてはいなかった。ところへ、この
言葉を聞いたので、またまた火に油をそそいだように、怒りはふたた
び燃えあがった。夫人は、雷のような声でどなった。

「なにを、おいぼれめが！」

しかし、今日という今日は、劉氏も、本当に怒っていた。それで彼
は、夫人をけろうとするのを、サゼッスがとめる。

三人は、なぐる、叫ぶ、泣くという大さわぎを起こしてしまった。

召使いたちは驚いて、息子のディアマンのところへかけつけた。

ディアマンは、すぐ床から起きあがって、よろめきながらやって来
た。まず、息子を見て母親が静まった。それから父親も手を引いた。

ディアマンは、ことのしだいを妹に聞いた。しかし、妹はた
だ泣くばかりだった。

それから、その部屋に花嫁がいないのも、ディアマンには不思議に
思われた。それで、母親は、息子に一切のことを打ちあけた。

ディアマンは、まっさおになって怒ったが、やがて、氣をとりなお

して言った。

「まあ、世間に知れなかっただけが、もうけもんでしたよ。こんなことが知れてごらんない。世間のいい物笑いですからね」

お上の裁きでメデタシ、メデタシのこと

ところが、例の金棒引きの隣人の李が、このさわぎを聞きつけた。

それで彼は、壁の間から劉家のさわぎを見ようとしたが、はっきりしたことは、わからなかった。

彼は、朝になると、使いに出かける劉家の女中を呼びよせて、小錢をやつて、すっかりしゃべらせてしまった。それからすぐフェイ氏の家へ行つて、いま聞いたことを、ペラペラしゃべってしまった。

フェイ氏は、すぐに劉家へ飛んできて、いった。

「わしは、みんな知っているよ、おまえさんとこのすばらしいお嬢さんをせおいこんで、わしの家名を汚したくないからな。とやかくいわんで、わしの家から出した結納品をすぐ返してもらいましょう」

劉氏の顔は、赤くなったり青くなったりした。彼は考えた。

「どうして昨夜のことが、もう知れてしまったのだろうか？」

そこで彼はいった。

「しかし、あなたは、どこからわたしの家の中傷するウワサをお聞きになりましたかね？」

「なにを！ このくそじじい！」

といいながら、フェイ氏は劉氏をけった。

「人殺し！」と劉氏はさげんだ。

「キサマは、オレを侮辱するためにやつて来たのか、なぐるためにやつて来たのか！」

そして力限りフェイ氏をけりとばした。老人のフェイ氏は、一たまりもなくひっくり返った。それから二人のつかみあいが始まった。このさわぎを聞いて、ディアマンも、夫人も、飛び出して来た。そして、ようやく二人を引き分けた。フェイ氏は、ぶるぶるふるふる指をつき出して叫んだ。

「このうすバカ、よくもわしを打ったな。出るところへ出てケリをつけるからそう思いなさいよ」

フェイ氏が出ていくと、劉氏は叫び出した。

「みんな孫がわるいんだ。どうしても訴えてやる。そうでもしなければ、いつまでこんなイヤなことが続くかも知れない」

で、劉氏は、息子に教えられて訴状を認め、役所に出かけた。

劉氏が判官の前へ出ると、すでにフェイ氏が来ていて、そこでまた二人のけんかがはじまった。判官は、二人をだまらせて、静かに事情を話させた。

そして、次のような判決を下した。

一、以前の許婚は全部取り消すこと。

一、ユー・ランはサゼッスと結婚すること。

一、ディアマンの許婚であった孫家の末娘ペルルは、フェイの息子と許婚すること。

一、ディアマンは、ユー・ランの以前の許婚であった娘と結婚すること。

こうして、めでたく、三組の新夫婦は出来あがった。ラン・チュウの町では、長い間、このウワサで賑わったが、いつしか新しい世間はしだが、この話を記憶から薄れさせてしまった。

明治性的珍聞史 (4)

女房を進呈した結果

内藤新宿南町の旅人宿にいる吉田喜太郎は、女房お花とのあいだに子供が二人もできた仲なのに、金に差し支えて、かねて同居の甲州者で、三井染次郎に頼み、十円の借金の支払いを引き受けてくれるなら、女房お花をお前に進上しよう、といって相談が決まった。

その結果、一しよにしながら、お花は染次郎に取られてしまい、その後喜太郎は病気になるって苦しんでいても、お花は優しいことばもかけない。おまけに染次郎は、支払いを引き受けたはずの借金を少しも返さないで、喜太郎は、病中でも借金取りに

せめられ、薬代にさえ差し支える。

お花は、いっこう構いつけないばかりか、呼んでも返事もしないところから、喜太郎はカンシャクを起こし、お花を縄でグルグル

ル巻きにしておいて、小刀を、のどと乳の上へ突きさしたので、お花は血に染まって苦しむ。染次郎は驚く、子供は泣き出す。大騒ぎになりましたが、さてこの始末は、どう方がつきますやら。

(読売新聞第六百七十一号・明治七年四月十八日)

洗いながら芸妓の品定め

この節は、世間一般に不景気だと申しますが、新橋辺の芸妓連中には、ずいぶんと流行っ子がたくさんあります。

その辺の湯屋では、女湯と男湯の境の仕切りをあらはらこうし在原格子にして、お客がアカを流しながら、姐さんを選ぶことができるように

したのは、芸妓たちヒイキの湯だからだというウワサです。

その中に、新よしの屋の三代次(一七)は、三円の税金が三月ばかりもとどこおり、おまけにお茶を引きがちだったのが、この湯屋のせいで、数日前から、よい旦那とか

金主とかが見つかり、それまで滞納していた税金を納めたらえ、入質してあった三味線も受け出し、最近、新宿辺へ住みかえました。

なんと世はさまざまのものでございますねえ。

夫婦で女郎買い

似たもの夫婦とはいいいながら、揃いも揃った気楽人。ほめてよいやら悪いやら、見当のつかぬほどのお話あり。

八丁堀亀島町辺に住む、ある役所へ勤める愛媛県平民倉上左馬之助（二六）という男は、女買いがごくごくの好き。登楼しないまでも、一ト晩でもズーッと遊郭を歩いて来ないと、気が済まないというくらいの人物。

したがって、俸給の半分はそのほうへ運んでしまうので、女房のお銀（二七）は腹をたて、おりおり意見をして聞き入れない。強くいえば、離縁もしかねまじい意気込みにあきれて、このごろでは捨てておく

（東京曙新聞第九百三十三号・明治九年十一月十五日）

（注）この時代、この近所の湯屋はどこでも在原格子を使用していたので、その節から、七十五錢ずつの罰金を言い渡された）

ことにした。

そうなると、亭主はいよいよいい気になって、はなはだしいときはのろ気まで聞かせる有様に、この上は何をするかわからない、こころで一本クギを打っておこうと、女房はひそかに待ちかまえていた。

おりから、去る五日は土曜日であったので、亭主は、早引きで帰ると、そのままちよっと同僚のところへ行くと、ビシヨビシヨ雨もいとわず出かけた。これはてっきり吉原と思った女房は、つづいて家を飛び出して、あとをつけると、亭主は気づかず、日本橋通りへ出て、浅草行きの鉄道馬車へ乗り込み、雷門で降り、浅草公園を抜け、

とうとう日本堤へ上った。そこで女房が突然、声をかけ、

「お前さん、景気よく人力車に乗っておいでなさいよ。馬車鉄のブラブラ歩きはみっともないじゃありませんか」

と言ったので、亭主は驚いて、「イター」と頭を押え、

「なるほど閉口。なに、その、ひやかしかけて帰るつもりだったが、お前が来ようとは思わなかったの、馬車鉄のブラブラ歩き、一区二銭じゃ安いもんだが、時に、いっしょに付き合ってはどうか。ナニ、付き合う。これはお荷物じゃあ、なかった、ありがたい」

と、戸迷ったあいさつをしながら、いっしょに大門をくぐる。

だが、見物するうちに、亭主がしきりに困っている様子がはっきりわかるので、女房はひそかに面白がっていた。

やがて、江戸町一丁目の貸座敷福来楼の前へ来ると、

「モシ、お前さん素通りはいけませんよ」と、声をかける遊女がある。亭主がひや

りとして見ると、先日、再会を約した小式部（一九）という女、亭主は、大いに狼狽して、逃げ出そうとするタモトを女房が引きとめ、

「お前さんのお馴染みなら、上がってやんなさい。あたしも付き合いますよ」

と言われて、亭主も度胸を決め、

「どこで飲むのも同じこと、ここで一ぱいやるとうるか」

と連れ立って登楼した。

さすがに女房と言われないので、近所の人ということにしたので、女房もその気になり、あたしにも一人買わせると、自身で下に行って花の井（一八）という女を見立て、ただでは面白くないと、歌い女をよび、大陽気に騒いだ。そして、イザお引けというところで、

「サア、お前さん、帰ろう」

と女房の正体をあらわして、遊女たちをびっくりさせ、勘定をすませて、そこを立ちいでたのは十一時ごろ。

「なかなか遊びはおもしろい。これからはあたしも付き合って、夫婦で、身代をつぶ

しましようねえ」

と女房にいわれて、亭主は、アツと開いた口が、家へ帰るまでふさがらなかったと

娘を売って同業と競争

人をしのぐという気象は、人間にはなくてはならぬ貴重なものであるが、用い場所が悪いと三文の値打ちもない。

深川町西町の魚屋高須次郎（四七）という男は、あさぎの鯉口にねじり鉢巻き。寒中に水をけて生ま物を取り扱うという商売柄、負けるのが死ぬより嫌いの男であった。

ところが最近、真向かいに、同じ魚屋ができたので、負けてなるものかと、元値で売り出した。先方も負けじと元値売り。

さあこうなったら次郎、やっきとなつて、損をしてもいいと、元値をきって売ってやろうと、やみくもに売り出したので、店先は客が黒山のようになる。

いい気持ちだと喜んでいたところ、たちまち資金を吹つとばし、買い出しに行くこ

いう。

（東京朝日新聞第二千七百七十九号・明治二十五年三月八日）

ともできず、品物が少なければ客も落ち、またも向こうが繁盛するのを、朝に晩に見る無念さ。

ああ、業腹だごうはらと男泣きに泣いたが、ふと思いついて、女房のお何と相談のうえ、次女のお彦（一八）を、武州八王子の貸座敷松葉楼へ五十円の前借で遊女に住み込ませることとなった。

去る八日、取り引きも万々すみ、娘が八王子へ出立する親子別れの悲嘆場にも、次郎は、くもり声で、

「そのかわり、これから、向こうの魚屋を、売りつぶしてみせる」

と、鉄拳で涙をはらっていたとは、強情も程度問題というところである。

（東京朝日新聞第二千八百八十号、明治二十五年三月十一日）

死んで花実はい咲かない



西京第六大区の中村小菊という女は、浮川竹の勤めの身であるが、第十四大区の細井亀吉という男と深く契って、万年の亀の齢を、仙家の菊とともにしようと言ったのであるが、アダごとの金にせかれて、今は、どうしようも方法がなく、困りはててしまった。

そこで、手をたずさえて、ともに蓮のウテナでいっしょになろうと逃げだし、志したのが桂川。

無分別の覚悟のおりから、巡回して非常をみまわる番人の松井保通が見つけ、急いで捕え、仔細を聞いて、よくよくさとした末、情死を思いとどまらせて、その親族に引き渡したのは、全く番人の注意の善行であった。

(郵便報知新聞第六百三号)

辻君に鍋ズミを塗られる



神田豊島町一丁目、木村亀吉という愚か者がいた。

この男、バカのくせに、このごろ、辻君をひやかしに、夜ごと夜ごと佐久間町河岸へ出かけるので、辻君にとっては、どうにも邪魔でしようがない。

そこで、露の流れの泥水に、はいよる亀には困るということで、いくらかの銭を与えて去らせることにした。

ところが亀吉は、もったが病い、どうにも女たちをひやかしてみたくなり、夜ともなると、ほつつき歩く。

さすがに彼女らもたまりかね、明治八年四月七日の晩、相も変わらず亀吉が来ると、それ来たとはかり、そのまま押えつけると、辻君がよってたかって袋だたきにしたうえ、鍋ズミを顔へ塗られ、いやはや、外聞の悪いことでありましてと、読売新聞第七十八号で笑っている。

(大阪錦画日々新聞第二十五号)

化け物に好色を戒められる



飾磨県士天区の中山五一良という区長は、村の後家の色香に迷い、心もわくわく、夜ごと通って、うつつをぬかしていた。

ところが、ある夜のこと、その道に、化けものが出て、

「われは先夫の又右衛門なり。なんじ、役を軽んじ、色情にまよい、その結果、村の失費少なからず。この上は、又右衛門家を取り立てて、改心すべし」といって消えてしまった。

恐ろしさに氣を失った五一良は、やがて息を吹きかえしたが、このことをおそれ、区長の役を辞して、西国巡礼に出発した、と報知新聞六百七十二号に出ているが、こういう化け物なら、いい化け物ではありませんか。

恋ゆえに狂う心の駒形町



キジは、おのが羽色の美しさを愛でて溺れる水鏡。曇りなき身も恋ゆえに、狂う心の駒形町。

舟板塀に竹格子、粹な住まいのおメカケは、原田お絹という芸妓あがりの淫婦であった。

手折りやすい路傍の花に、嵐の璃鶴という美少年の俳優がいたが、それと、かねてから姦通しているうちに、いっそ夫婦になろうと、情欲に迫っての悪念がつのり、やがては自分の身に報いのくるとも知らず、自分の罪状をしるされるノボリと似て紺木綿の、石見銀山請合いと白く染めたネズミ取りを使って、地獄落としの謀計で、とうとう東家を毒殺してしまった。

ところが、天網いかでまぬかるべき、男は懲役、女はさらし首を野末の露にはかなく消えたが、消えないのは臭名。かの山鳥の長々しく世に伝うるぞ、あさましかり。

(東京日々新聞第三号)

金勢大明神の川流れ



さきごろ、両国柳橋の芸妓たち、これまで、神棚に鎮座しました金勢大明神を、おもちゃとしてしまい、川岸から、ことごとく流してしまった。

しかるに、この陽物は、底に土の重みがついていたので、みな水面に亀頭をあらわし、いくつもいくつも続いて、浮き沈みしながら流れていった。しかも、その小さいものは金色をおび、大きいものは丹色をおびて、じつに一笑に堪えざる光景だったという。

(東京日々新聞第四十四号・明治五年四月八日)

(注) また、博門新誌を見ると、さらにくわしくこの時の気分がでていいる。彼女らにとって命より二番目の金勢大明神が、はるか彼方に、亀頭の先をあらわしたまま流れて行く。おりから川面には、まっ赤な夕焼けがうつり、色とりどりに輝いていたので、彼女らは、いつまでも、その流れつつ行く逸物を、恨めしげに眺めていたという記事であった。

女の人肉を食べた男

新 川 勇 二

その夜の女

横浜市中区常盤町四ノ二六の寿司善は、夜の十時過ぎともなると、水商売の女と、それを連れてくる客が、いっぱいだった。そのたて込んだなかへ、

「いやあ、こりゃいっぱいだな」

と入ってきた男女連れの客。男はでっぴりと肥えた五十七、八の年齢好で、いかにも旦那然としており、女は一目で女給とわかる、脂の乗り切ったいまが盛りの二十六、七と思われる艶ない女。だれの目にも、パトロンとその女に映った。とりわけ女は、酒でほんのり頬を染め、えもいわれぬ色香を漂わせて、そのあだっばさといったらなかった。そこで、期せずして人々の目が二人に向けられたことはいうまでもないが、それを知ってか知らず

してか、

「どうぞ、こちらへ」

女中に案内されるまま二人は、人前を素通りして、奥の座敷に上がった。それから二品三品サカナを取り、差し向いでちょうしを四、五本空にし、最後にニギリを食って帰っていったが、帰りしなに女は、

「板前さん、すまないけど、お水いっぱい頂戴な」

そういつて足を止め、板前の清水文平（三二）が、

「さ、どうぞ」

と差し出すコップの水をいかにもうまそうに飲んで、

「どうもごちそうさま」

といって、いそいそと外に出ていった。このとき清水は、女を真近でつくづく眺め、心

のなかで、こりゃいい女だ、といまさらながらつぶやいて、固ずをのんだ。

事実、清水は、商売柄、いろんな女客に接してきたが、これほどの女を見たことがなかった。ただ美しいだけとか、色っぽい女は、いくらでもいる。だが、この女のように、男の心をとろけさせ、しん底から打ち込みたくなるような女は、そうさらに、いるものではない。

だからといって、女に、特別これはといったところがあるわけではなかった。そりゃ確かに彫りの深い整った顔だちで、小股の切れあがった、アカ抜けした女には違いなかったが、一つ一つ取り立ててみた場合、ことさらに人目をひくといったようなところはなく、しいていえば、目のぱっちりした妙に唇に愛嬌をたたえているのが印象的だった。しかし



それでいて、身体全体から発散させる女の体臭は、むせぶばかりだった。

こんなのを男殺しとでもいうのだろうか。このような女に魅せられたら最後、どんな男でも、たちまちヘナヘナとなってしまう。

清水もその例に洩れず、一度この女を見てからというものの、すっかり毒氣に当てられてしまい、仕事の最中でも、女の姿が目にとらついて仕方なかった。そんなわけだから、寿司をにぎっているときでも、表で女の声がしたり、ガラガラと戸をあけて入ってくる子があると、

「もしやあの女では……」

と目をみはった。だけど、そのつど、清水を落胆させるばかりだった。

これまでに清水は、多くの女を見てもきたし、触れてもきたが、それはそれなりに、いつも一時的のもので、きまって忘れていた。だが、この女だけは違う。はじめて見たときから心をひかれ、それが日を追うにしたがつて、狂おしくさえなってくるのだった。実際、女にはそんなところが多分にあった。ちよつとチラリッとノゾかれるだけでも、ゾクリとする、いい知れない魅惑を持っており、それがネットリとマブタにまつわりついて離れな

いのだ。

清水は、むろん女をどうしようなどといった考えは、毛頭抱いていなかった。もう一度でいいから見たい、もし出来ることなら一言でもいいから口をきいてみたかった。もちろん、ふらりと店に飛び込んできた客であるから、そののぞみが、そうたやすくかなえられないとは思っていなかったが、清水は、不思議と、再び女がやってくるような予感がしてならなかった。こんな気持で清水は、女を待つと同時に、それとなく、その勤め先を当たってみた。

「ほら、ゆうべ、男と一緒にきた、凄くいっぽかった女ね、町でよく見かけるけど、どこの女なんだろうね」

口から出まかせに、女中たちにもさぐりを入れてみたが、誰一人知らない様子だった。また、女がきたとき居合わせた客が顔を見せるたびに、

「あの女は、いったい何者なんでしょうね。ちよっとみたところ、女給のようだったが、あんないい女がいるところといったら、どこなんでしょう。旦那なんか、そのほうじゃ名うてという評判ですから、ご存知なんじゃないですか」

と誘いの水を向けてもみた。

それでも、ついで、女を知っているという客はいなかった。清水は、いかにも無念だった。女中たちはもとより、客も知らないとなれば、あとは、女のやってくるのを待つ以外にない。そうと決まると、清水は恋人を待つに似て、無性にせつなかった。

待っていた女

清水の予感は適中した。普通ならとくに忘れ去っているはずの、十日ばかりたった十時過ぎ、

「そうそう、たしかにこの店だったわ」

と、ひょっこり、一人で入ってきたかと思うと、

「この間きて、とってもおいしかったので、またきたの。なんでもいいから、ニギって頂戴」

清水を前に、立ち食い席の椅子に腰をおろした。これをみて清水は自分の目を疑った。そして、じっと女をみつめた。それを女は、どう取ったのか、

「ね、どうかしたの。変な板前さん」

と、くすつと笑ってみせた。それがまた、清水の心をカッと燃えあがらせた。

「お客さん、何をニギリましようか」

女のいったことも、耳に入らなかったとみえて、震える声で聞く清水に、女は、笑顔のまま、

「あら、さっきいったじゃないの。なんでもいいの、あなたの好きなものニギって」

といった。それを聞いて、トロをニギって三つ前に並べて出すと、ようやく清水は、心の落ち着きを取り戻し、まともに女がみられるようになった。

女は、きょうも、いくら酒が回っているようだった。そのせいか、一人の女客にしては口数が多く、

「あなたって腕がいいわね。私、こんなにおいしいお寿司って、ほかで、食べたことないわ。ほんとよ、決してお世辞じゃないわ」

器用に寿司を口のなかに入れて、いった。「お客さんにウソでもいいからそういつて貰うと、うれしいですよ。まあ、せいぜいごひいきにお願いします」

「あらあら、そういわれると、こないわけにはいかないわね。あなたって、腕もたしかだが、宣伝もお上手ね。その手で、女のほうもコロリじゃないの。あんまり罪深いことをすると、女のたたりは大変よ、ほんとに。いえ、

それはじょうだん……」

「どうも、お客さんにかかっちゃ、かないませんね。この私がそんな男にみえますか」

「ううん、さっきもいったように、じょうだんよ。商売安全型だわ。でもね、その男っぷりが、ちょっと気になるのよ。女が黙って放っておくだろうかってね」

「おからかいになっちゃいけませんよ。実はその逆で誰も相手にしてくれやしません。そんなことをいわれると、穴のなかへでも入りたくなりますよ」

清水は、こういううちにも、それとなく女に胸のうちを読み取って貰おうと、躍起になった。それに対して女はあくまでも冷静で、「そいつはご謙遜（けんそん）でしょう。モテてモテて、しようがないんじゃないんですか。とかく男は、そういったことは、逆をいうものだといえますからね」

「お客さんにはかなわないな。あまり冷やかさないでくださいよ」

「そうね、それがほんとだとしたら、申しわけないわね。ご免なさい、つまらないこといって……」

女が、こういって口を閉じたのをみて、こんどは清水のほうから話しかけた。

「先日いらっしゃったときもお酒召しあがってらっしゃいましたね。帰りぎわに、水をくれ、とおっしゃったのを、よくおぼえています」

「そう、悪いことはできないわね。あのときはお水だったからいいようなものの……」

「そうですね、お客さんのように美しいと、忘れようとしたって忘れるもんじゃありません。ほんとに、お客さんのように美しいひとは、はじめてみました」

「こんどは、さっきの逆襲。でも、ウソでもそう賞められると、うれしいわ」

「ウソじゃありませんよ。私もこれまで、数多くの女のひとをみてきましたが、お客さんのように美しいひとは、はじめてです」

「ヘンな具合になっちゃったわね。何をおごりましょう。あなたって、お口のほうも相当なものね。これじゃあ、とても私なんかたち打ちできそうもないわ。いい加減で、尻尾をまいて退散しましょう」

「そんなに、お急ぎになることはありませんよ。たかが、板前のいうことじゃありませんか」

ここで女にたち去られてはと、清水は必死になって、ひきとめた。

忘れられぬ肌

その日にわかったことといえば、女は伊勢佐木町のオデオン座裏のカフェー「パリー」の女給で、先日連れ立って入ってきた男の客は、そのパトロンともつかぬ馴染みの客ということだけだった。

これだけ聞き出すにも、清水は、冷汗が出る思いがした。さり気なく、

「お客さんは、どこにお勤めなんです」

やっとの思いで聞くと、

「お勤めとは恐れ入るわね。伊勢佐木町のオデオン座の裏に、パリーっていうカフェーがあるでしょう、その女給よ」

女は言下にいったものである。このとき清水は、よっぽど、

「お名前は」

と聞こうと思ったが、女が、

「あなたも、ああいったところをノゾくんでしょう。たまにはうちへもいらっしゃいよ。いい娘が大勢いるわよ」

というので、

「そうですか。お客さんのような美人が揃っているんじゃない、われわれ風情にはとても手も足も出ませんよ」

といってしまった。その代わり、

「この間の男のお連れさんは、お客さんのいい人ですか」

と聞いた。

「その点は、あなたのご推察にまかせるわ。

でもね、年寄りでしょう。とっても、しつこいのよ、いいかげんに逃げだしたいわ。といつても、若い人は持つものを持っていないでしょう。そこへいくと、あのハゲちゃんは、これが欲しい、といえは二つ返事で買ってくれるのよ。世の中って、どうしてこう、ままならないのでしょうねえ」

「そこところは、適当にやったらいいじゃないませんか」

「それも考えてはいるの。いざとなると、これはと思ういい相手がいないのよ」

女は、じょうだんめかしていつていたが、どうやら、これはほんとのようだった。

ともかく、女はこのとき以来、二日に一度は必ず寿司善に顔を見せるようになった。男の客と連れ立ってくることもあったが、たいていは、一人でふらりとやってきて、ニギリを頬ばりながら、清水を相手にしゃべって帰っていった。

そうなっていると清水は、毎日、胸をわく

わくさせながら、女のくるのを待つようになつた。したがって、それほど待ちあぐんでいる女がこないときは、自然と気がふさぎ、元気がなかった。

すっかり身も心もその女のトリコになつてしまつていたのだ。そんなある日のこと、その日は、店は、造作を直すため、臨時休業となつた。いつもなら、朝から同僚と店を飛び出し、映画館を二軒も回つて、夜になるのを待つて、安い女を買いにいくところだが、気分が悪いからと偽つて、起きようとはせず、夜の九時ごろになつて、やっと床から抜け出し、急いで、つくつたばかりの背広をひっかけ、ぶらりと外に飛び出した。

ここから、女のいるカフェーパリーグまで、ゆっくり歩いて十分。みちみち女の顔を思い浮かべながら、パリーの前にたどりつき、一気にドアを押して店のなかに入った。だが、暗くて広い店のなかでは、女がどこにいるのやら、皆目見当もつかなかった。

クロークに導かれて、ソファーに腰を降ろすと、ドカドカと女たちに取り囲まれたが、その誰もが目に入らなかつた。目が暗いのに従つて、清水は、あちらこちらと見回した。しかし、そんなにまで懸命にさがし

回る必要はなかつた。女のほうで、とうに清水がきたのをみて、間もなく、

「あら、いらっしゃい。きょうは、どうした風の吹き回しかしら、まさか雨が降りはいでしようね」

と、寄つてきたからである。

それをみて清水は、ほつと溜息をつくともにと胸をなでおろした。急に元氣づいた清水は、女をかたわらにすわらせると、まずビールを手始めに、次はウィスキーといった調子でピッチをあげ、店を閉じる十一時ごろには、すっかり女と一緒に酔っぱらつた。

そして、どうしたはずみでそうだったのか、閉店を待つて、二人は、互いに肩を抱き合つて、そこから一丁ばかり先の羽衣館裏の「月の家」旅館にしけ込んだ。

そこではじめて、女の肌に触れ、よけい女を忘れられなくなった。清水は、二人で抱擁を交わしているうちにも、女のためなら命も金もいらなかつた。それほど女は、清水を夢中にさせた。

これが、清水をいままで以上に、女に心を打ち込ませるところとなつたわけだが、女は果して、どんなものだったか。いずれにしても、そんな清水が嫌いではなかつたのは、たし

かのようにだった。

こんなことがあってからでも、女は、寿司善に幾度となく足を運んでいた。けれども、そこに顔をノゾかせるからといって、清水との関係を毛ほどもみせなかった。ところが清水は、女と違って、妙にソワソワし、女を見る目も、以前とは違ってきた。

そんなうちにも、いつも清水のほうから頼み込んで、旅館で一緒に寝た。

こうした二人の関係は、三カ月ばかりを経過したが、日を重ね、二人の関係が深まってくにつれ、清水は女にパトロンもいることだし、愛しさのあまり、野放しにしておくのが不安でならない。そのため顔さえみれば、「きょうは、そっちのつごうはどうだい」と誘った。

可愛さあまつて

こうなると女は、はじめから浮気のもりで相手になっただけだから、次第にうとましくなってきた。そこで、寿司善へいくのもぶつりやめ、清水と顔を合わせるのを、極力さけた。

こうなると、清水はあせった。そして、こっそり店を抜け出して、パリーをノゾいてみ

もしたが、女は、これまでと打って変わり、お世辞笑いを浮かべるのがせいぜいで、そばに寄ってきもしない。

「ほかにいいのができたのだ」

と清水は、一人合点し、その心をよび戻すには、どうしたらいいものか、思い悩んだ。しかしそれには、これといった名案は浮かばなかった。そうになると、男はじかにぶつかって話し合うより仕方がない。そのため清水は、

「きょうこそは……」

と、必死の勢いでパリーを訪れて、女をよんだ。清水のそばにきた女は、

「なあに、お話があるなら、早いとこいいよ。私、忙しいのよ」

と、つつけんどんにいった。

「ここじゃ、ちょっといいにくいんだ。店が退けてから、つき合って貰いたいんだ」

「ここでいえないようなことだったら、店が退けてから、表で待っててよ。では、いくわよ」

女は、さっさと、まえにいた席に戻った。

十一時を過ぎて店が閉ざされ、十二時近くになったが、女はいっこうに出てこなかった。

それでも清水は、もうくるか、もうくるかと女が出てくるのを、首をながくして待って

いた。一時近くなって、やっと、女に逃げられたことに気づいた清水は、女、つまり田代絹江（27歳）のいつていたその住所、横浜市神奈川区東神奈川五ノ三九一、ミナミ荘という記憶を頼りに、車を拾って駆けつけた。

ぐるぐる回って、ようやくのことでミナミ荘をさがし出し、女の名前の木札の下がった部屋の前に立つと、まだ電燈をあかあかとつけて起きている様子。

しばらく清水は、立ちすくんだままじっと聞き耳を立てた。すると、何やら男の声にまじって、絹江の声が洩れてきた。瞬間、清水はさてはパトロンがきているなと思った。

そうとわかると、嫉妬心も手伝って、何をいつているのだろうか、と耳を澄ました。だが、その声は、とても五十年輩とは思えぬ、若い声だった。若いのをくわえこんでいるんだナ、と俄然カッとし、ドアを開けるのももどかしく、部屋のなかに躍り込んだ。

「あっ！ あなたは……」

女は、清水をみると、あわてて、男のそばから飛び離れた。二人は、それまで着物のままで抱き合って、互いに愛撫し合っていたものとみえた。

「てめえというやつは……」

清水は、怒鳴ると、女に飛びかかっていった。その隙に若い男は、部屋から飛び出すが早い、一目散に逃げてしまった。

女は、清水につかまるまいと、部屋中を逃げ回り、やっとのことで、廊下に飛び出し、あとは夢中で外に逃げた。

清水も、それを追って外に出た。

必死で逃げる女は容易につかまらなかったが、それでも電車で辛らくもつかまえた。

「てめえが、そんな浮気な女とは知らなかった。ちきしょう、いつの間に、あんな若僧とできやがったんだ」

その場で女をねじ伏せると、店を出るときから、女がいうことをきかなかったときは、ひと思いに突き刺したうえ、自分も死のうと、用意して隠し持ってきた刺身包丁で、

「てめえを殺して、オレも死ぬ、さ、覚悟しろ」

と、女の身体めがけて突き立てた。

「ギャッ！ ひ、ひと殺しィ」

女は、一声さげんだが、このときは、返す刃で滅茶苦茶に突き刺され、次の声は出なかった。

女が、こと切れたことを知ると、清水は狂気のように包丁を投げ捨てて、

「おい、絹江。オレは、お前が好きでたまらないんだ。絹江……」

と、血だるまの身体にがばっと覆い倒れ、着物をめくり、肉体の一部にかじりついた。

その形相のすさまじさ！

まだ生ま暖かい肉体にかじりつき、肉塊をむさぼり食っていた。

こうした凄惨な情景は、報を受けて警官が駆けつけるまで続けられていたが、その後、捕まって取り調べに際し、

「あんなものを食って、うまかったか」といわれ、

「あんなにうまいものはじめてだ」

と語ったその言葉をみても、いかに清水が絹江に執着を持っていたかわかる。そこで、当時の清水の供述書を眺めてみると、

「私は、女というものは、ずいぶん知っていましたが、心底惚れ込んだのは、絹江だけです。それはいまでも、変わりありません。だから、どんなことをしても、絹江だけは、はなしたくはありませんでした。もちろん、パトロンがいることは知っていました。しかしそのパトロンというのが、五十を過ぎていて、というのと、絹江も嫌っていたようですから、さほど目ざわりではありませんでした。どう

せ、パトロンと絹江は、ながいものと思っていなかったからです。ですが、絹江が、若い男と濡れ場を演じているところを見て、私は思わずカッとしました。うすうす絹江の態度から感づいていましたが、それを見せつけられたのですから、当然でしょう。もう、そうになると、前後の見境はありません。可愛さ余って憎さ百倍で、絹江を追っかけました。電車通りで絹江をつかまえたときは、夢中で、自分がわかりませんでした。それでも、殺した、と思った瞬間、絹江が無性にいじらしく、可愛くなってきた、こんな可愛い女を放っておくのはもったいなくなり、ひと思いに食いついたのです……」

誰の手にも、渡したくなかった、というのが、その時の、私の気持ちでしょう。その気持ち、絹江の肌に食いつかせたのです……うまかったか、って……ええ、うまかったというより、私の体の中で、絹江が生きかえるのだ、というような気持ちでした。なにかに酔ったような気持ちでした……私は、ほんとうに、絹江を愛しています。だから、可愛くて、可愛くて、しようがなかったのです……だから、思わず、彼女の肌に噛みついてしまったのです……」

野 獣 の 夜

津 木 狂 介

責められる女

もうすっかり春を思わせる暖かい夜風が、ぶーんと香り高い、沈丁花^{しんちょうけ}のにおいを運んでいる。水道通り派出所の遠山巡査は、闇に流れる花の香りに、柄にもなく詩情をそそる。

「春だなあ」

思わずつぶやいた。しかし、パトロール中の遠山巡査は、緊張していた。ひんぴんと出沒する放火魔が、どうも彼の派出所の近くに現われた情報があったからだ。

この近くは、いわゆる屋敷町で、十二時をまわると、人通りは途絶えて、深閑としている。

「おや、なんだ？」

ふと、遠山巡査は足をとめた。近くで、女のうめき声を聞いたような気がしたからだ。

が、遠山巡査は、にんまりと、てれくさそうに笑った。非番の日であれば、彼にしても、いまごろは、愛妻を抱いて……つまり、遠山巡査が耳にした、女のうめき声というのは、彼に、愛妻のことを想像させるに足るものであった。

だが、一、二歩あるき出した遠山巡査は、ぎょつ、としたように、その場に立ちすくんだ。というのは、沈丁花でも植えこんであるらしく、ひとときわ香りが高く流れてくる、しよしゃな家の応接間に、思わぬ光景をみただからだ。電燈が輝いているその部屋に、薄よごれた若い浮浪者風の男が、半裸の女の髪をひつつかんで、ソファーに押しつけている。

遠山巡査は、はっとわれにかえって、垣根をとび越えた。

ジュミーズが引き裂かれ、盛りあがった両

の乳房が大きくゆれ、豊かな裸身が波うっている。若い浮浪者は、すいつけられたように女の豊満な裸身にみとれている。

「こら、あけろ」

遠山巡査は、ガラスをたたきながら叫んだ。その物音に、奇妙に顔をゆがめて若い浮浪者がふりかえった。そして、とび起きた女の顔をみた。三十歳をいくつか越えているらしい女は、あわてて、かたわらに落ちていた部屋着を裸身にまとった。

そして、意外にも落ちついた態度で、ガラス戸をあけた。

「すみません。なんでもないんです」

落ちついた女の声だった。

「奥さん、どうなさったんです。こわがることはありません」

遠山巡査は、女が若い浮浪者に脅迫でもさ

れていると思ひ、力づけるように言った。

「いいえ、わたくしの不注意から、とんでもないところをごらんにいれて——修さん、向こうにいったらいい」

女の声に、修と呼ばれた若い男は、部屋から出ていった。

「主人の遠縁に当たる人なんです。主人がちょうど留守でございまして、ふっと魔がさしたんでしよう。あんな人ではないんですが、でも、おかげで助かりました。どうか、世間態もございまして、お願いいたします」

美しい、いかにも教養高い夫人であった。

「そうですか、もう大丈夫ですか」

「はあ、酔いがさめれば、おとなしい人ですから」

遠山巡査は、ちょっとふにおちない感じもしたが、そのままその家を離れた。

ノゾかれた責め場

「ふーん、馬野画伯の夫人か」

交番に帰った遠山巡査は、あの家の番地をみて、つぶやいた。馬野画伯といえ、美人画の大家であり、有名人である。

「それにしては、夫人はずいぶん若いな」

馬野画伯の散歩姿を、遠山巡査も時おりみ

かけることがあった。白髪の六十を越えた老紳士だった。

しかし、それだけならばなんということなく、ある春の夜の目の保養ということ、遠山巡査と馬野画伯夫人の一件は終わりになったのだが、それから一週間もしないうちに、遠山巡査は、思わぬ事件にぶつかった。

遠山画伯が急死したのである。

係りの私服から、くさい、という話を耳にしたとき、遠山巡査の記憶に、ありありとあの夜のことが思いだされた。

「ふーむ、そういえば、あるとき夫人は、修とかいうあの若い男が、酔っているといったが、ガラスをたたいた時のとまどった表情、あの時のおどおどした態度は、ちょっと、おかしいな」

遠山巡査はそれからというもの、とくに馬野家に注意をむけるようになった。そうしたある夕方。修という青年が、それも、仕立ておろしのぱりとした身なりで、急ぎ足に通りすぎるのがみえた。

「おやっ」

遠山巡査はその後ろ姿を見おくった。

そして、すっかり闇がこくなったところを見はからって遠山巡査は、馬野家の庭に忍びこ

んだ。応接間からは、シャンソンが流れている。

「修さん、いらっしゃいよ」

夫人の声がした。遠山巡査は、植えこみに身をかくした。カーテンは明け放したままである。が夫人と青年は、別になんということもなく、レコードをききながら話しこんでいる。夜がふけていった。

ふっと、夫人の姿が応接間から消えた。が間もなく、部屋着に着替えた夫人が姿を現わした。修がちらっと外の気配をうかがうようにみた。遠山巡査は思わず頭を伏せた。

次の瞬間、修は、つかつかと夫人に近よると、その美しい頬に激しい平手打ちをくわせた。よろよろと倒れた夫人、髪をつかんで引き起こす。部屋着が、引きはくように脱がされた。夫人は激しく抵抗する。

が、遠山巡査は見つめていた。

髪をつかまれ、激しくなぐられながら、すでに半裸になった夫人の瞳は、いきいきと輝き、もらすうめきが、みている遠山巡査に奇妙なエクスタシーを感じさせていた。

まったく全裸にされた夫人は、ぐったりしてソファに倒れている。

修が、自分の洋服を脱いで、夫人のふくよ

かな裸身をかき抱いた。

「ダメ。まだ、まだよ」

夫人があえぐように叫ぶ。

修は、かがみこんで、夫人の全裸をなでまわし、ふらっと立ちあがった。大きく肩で息をしながら、かたわらの細身のムチを手にすると、ピシッと夫人の裸身に打ちおろした。まるで、波のうなりのように、夫人の白いふくよかな体が動く。

「ああ、修さん、わたしのかわいい人、抱いて、修さん」



夫人のきらきら光る瞳が、まるでリンのように燃えている。修は、そうした夫人の白ロウのような裸身に、ミミズばれのように真紅のすじが走っているのをみつめている。夫人が大きくあえぐたびに、まるで、まっかな蛇がのたくるように、ふくれあがったミミズばれが動く。それをみつめていた修は、ピシッと最後のうなりにムチをくると、夫人に挑みかかっていった。

馬野夫人と修は、その翌日に、警察に連行されても、頑強に否定した。が、立ち会いの

刑事に、それでは別室で裸になっていたましようか、といわれて、がっくりとうなだれた。

深夜の訪問者

半年ほどの前ことだった。

京都にでかけた画伯の留守の夜だった。夫人は、ふっと、人の気配で目をさました。

「誰かしら？」

半身を起こしかけた夫人は、

「さわぐと殺すぞ」

妙に上ずった声だった。闇になれた夫人の目に、ぼんやりと影がうつった。夫人は、枕もとのスイッチをぱちっとひねった。

「消せ、殺すぞ」

猛然と黒い影が踊りかかってきた。

「あつ、人呼びますよ」

もみあっているうちに、夫人はいつか肩も露わになっていた。暴漢は、夫人の裸身に、ちよっと気をのまれていたようだったが、すぐ、夫人の乳房に激しくすいた。

夫人は、押しもどそうとあせった。激しい平手打ちが夫人の頬になった。抵抗する夫人を押し倒そうとする暴漢は、なぐり、ケリ、夫人がぐったりとすると、まるでうえた野獣

のように、夫人の肉をむさぼった。

嵐のようなひと時が過ぎ、ぼんやりとした

夫人に、

「すみませんでした、ぼく、警察にいきます。

許してください」

若い、まだ少年の面影が偲ばれる青年は、

まるで人が違ったように、神妙に言って、うなだれた。

しかし夫人は、まったく自分も不可解なうっとりしたエクスタシーに、まだ覚めやらぬ気持ちだった。

馬野夫人になるまで、つまり三十になるまで、夫人は娘だった。が、六十を越えた画伯との営みを、夫人は、女というものは、これがつとめ、といった義務感でつとめていた。それが、あれだけ乱暴をされながら、どこの人かも知れない暴漢を、憎む気になれないことが不思議だった。

「奥さん、すみません、どうか警察に……」

青年の声に、夫人はわれにかえった。

「いいの、おこっていないわ」

「……………」

目ざめた女

夫人は金を与えて青年をかえした。

画伯は、夫人が自分から求めたことにちょっと驚いた。

「ほう、お前も、女になったなあ」

しかし夫人は、あれほど燃えて求めたにもかかわらず、あの青年から受けた、身もとろけるようなエクスタシーは得られなかった。

夫人はいつか、自分が、あの夜の青年のことをひそかに考える日が多くなっていることに気づいた。

そうしたある日、あの青年が、ふっと、訪ねてきた。

「奥さん、おかげで、仕事が見つかりました。

これは、何もできませんけど……」

青年はあいかわらず薄ぎたない格好であったが、粗末な菓子折りを差し出した。

「いいのよ、そんな心配を。でも、よかったわ、どうしているかと心配していたのよ」

「ありがとうございます。あんなことまでした……」

「ダメ、それをいっちゃ」

夫人は、思わず顔をあからめた。不意に、激しい欲望が内部からふくれあがってきた。

「ねえ、……」

夫人は、いきなり若者の肩に手をおいた。

「えっ……でも、ご主人が」

「夕方まで、大丈夫」

夫人は、自分にそんな大胆なことができることが不思議だった。

だが、青年がかえってしまおうと、夫人は妙な失望感だけが強く残った。

「どうしたのか知ら？」

あの夜の激しいよろこびは、いっこうに感じられないのだ。

画伯は、夫人のしつような求めに、いやな顔をするのがあった。夫人は、燃える自分の肉体を、どうにも制御できなかった。

それでいて、行為が終わった後は、不思議なさびしさを味わうのだった。

「修さん、ねえ、お願いだから、あの時のように……」

夫人は、ある日、修に、あの夜のように乱暴に自分をあつかうことを命じた。尻ごみする修を無理矢理にそう仕向けさせた。

夫人も激しく抗った。

奇妙なふん意気に、二人は、すっかり興奮した。

二人の秘事を、突然かえってきた画伯は、かえりみて呆然とした。

その夜、画伯は、自分が青年のように燃えていることを知った。

「わしは、きょう見た、怒りはしない。あの青年に、かくれて会う必要はないよ」

夫人は、さすがに驚いた。

「わしも、若返ったような気がする」

夫人は、画伯に叱責されると思いのほか、晴れて修とのことが認められたことよる喜びを感じた。

三つ巴の野獣

画伯も人が変わった。

修が、夫人の髪をひつつかみ、なぐり、夫人があえぎ、燃えるのをみないと、画伯の欲情は燃えたたなくなってきた。

夫人も、修も、はじめは、画伯の前での行為をイヤがった。が、なれるに従って、二人も、そのあそびに夢中になってきた。

しかし、修は、自分が、画伯の欲情をかきたてるための道具で、いざ、燃えている自分の欲情を遂行する段になると、横から画伯にとってかわられることに、強いふんまんを抱きはじめた。

「君には、月の手当てをやっているんだ。實際の関係は絶対にいかん」

画伯のお達しである以上、しかし、若い彼にとって、それではまるで蛇の生ま殺しも同

様であった。

「奥さん、ぼくには耐えられない、もう、奥さんなしでは……」

「ねえ、もうちょっと我慢して、わたしだつて……、でも、主人が、目をはなさないから、そのうち、きっと」

二人は画伯のきびしい目を盗んでは、同じことをささやき合った。

しつとに狂いはじめた画伯は、片時も夫人から目をはなさなかった。そして、また修の燃える欲情を平然と無視して、彼の目の前で行為が、画伯には欠くべからざるものになった。

夫人と修は、いつか画伯を殺す計画をたてはじめた。

その日も修に画伯は命じた。

裸になった夫人の肉体は、黒ずんだ責めの跡が無気味なほどだった。が、修が責めはじめると、燃える夫人の肉体を、その黒ずんだすじが真紅に色どり、まるで全裸の美女に無数の蛇がまとわりついてるようにみえた。修の右手が動いたたびに、その蛇は、また新しく数をましていった。

画伯の両眼が狂人のように燃えて、大理石のような夫人のからだに馬乗りになっている

修をつきとばした。

が、修は、いつものように素直ではなかった。ついに、画伯をつきとばした。

「何をする、主人にそむくのか」

画伯は、狂ったように叫んだ。

修と画伯は向かい合った。

「早く、修さん」

夫人が叫んだ。修は、もう然と画伯にしがかった。

「何をする」

画伯は後ろにすさった。その瞬間、飾りのブロンズが画伯の頭上に落ちた。

「うーん」

画伯は、うめいて倒れた。

修は、憎々し気に、倒れた画伯をみつめていた。そして、裸身で立っている夫人に、とびかかった。

「みている、ざまアみる」

修は歓喜にあえぐ夫人のからだをさいなみながら、つぶやきつづけた。

「ほんとに、みているわ、ごらんさい」

夫人は、うっとりしながら、修の顔をそっとたたいた。

倒れた画伯は、まるで生きているように、二人の動きを、両眼をみひらいてみていた。

ハレムの残虐物語

染 井 恵 一 郎

肉と血の歴史

ハレム——それは、トルコ王すなわちサルタンの蓄妾部屋であるが、外界とはまったく隔絶された閨宮であるだけに、ナゾのヴェールに包まれながらも、なお、数多くの悲劇や物語が、伝えられている。その史実的な確証はともかくとして、なにしろ歴史の長いことであるから、密史として見るとき、それは興味をよぶ話題である。

その二、三を挙げてみると——

多くの大臣や將軍たちが、王を中心に肉の饗宴にわれを忘れて陶醉しているとき、突如、覆面の怪人に指揮された黒人の一団が侵入してきて、男という男はすべて殺してしまい、その死体が部屋中を埋めている、その上で、恐怖におののく女奴隷たちを抱擁し、あくな

き姦淫を尽した、という血潮にひたされた狂熱の肉の宴。

あるいはまた、サルタンの要求する快樂を与えることができなかったという理由で、その場で絞殺された女。また反対に、サルタンに要求以上の快樂を与えた。しかもそれがわずか数分間にしかすぎなかったのであるが、そのために一度サルタンの腕に抱かれただけで女王の座についた女。そして、サルタンの氣まぐれゆえに、ボスフォラス河を死体で埋めた哀れた女奴隷たち。

こうした話は数限りなくある。

しかも、このハレムに集められた女たちは、西はヨーロッパ、南はアフリカ、そして東はあるいは日本にまで及んだのではなからうかというものさえある。したがって肌の色は、白、黒、黄色とさまざまであったし、それが

おのおの、生まれた土地の服裝をしていたとしたら、その絢爛多彩ぶりは、想像に難くあるまい。

だが、このハレムにも、ときとして、困難な事件が起こることがあった。サルタンが死んだ時である。つまり、王子が多すぎて、後継問題がもつれるからである。

ふつうなら、三人か五人の子供が、長男だ次男だと、その權利を主張するのであるが、なにせ何百人もの兄弟のことだから、どうしても強い者が勝ちということになる。兄弟相打つ惨事が、昼となく夜となく続けられたことも、珍しくないという。

あるときなど、王とはなんの血のつながりもない賤民の子が、強力だったというだけで、すべての王子を平らげて、ハレムの王となった。という話さえ伝えられている。

そうした、数多くの話の中でも、いちばん有名で、世界にも波紋を投げたのは、ロクセラナ事件である。

ハレムの女王

ロクセラナというのはヨーロッパ名前であるが、トルコ名をクトレムと呼ばれた女奴隷である。

彼女が、ソリマン大帝の寵を受けた最初のチャンスは、ほかの奴隷たちと同じく、ソリマン大帝が、一夜の相手を、数十人の女の中か選らび出そうとした時であった。

彼女は、じつは、ロシアの旧教の高僧の娘



であったが、海賊船によって、トルコに、奴隷として売られたのであった。だから、教養もあり、器量も美しかった。それゆえ、数十人の中から、いきなり、大帝のお目にとまっていたのであった。

そして彼女は、いきなりハレム中第一の部屋へ導かれた。それほど大帝は、一目見ただけで、すっかり、彼女の魅力のトリコになったのであった。

そのころ、ハレムで第一の権勢を誇っていた女性は、〃春のバラ〃とよばれる妃であった。ハレムでは、この〃春のバラ〃のように、あるいは〃月の姫〃のように、肌の色とか、女の秘所のおいとか、そういった性的なものから名づけられ、それが、正式の名前であるかのように、ハレムでは通用していたのである。

この〃春のバラ〃は、ずいぶん長いあいだ

大帝の寵愛をほしきままにし、王子さえ生んでいた。そして大帝が、ほかの女に対する愛欲の思いがどんなに高じようと、やはり〃春のバラ〃には及ばなかったくらいで、彼女はサルタンの女性名詞〃サルタナ〃と自分からよんでいたくらいであった。

それが、ロシア女のロクセラナが出現するや、たちまち大帝の全寵愛は、〃春のバラ〃を離れて、すっかり彼女に傾いてしまった。

こうしたときトルコでは、愛欲の面では、すべて夫の命令に従わねばならないことになっていた。妻は、義務として、また当然の習慣として、夫の腕に、新しい女を抱かせるように取り計らわねばならないのである。ただマホメット教の聖日である金曜日だけは、妻が夫に要求することを許されていた。

ところが〃春のバラ〃は、この聖なるマホメットの戒律を無視するほど、情熱家であった。だから、ロクセラナに大帝の寵愛が移ったことが堪え難かった。

〃春のバラ〃は、ロクセラナを、自分の前に呼び出して罵倒し、顔中に爪をつきさし、頭髪をひとつかみ、頭皮といっしょに、むしりとった。

ロクセラナは、苦痛に堪えかねて、泣き叫

びながら廊下に飛び出した。そこへサルタンが出てきて、ロクセラナから、いちぶしじゅうを聞いた。

サルタンの「春のバラ」に対する怒りはほとばしり、直ちにハレムを追い出されて、彼女は路傍の乞食^{こじき}同様の身となった。

かくてロクセラナは、サルタナ^{サルタナ}の地位にかわってつき、権勢を掌中におさめた。彼女は故郷のことも忘れ、傲慢な日をおくるようになった。彼女にちよつとでも反抗のきざしを見せたものは、容赦なく虐殺された。

隣室の殺人

そのころ、サルタンの片腕に、イブラヒムという総理大臣がいた。トルコの内政外交をよく一人で処理し、サルタンの信任を得ていた。いわば、ハレムの権力者サルタナに対して、彼は、表の間の権力者であった。

ところが、ロクセラナは、このイブラヒムに対してさえ不平をもつようになった。もし自分のわがままが彼によってさえぎられたとしたら、サルタンはどちらの言うことをきくだろうと考えつくや、恐るべきことを企んだのであった。

それは、春宵、月まどかな夜のことであつ

た。ハレムには、あらゆる香り高い草花が植えられていたが、その香りが庭中に、ふいふくとただよっていた。

ロクセラナは、大帝の肩に身をもたせかけながら、甘い鼻声でささやいた。

——イブラヒム大臣が自分を口説いて、もし言うことを聞かなければ、サルタンに言っ
て追い出してしまう。サルタンは、自分の言うことならなんでもきくし、また、そうしないとトルコは滅びてしまう、と言った——
と、ありもしないことを、泣きじゃくりながらささやいたのである。

ソリマン大帝の怒りが、どんなものであったかは、想像に難くあるまい。なにせ、すっかり鼻毛をぬかれているのだから。こうなると、総理大臣もなにもあったものではない。イブラヒムに、惨虐な死が与えられることになった。

そのために、ソリマン大帝は、イブラヒムを宴会に招いた。宴会は長いことかかったけれど、話題はさりげなく、政治や戦争に関することに終始した。

やがて大臣は、丁寧にあいさつして、引き退がった。

ソリマン大帝も寢室にひきとり、ロクセラ

ナを抱いて寢台に伏した。

「お約束は、今夜でしたわね」

ロクセラナがささやいた。

「黙って、耳をすましておいで。イブラヒムには、次の間の閨房を与えておいたから」

二人は微笑しあつて、うなずいた。

やがて、力の強い刺客が、総理大臣の寢室に忍び込んだ。そして、手に持った短刀で突き刺そうとしたが、手もとが狂ったため、大臣に組み伏せられた。だが、大臣はもう老齢だったから、ついに、どうと倒れる音がした。それから一つの足音が逃げ去った。

その瞬間、ソリマン大帝も、さすがに顔色を変え、緊張した表情になった。しかし、それも、

「あたくしの全身と全霊を投げだした、はじめての殿御……」

という、ロクセラナの甘いささやきの中に没入してしまった。

かくてロクセラナは、ついに、法律上正式にトルコ皇后になったのである。

海賊船から買われた異国の女が、正式に皇后になったのは、さすがハレムに女は数多いとはいえ、珍しいことであつた。

だが彼女は、いよいよ大帝の寵愛を深め、

その美しい顔を眺めて大帝は、幸福の思いにとざされるのであった。

栄華の末路

かくてロクセラナは法律的に正式に皇后になったのであるが、国教的、つまりマホメット教の上からは、皇后として認められていなかった。彼女が異教徒であったからである。

そこで野心家のロクセラナは、宗教的にも正式の皇后たらんと決心した。

ある夜、いつものように、ソリマン大帝から、ロクセラナへ、閨房へのお召しが来た。

その時、彼女は、

「いま、あたくしは、アラアの神から、それを禁じられています。神の前で皇后にならなければ、もう、大帝の閨房に入ってはならないと、神のおおせを受けております。あたくしは、死ぬよりほかありません。」

そういつて、サルタンを一夜、悶え死にするほど頑強に、閨房入りを拒んだ。

彼女の計画は当たった。サルタンは、教司に命じて、翌朝すぐ、彼女を宗教上からも皇后とした。つまり、神のおぼしめしによりトルコ国皇后にされたのである。

このときサルタンは、

「この女の夫になることは、全世界を集めた大帝国のサルタンになるより好ましい」といった。

ロクセラナは、さらにサルタンに願った。

前皇后の王子はもちろん、すべて、ハレムで女たちが、サルタンの愛の滴を受けて生まれでた、すべての子供を殺してくれと。

ソリマンは、彼の最も愛した王子のムスタファという美少年には、ある部屋を与えて、そこで縊死せよとヒモまで与えた。ゆりかごの中の赤児は、それこそ、文字どおり赤児の手をひねるように殺された。

ロクセラナは間もなく妊娠し、そして王子を生んだ。これが、のちに「バカのセリム」といわれた王子である。

だが、やがて、ロクセラナにとって悲しむべき日が来た。ソリマン大帝の死である。ロクセラナが、どんなに美しく、権力をもっていたとしても、それは、あくまでもソリマン大帝がいたからである。

かくてロクセラナに、没落の日がきた。

ソリマンの血統をひくわずかの者たちによって、帝位継承の問題が争われた。だが、このとき、彼らは団結して、ロクセラナ母子の追放をまず計った。二人は小アジアへ逃げね

ばならなかった。その後の消息は、絶えてわからなくなった。栄華の末路というべきであると、人々は噂した。

このハレムには、ふつう、五百人から千百人の、主として女性が住んでいた。

女たちは、侍女と妻妾にわけられていた。だが、侍女でも美しければ、一夜にして妻妾とところを変え、昨日までの主人を、侍女として使うことができた。

ハレムの女たちは、男の子を生むより、女の子を生みたがった。というのは、侍女や妻妾になるほうが、トルコでは、住みよいからであった。

ハレムには、いまなお、女たちの美しい衣装や宝石その他が陳列されているという。一四五年にコンスタンチノールを占領したマホメッド二世以降二十四人の王の彫像もあり、その前後には、暴君として世に知られたアブダル・ハミットの像が並べられてあるという。

そして夜、裏門の窓をしめ電、灯を消すと、宝石の光で、二燭光くらいの明るさを放ち、その中に、サルタンたちの彫像が立っている光景は、えもいわれぬ不気味さをただよわせるといふ。

ベルトの魅惑

柏村 みどり

うぶ毛の光る肌

朝鮮戦争のはじまった昭和二十九年九月、私は、米軍のキャンプ・ドレイクにある将校官舎に、メイドとして住み込んでいました。

翌月、主人のA・トーマス中尉の所属する第一騎兵師団が、大挙して朝鮮戦線に投入されたので、E・F202の宿舎は、ミセス・ケイトと私の二人っきりの生活になりました。

ミセス・ケイトは、数多いキャンプ・ドレイクの将校夫人の中でも、アン・ラッキーのカードに入ったようです。というのは、朝鮮戦争のはじまる二月ほど前に、A・トーマス中尉が、二週間の休暇で本国に帰ったとき、デンバー市で急に結婚したとかで、ふたたび

日本に戻ったときは、美しいブロンドの夫人を伴っての帰還で、私もびっくりしてしまいました。

日本の新婚家庭でも

女中さんは相当アテられると聞いています。ことにアメリカ人の新婚は、終日ドアもあけっぱなしで、大胆にふるまうので、日本の娘がメイドに住み込んだら、それこそノイローゼになってしまいます。私は、トーマス夫妻が、そろって若く、ハンサムであり、美女なので、この先どうなるかと、内心は胸をトキメかせていましたのに、噂に聞くアツアツのふるまいもなく、ましてアメリカ映画にみる



ような濃厚なキスも、新婚だというのに、まったくその気配もありません。

ただ、朝の九時に車でオフィスに出かけるとき、ドアのところで、かんたんに、コールド・キスをするだけでした。

ですから、トーマス中尉が朝鮮に行くときも、その前の晩に、ごく親しいキャンプの十人ほど集まってパーティーをしただけで、日本人のように、終夜酔いどれることは

ありませんでした。

ミセス・ケイトは、夫が戦地に行ったあとは、今までとちがって元気になり、美しさも一段とましてきました。朝などは、男の人がみたら目のやりばのないようなビキニ・スタイルで、私と一緒にキッチンをします。

全身に金色のうぶ毛がくまなく生え、ことに背から腰にかけては、いくつもうす茶のソバカスがあり、それが少しもきたならしく感じないのは、ミセス・ケイトの天性の美というのでしょうか。

ときどき、用もないのに、日本人のガードがやって来ます。キャンプ・ドレイクでは、うちのミセス・ケイトは、五人のうちの中に入る美人という話で、ガードたちは、一目見たさにやってくるのです。

私は、日本の家庭の女中さんはしたことはありませんが、むしろ当時でさえ、私の実家には中年の女中さんがいましたが、私や、私の家族のことに、女たちは誰一人、自分の下着を女中さんに洗わせるということはしませんでした。おそらく、女中さんを使っているどこの家庭でも、そうだと思います。

しかし、ミセス・ケイトは、ちがいます。カゴ一杯にもってくる色とりどりの洗たくも

のの中にまじって、パンティーはもちろんのこと、体臭の一番強くしみこんでいるロンテイーをも私に洗わせます。ことにプロンドの巻き毛の一、二本がおちているときなどは、ドキリとします。

カギ穴から見た鞭打

朝鮮戦線のトーマス中尉からは、三日に一度ぐらいのわりあいでレターが来ます。それが十日になり、一月に二度ぐらいのときもあります。

私が一度、メイルに行つてレターをとつて来たとき、ミセス・ケイトは、サウス・キャンプのお友達、ミス・キャシイと、ティーの最中でした。私は、いわれるとおりに、書棚の二番目に置きかけたときハッとしました。今まで、トーマス中尉から来たレターは全部封を切らずに置いてあるのです。

二人は、夜おそくまで雑談をして、十二時ごろ、ミセス・ケイトは、ミス・キャシイを車で送って行きました。

私はその夜、いつミセス・ケイトが帰つて来たのか、見当もつきません。うつらうつらしていたようです。夜中、私は異様な呻き声に目をさました。

完全な冷暖房の官舎でも、室内はさほど防音装置ができていない建て物ではありません。

何か床をける音と、つづいてピシッ、ピシッという鋭い音、その間じゅう、

「ハッ、ハッ、ムーッ、ホウッ」

という女の声でした。

私は、トイレに行くつもりで、その物音のするミセス・ケイトの部屋の前に来たとき、あきらかにあかりがつき、ミセス・ケイトの上ずった声と、ピシッ、ピシッという音とともに、女の声が呻くのです。

私は、すくみかけた足を、勇気を出してドアのカギ穴に、そっと目をあてました。

「あッー」

思わず私のほうで、悲鳴をあげてしまいました。

十二時ごろ帰ったはずのミス・キャシイがカーペットの上につ伏せになっています。ストッキングとハイヒールをつけただけの全裸に近い格好で、ミセス・ケイトの右手にもったベルトで、打たれているのです。

痛みに耐えかねてミス・キャシイは、這うようにして、私のいるドアのほうへ逃げて来ますが、それもつかの間、今度はベルトを首にまかれ、丸く、ぶつちりとふくらんだお尻

の上に、ミセス・ケイトの真っ赤なハイヒールを力いっぱい押しつけられて、グイグイ引き戻されます。

「グッ、オーッ、オーッ」

血をふき出すかと思われるほどはちきれそうに前に突き出した下腹を、つづいてけられるのです。

「グエッ、クッ、ムッ、ツ、ツ」

ミス・キャシイはからだをくの字に曲げ、両手を顔にあてて悲鳴をあげ、カーペットの上をのたうちまわります。

私が、メイドになったばかりのGI宿舎である日、婦人用のトイレの中に、あられもない男女のもつれあった写真が壁にはられているのをヒョイとみて、びっくりしたことがあります。それが、用を足す格好の目の前にはつてあるのです。いくら目を閉じて、その鮮烈な秘画は、網膜を破って私のアタマの中に焼きつき、といって、その写真をはがす勇気ありませんでした。一晩中、私の下半身は、私の意志と反対のうずきに、夜を明かしたことがあります。

そのときのうずきが、カギ穴を通してみている私の五体を、いつの間にか釘づけにしているのです。

力つき、失心したようなミス・キャシイの動きが止まると、ミセス・ケイトは、勝ちほこった動作を大仰に示し、バス・タオルをヌラして、キャシイの全裸の肌をくまなくふいてゆきます。

最初は首に、肩、乳房、脇腹、腰、そしてキャシイを仰向けにすると、おり曲げた肢をしずかに左右に開いて、ふっくらと盛り上がるデルタに、いくどもキッスをくりかえすのです。それが終わると、ミセス・ケイトの顔が、はつきりとキャシイの肌に押しつけられたとき、

「ア、アア、フーッ」

と、キャシイは急に気がついて、今度は前のようなベルトへのもだえではない、もっともっと何かを求めるようなもだえ。そしてミセス・ケイトもまたすばやく下着を脱ぐと、キャシイの求めるもののなかにふんわりと重なりあってゆきました。

それからのことは、とても申し上げられません。ただ、私にとっては、全く想像のつかない出来事でした。

満ち足りた朝

翌朝、トラビアータを口ずさみながら、う

きうきしたミセス・ケイトと、キッチンで二人前の朝食です。

生まクリームを使ったクッキングなど、かつてトーマス中尉と一緒にいたときは一度もないのに、その朝だけは特別でした。

「今朝のマダムは、とってもステキです」

私がいうと、ミセス・ケイトは、いたすらっぽい目を輝かせて、

「オ上手ね、ミドリサン」

と首をすくめました。

「ミス・キャシイ、泊まったんですか」

「オウ、ソウ。ラテン・クォーター、ステキナ、クラブデシタ。ミス・キャシイ、ダメ、スコシ、トムコリン、ノミマシタ。ヨッパライネ。ミス・キャシイノパパ、オコル。イイヒトヨ」

ひる近く、シャワーをあびているミス・キャシイのからだは、昨夜のベルトのあととも消え、美しくすきとおるようなきめのこまかさ、私の目にうつりました。

ミセス・ケイトと、ミス・キャシイの夜のひめごとは、その年の暮れまでつづいていました。

私は、いつも、十二時ごろからはじまる、あのベルトの音を聞くまでは、どうしても



られなくなっていました。
 ピシッ、ピシッ、という音を耳にすると、
 私はしずかに廊下に出て、カギ穴に近よりま
 す。

二時間近く、しだいに私には、その時間が

短く感じられるようになりましたが、私は、
 自分でもおかしいくらいに、からだが目に見
 えて成熟してゆくのがわかりました。

三、四カ月前なら、いたずらに小さな乳首
 をもてあそんでも、なんの反応もなかったの

に、その夜以
 来、私のから
 だのすべてが
 かみそりの刃
 のようにうす
 く、するどく、
 ピリピリと反
 応をしめすよ
 うになって来
 ました。

襲いかか るベルト

しかし、そ
 の年の暮れ、
 ちょうどクリ
 スマスの夜で
 した。トーマ
 ス中尉もいな
 いので、例年

にない寂しいクリスマスでしたが、ミセス・
 ケイトは、私にクリスマス・ディナーをつく
 らせておきながら、自分はサウス・キャンプ
 の官舎に出かけていきました。

私は、オールナイトのつもりで、いつミセ
 ス・ケイトが帰って来てもいいように、テー
 ブルの上にいくつもの皿をならべ、デコレ
 ションを飾り、ローソクの灯をたやしません
 でした。

明け方近く、ミセス・ケイトは、ひどく酔
 って帰って来ました。

そして私を食卓によぶと、とっておきのシ
 ャンペンを抜き、私にも飲めとすすめ、自分
 は、ナミナミとグラスに三度ものみつづけま
 した。

「クルシイ。水ネ」

ミセス・ケイトは、そういつて自室にもど
 り、私はいそいで水をもって、そのあとにし
 たがいました。

「アリガト」

ほんとに苦しそうにうつぶせに毛布をかき
 いだき、肩で息をしています。

「ミドリサン。イラッシャイ」

私は、その目がただならぬ思いをこめて輝
 いているのを知ると、急に恐ろしくなっ

ドアに手をかけたときでした。

どこからとり出したのか、風を切つてベルトが、私の背にふりおち、あの、ピシッという音が、私の全身からほとばしったのです。

「あッ、いやッ」

ヘナヘナと私が腰をつき、前にこごみかかると、つづいてベルトが音をたてて、肩や腕におちて来ます。

「痛いッ、止めてッ、あッ、止めてッ」

まさか、ミス・キャシーの代役を私がつとめるとは、夢にも思いません。ただ、ミセス・ケイトの、狂ったような右手が大きく空を切るとき、私は身をすくめて、そのベルトに耐えるのです。

すでに私の腕には血がにじみ、肩ははりさけんばかりに、ヒリヒリと、激痛がこみあげます。

「ベルトは止めてください。おねがいです。もう止めてッ」

ミセス・ケイトは、私の言葉が通じたらしく、今度は私を這わせておいて、例の馬乗りになって、ところきらず平手で叩きはじめたのです。

両手をねじられ、少しでもさからうものなら、爪先が私の下腹をけりあげます。そのう

ち私は、パンティーをひきちぎられてしまいました。

ローソクとフォーク

ただワナワナとふるえ、歯をくいしばってこらえる私に、ミセス・ケイトは、何を思っただか、火のついたキャンドルを逆手にもつと、力を込めて私の腰を左右に開きました。

「あッ、神さまッ、助けてッ」

私は、いたずらに逆らえば、どんなことになるかわからないので、四つん這いのまま、ひたすらに神に祈る心でした。

「ダイジョウブ、ミドリサン、ダイジョウブ」

一瞬、目がくらみ、私は硬直してしまいました。

「ダイジョウブ」

火の消えたキャンドルが、私の両腿のあいだにはさまれ、それをまたベルトが、両腿ごとしめ上げました。すると、ミセス・ケイトの手が、キャンドルからはなれ、その芯に火がつけられました。

「ああ……火、火、やめてーッ」

もがけばもがくほど、とけたロウは飛びちって、腰のあたりに、火の玉となって、つきます。

「あつい、アツイ、助けてッ」

「ダイジョウブヨ」

「お母サンッ、いやッ、もう止めてッ」

ミセス・ケイトは、私の言葉に首をかしげ、例のベルトを私の首に巻きつけ、その端を食卓の脚にくくりつけました。

それは、もがくと、徐々に首のベルトがのどに力を加えてゆく死のリングなのです。

「クルシッ、アアッ、クッ、ムーッ」

もう目もつぶることもできません。口も開いたまま、ゲッ、ゲッと、言葉にならない呻き声だけが、よだれとともに飛び出すだけ。ミセス・ケイトは、そんな私を、立ち上がったながめ、ひきつったようにのどを鳴らし、食卓の上に置かれたフォークを、手にしたのです。

(殺されるッ、これで刺されたら、私は首をしめられ、みうごきもならず、乳房に突き立てられたら……)

キャンドルの火は、しだいに短くなり、あつさが加わります。

すると、どうでしょう。ミセス・ケイトは、いつものように下着を脱ぎ、ストッキングとハイヒールだけの全裸になると、椅子に腰をかけ、両股を平均に左右に開き、ちょうど日

本人の切腹のような仕草で、そのふくよかな下腹部を二、三度なでまわすと、目をとじ、フォークを逆手に右にもち、

「ハッ、ハッ」

と大きく息を吐くと、やにわに自分の肌に突き刺しました。

「……………」

私は、自分の苦痛などいっぺんにふきとび、凄惨なミセス・ケイトの姿にみとれてしまいました。

しばらくすると、ミセス・ケイトは目をあけて、私にえんぜんと、ほほえみかけるのです。そして、今度は大げさに腰をゆり動かし、でもだえ、死のけいれんに至るまでみせつけるのです。血を見た喜びでしょうか。

やがて私も、ミセス・ケイトも、息を殺して、なにものかをまつ時機がきました。

キャンドルの火はあいかわらずもえつづけて、あと十五センチで完全に私の肌に焼きつきます。

ミセス・ケイトもまた、こきざみにふるえて、両手で乳房をしめつけます。

「ダーリンッ、ヘルプッ」

私は、夢中で叫びました。火があますところなく肌につきはじめたのです。

ミセス・ケイトは、気がつく、自分のプレイを止めて、私の火を消し、首のベルトを解きました。

私を抱いたミセス・ケイトは、かんだんなく私に愛を注ぎます。私もまた、同じように与えるのです。

ベルトの鳴る音

翌朝、私は、後悔の念で部屋に閉じこもって、起きる元気もありませんでした。

「ミドリサン、元気ネ、ダイジョウブ」

いつもと変わりのない、ミセス・ケイトのビキニ・スタイルが、豊富なミルクとともに私のベッドに運ばれて来ました。

「すみません、マダム」

「オウ、ダイジョウブ」

その夜もまた、私はピシッ、ピシッと鳴るベルトの音にひかれ、ミセス・ケイトの部屋に飛び込んでゆきました。

つぎの日も、またつぎの日も、私は、どんなときでも、あのベルトの鳴る音がすると、いてもたってもいられぬ、肉体のうずきを覚え、また一つ罪を重ねてゆくのです。

その年も明けてまもなく、朝鮮戦線のトーマス中尉の戦死の公表が入りました。

さすがに、その日は、一度もベルトは鳴りませんでした。二日目からは、ふたたび鳴りはじめました。

春になって、ミセス・ケイトは、本国に帰ることになりました。ジョンソン基地まで、私は送りに行ったのです。

家族用の大型軍用機のプロペラが回り始めるまで、二人は無言で立っていました。最後のサインが機上のタラップから送られて来たとき、やっと、ミセス・ケイトは、私の肩を叩いてニッコリと笑い、

「ダイジョウブ、ミドリサン」

といって走ってゆきました。

私は、現在、東京のDホテルで、チーフ・メイドとして勤務しております。

いくども、誘惑されることもあります。

私自身、ステキな紳士をみると、さそってみたい気も起きます。しかし、それは、それっきり、ほんの二秒か、三秒の間なのです。

あの、ミセス・ケイトの、ピシッ、ピシッというベルトの音が、今いちど私の耳にはっきりと聞こえないかぎり、私はこのまま、年をとっていつてしまうのかもわかりません。

△創作▽

深夜の殺人ショー

七 村 次 郎

大ネタの誘惑

取材と称してミイラがミイラとりになるおきまりのコースに、ほろ酔い加減もさることながら、残り少ない取材費をふところに、狙いをつけておいた銀座のアルサロッレイン・シューズのラスト近く、情夫^{ヒモ}気どりに、店先にあるシュロの木のかげで、タバコに火をつけた。

「ダンナ、映画でもみませんか」

ニヤけた野郎だ。

「それとも、ブルブルっとくる活人形のお芝居はどうです」

火つきの悪いタバコだ。チェッ、こんなに吸い口がヌレてやがる。

「するってえと、ダンナは、こんなのはいかがですか」

男がポケットから取り出したキャビネの写真は、例のエロ写真と思ったら、なんと、若い女を裸にムイテ、そいつをやたらにロープで縛りつけ、ムチでひっぱたいている、俗にいう責め場の写真。

「死にしませんかね、手荒くあつかうんで、結構、お客さん方は喜びますよ。今夜はチョイと趣向を交えるはずなんですがねえ」と来た。

ラストのグッドナイト・スイーハートが流れてくる。そろそろ可愛い女のおでました。

「いいネタになりますぜ、ダンナ」

オレはグルグルッとソロバンをはじいた。

お約束の取材費はハイ・ティーンの売春だが、その分のことならすでにOK、泊まることは決まっているのだから、残った金は、それこそ雑誌の向きで、金の卵^{きんたま}がふえようというも

の。オレは決めた。どうせ、タマシイのない男だから、どうにでもなる。

「へッへへ、参りましょうか」

オレは、男の呼んだ車に乗った。先客が二人、一人は女だ。見覚えがある。女は私をみると顔を伏せた。

車は濠端を通り、山の手に向かった。目白通りだ。やがて聖母病院のタワーが見えた。

この辺が、ときおり穴場になるということは聞いていた。

車は通りを左に折れ、坂道にかかる、そして、またターン。瀟洒^{しょうしや}な門がまえの洋館が目の前にあった。

「降りていただきましょう」

いやにドスのきいた声だ。さっきのヤニ下がつたセリフはどこへいったのか、とにかくその男は、いっばしのギャング気取りだ。

車中の女は、オレによりそって、ドアをあけた。

「あたし、あなたを知ってますわ」

「そう。それが、さっきから思い出せないんだ」

酒場の女、マダム。ストリッパー。それとも凶マークにしけこんだことでもあるのかな。オレは、どうせロクなことをしていないから、あまり立派な口もきけない。

「この部屋に入ってもらいましょう」

部屋といっても、電燈がついていないので何もみえない。ただ、その暗闇の中で、静かに女の手がふれた。オレも、女も、暗いからテレずに手をにぎり合った。

手術台の女の死体

そのとき、まったく突然に、オレと女の手は、おそろしく強い力でふりはなされ、女の悲鳴がつんざいた。

「はっは、は、は」

例の男だ。オレは映画の主人公になったつもりで、暗闇の中に身構えた。

「ダンナ。そう気ばりなさんな。これからショーがはじまるってえのにさ」

つづいて女のもだえ、おののく声が部屋中

にひびく。

「あかりをつけろ」

オレはユーちゃんだ。

やがて、明るい螢光灯がパチパチと音をたてて、室内のあちこちにつきはじめた。

十坪ほどの洋間に、赤いカーペットがしきつめられ、オレのまわりには椅子が七つ。その椅子にも、無言ですわった紳士たちが、煙草をくゆらしていた。

「どうぞ、おすわりになつて」

例の男の声が、マイクを通して、聞こえてくる。

「さて、大変おまたせいたしました。これからショーを開幕したいと思いますが、実は、そのまえにおことわりしておかなくてはならないことが生じ、まことに、お集まりのみなさま方に申しわけないと存じます。

と申しますのは、このショーのプリマドンナであった青山ルミが、昨夜のショーで、重傷を負い、たった今、息を引き取りましたので、今夜のショーは、当然休止ということになったのでございます」

パントマイムの紳士たちは、ガヤガヤとあちらこちらで話し合いをはじめた。あきらかに、サギ、ペテン、ユスリ……エトセトラ。

「お静かに。私どものショーが、インチキやペテンでない証拠をとっくりとごらんいただくために、ただ今息を引きとったばかりの青山ルミの死体を、ここに運んで参ります」

マントルピースの左側のドアがあいて、手術台の金属車が、にぶい音を立てて入って来た。男が一人、手術着のように白い上っぱりを着て、その車を押している。

手術台の上に、血の気の全く失せた若い女の死体が、全裸のまま、シーツをかぶされて仰向けに横たわっている。

オレや、紳士たちは、いっせいに立ち上がった。シーツの下にかくされていた女のからだは、病気で死んだものではないので、おそらく、すべてが健康で、乳房も、腹部も、両腿も、大きく、ゆたかに盛り上がり、生あるもの以上に妖氣の肉感がこみあげている。

「シーツをとって、みなさんに見せてください」

マイクの声は、非情にひびく。

白い男は、しずかにシーツをまくり上げた。「おウーッ」

見事な肉体。そして、その青く沈んだ肌にいくつものムチのあとが死斑をえがいて焼きついている。

「もう一つ、この死体の最後をかざって、私たちの真実をお見せします」

白い男は、マイクの声にうながされて、ポケットから鋭い解剖用のメスを取り出した。硬直しかけた乳房を巧みにもみはじめた。

すると、ガーゼを一枚取り出し、右の乳房をおおい、その上にメスをあてた。

プスッ！ たしかに皮膚の破れる音、つづいて、肉にくい入ってゆくかすかな音、死んだとはいえ、血がパッと花が咲いたようにガーゼを赤くいろどった。

メスの柄が、女の乳房の上で止まった。

「いかがですか。このショーがインチキでないことがわかりでしょう。この青山ルミは十三回という責めに耐えて来た女です。私のショーとしては、ルミの死ほど悲しいことはありません」

また、ガヤガヤと、オレたちはうなりはじめた。

「ところで、みなさま方にご満足していただくために、今夜、みなさま方の中から、美しい女性を、私たちのショーのイケニエとして選ばせていただきましたので、つぎにご紹介します」

インギンなマイクの声だ。

悲鳴をあげる女

パーン、パーンというピストルの音につづいて、さきの白い男に引き出された女、

「あッ、あの女」

オレは、カーペットに転がされた女をみてギクンとした。

「いやッ、よしてッ」

女は、夢中で白い男に抵抗した。紳士たちは満足げに見守っている。

白い男は、女を押し倒し、なれた手つきでみるうちに、彼女の両手を後ろ手にロープで縛りあげた。乱れたタイツは、無造作に白い男の手で脱ぎとられ、バタつかせた両足も、きっちり堅く、くくられてしまった。

縛り終わって倒れた女を、こんどは一枚一枚、下着をひきちぎってゆく。あらわになった乳房は、ブラジャーの止め金にうすく、引きさかれて、血がにじんだ。

白い男は鋏びょうのついたベルトを手にした。のたうちながら悲鳴をあげる女のからだを押えつけ、美しくくびれた胴にベルトを巻きつけた。キラキラと光る金色の鋏が、五ミリほど毒牙のように、いくつもベルトにはめこまれてならんでいる。そのベルトで女の胴を、思

いきり締めつけようというのだ。

女は、恐怖にわめいた。

白い男が、マスクの下で笑ったようだ。ベルトの止め金に、片方が通された。

「うぬッ」

白い男は、力いっぱいベルトをしめた。

「ギャーッ」

女は、一尺近くもとび上がったのけぞり、ベルトにしめつけられた。みるみるうちにくびれた胴は血に染まり、真紅のカーペットにすいこまれてゆく。

「死ぬ、死ぬッ、クルシーッ」

女は、のたうつたびに、ベルトの鋏がますます肌に食い入るので、いたずらに、くくられた手足を宙に泳がすだけだ。

マイクにスイッチが入った。

「自分では死んでしまおうと思っ

ていますが、こんなことでは、なかなか死ぬものではありません。女は血をみて、自分がどのような刃物で腹中を切られているのか想像して、わめいているのです。こんな実験はいかがです」

白い男は、椅子に近より、一人の紳士から万年筆を借り、もう一つ、細身の刃先の長い香港ナイフカンコンを手にして、女の前に立った。

白い男のさし出したナイフが、ゆっくりと

女の顔の前に示される。

「苦しいか」

白い男のマスクが動いた。歯ぬけのサタンがしゃべるようだ。女はうなずいた。

「死ぬ、死ぬ、死ぬ、殺されるーッ」

女は、いつまでもうわごとのように、それほどばかりを口走った。

「楽にしてあげようね」

白い男は、目前にチラつかせた香港ナイフの刃先を、首から乳房の谷をなでて、ピタリと、血にまみれた腹にあててとめた。

女は悲痛なうめき声をあげて目を閉じた。

白い男は、香港ナイフと万年筆をすりかえると、グイッと腹中に強く押しつけた。

「グアッーッ、ッ、ムッ」

グリグリとひねるたびに、女は絶叫する。

ベルトから流れた血を、ナイフの刃につけて女の目の前に突き立てた。

「ヒューッ、死ぬッ、あッ、アッ、ア、ア」

女のからだは、しびれるようにけいれんをはじめた。

また一人死んだ

オレは、この奇妙なショーに戦慄した。ピクピクッと動く女のからだは、クローズ・ア

ップして、目の中にとびこんでくる。

やがて、女の呼吸が止まった。白い男は、

口に手をあて、その死をたしかめると、くくってある両手、両足のロープをほどいた。

だらりと、なんの反応もない女のからだは、仰向けにひらいた。

(女がまた一人死んだ)

オレはアタマの中で、このグロテスクな殺人劇のストーリーをまとめかけた。

マイクの声に紳士たちはどよめいた。

「死んでいるのです。さあ、こんな美人を思う存分犯してみたいと思いませんか」

紳士たちは、一様に首をふった。

白い男は、女の死体に近よると、こんどは切先を女の胸にあて、ズブリと突き刺した。

と同時に暗くなった。

「これで、今夜のショーは終わりです。ちょっとお待ちください……そうあわてて帰るこたア、ねえでしよう」

たちまちギャング気取りの、例の男がドスをきかした。暗中で、紳士たちは動揺した。

「今夜、ここでみたことは、内緒にしとくんだけ。明日あたり、二人の女の仏が、多摩川あたりに浮いてるはずだから。それと、そのザツブン屋さん。大ネタをつかんだつも

りで、あまりア、コギなことをすると、おわかりですな」

オレのユーちゃんは、すっかりガタついた。金もいらぬ。このショーを見たことをしゃべるなどというなら、オレは、目も口もここにおいてゆく。

三々五々、車に呼び込まれて、オレはグリーンのスポーツカーに乗った。

「フフ、いかが、今夜のショー」

オレは、前にすわった女の声に、とび上がった。

「君は、さっきの、死人だ……」

「そうよ。昨日も、今日も、明日も死ぬわ」

「すると……」

オレは、あわててタバコに火をつけた。

「フフ、こんどは火がつくのね、お送りするわ」

女は、アクセルをふんだ、軽快なMGは、一気に坂道を走った。

「あなたは、今夜、ショーをみにきたのじゃなくって？ それとも、これから、あたしのアパートまで送ってくださるかしら」

オレのタバコはまた消えた。

「消えたのね。フフ、あなたも火つきが悪そうね」

女の肌に書いたカミソリ文字

高 島 伸 六

責められる肌

「八重子。さ、脱ぐんだ」

「いやよ、いやだわ」

「なに、いつてんだ。いやだからといって、
よすオレじゃないぜ。それは、お前のほうが
よく知っているじゃねえか」

「もう、いい加減にかんにんして。ね、お願い
い」

「馬鹿野郎！ 調子づくんじゃねえよ。オレ
がおとなしくいつているうちは、まだいいん
だぜ。さっさと早く脱げ」

「いやあね。ほんとにこれっきりにしてね」
山口八重子（一九）は、いかにも嫌らしい
といった表情で、川崎吾一（二四）をにらみ
ながら、しぶしぶ衣服を脱いだ。それをじっ

と瞬きもせずみつめたまま、ジュミーズにパ
ンティー一つとなり、ふっくらと盛りあがっ
た乳房、豊満なむっちりとした腰部、その一
つ一つがむき出しになっていくにつれ、川崎
の目は異様な輝きをみせてくる。

こうして八重子が、すっかり丸ハダカにな
るのを待って、ちよっと舌なめずりし、つか
れたようにその肌に手を触れ、

「寝るんだ」

とボツリといった。八重子は、川崎のいう
通り仰向けになる。それをみて川崎は、いき
なり、その身体にむしゃぶりつき、ちよっと
の間じっとしていたが、やおら、カラダを持
ち上げると、手早く女の手足を手拭いでうし
ろ手に縛りあげ、

「さあ、泣け。いいか、思いっきり、泣くん

だ」

と叫び、自分のズボンのバンドをさっと抜
き取るが早いのか、力いっぱいピシリッと八重
子の肌めがけて打ちおろした。

「う、ううん」

瞬間、八重子の肌にさっと紫色の斑点が走
り、のけぞった。

「痛くはないのか。まだ涙も出ないんだな。
強情な女だ。いいか、覚悟はいいな」

またしてもバンドが、ビュンとうなつて八
重子の肌に飛んだ。

「うううう、ゆ、許して、お願い、ね……」

八重子が、はく息もとぎれとぎれにいうの
に、川崎は、耳をかさず、なおもバンドを振
りおろす。そして、一回、二回、三回と、た
て続けに八重子の肌にバンドが食い込み、し



まいには、声も出なくなってしまった。力つきて失神状態になり、肩でわずかに息をする八重子を見て、川崎は、もうこれ以上責め立てるとこと切れてしまうと悟ると、やっと、ギラギラ妖しく光る目を、八重子の一点にため、しばらく陶酔境に浸っていた。

縛られる陶酔

八重子と川崎がはじめて知り合ったのは、昨年の夏。当時、八重子は錦糸町江東楽天地のバー「みどり」に働いていた。そこへ偶然客として入ってきたのが川崎で、そのにがみ走った男っぷりに、一回で、八重子は参ってしまった。

川崎は、この界限での名うてのグレン隊。八重子は、もと、池袋のバー「コスモポリタン」の女給をしていたが、同年春「みどり」に移ってきたもので、池袋以来、男出入りは絶えなかった。したがって、どちらかといえど、尻軽女といったところで、初対面の川崎に、

「どうだい、今晚、つき合わねえか」

と、ちょっかいを出され、

「つき合うって、何すんの。話によっては、いつでもいいわよ」

カマトトぶって、川崎の心をじらせ、そのくせ、自分から進んで、付近のドヤ（旅館）にしけ込んだのだから、並みの女とは、ちょっと違う。その結果、二人はたちまち意気投合、八重子が借りている近くのアパートに川崎を誘い込み、同棲生活をはじめたのだが、うまくウマが合ったのは、はじめの二、三日だけ。日がたつにつれて川崎は、定職がないまま、八重子の稼ぎを目当てに、毎日ぶらぶら遊んで歩き、酒を飲んで夜遅く帰ってくる。それに、飲み代がない、といっては、八重子の勤めている店に顔をノゾかせ、金をやらないと、凄味をきかせて毒づく始末。

だが、こんなことぐらいだったら、男を何人も手玉に取ってきた八重子のことだから、軽くあしらって追っ払うことぐらい造作のないことだったが、なんととしても、耐えられないことは、川崎との性生活だった。それもはじめのうちは、おくびにも出さず、八重子を愛撫し、歓喜の声をあげさせていた。しかしそれが、いつの間にか、狂的となり、八重子を丸ハダカにして縛りあげ、殴る、打つ、くすぐるといった変態的行為に変わり、それによって、陶醉境に浸るようになったのだ。そうして満足しきったあと、失神状態の八

重子をひしとかい抱き、思う存分、その肌をなでまわし、そこでまた、情欲をひととき燃え立たせて満足をとげる。

これが、八重子には耐えられなかった。痛いばかりでなく、狂気にも似た川崎をみるのが、なんとしてもいやだった。

こうなると、八重子の川崎に対する憧憬とか愛情は、ひとかけらもなくなった。その揚句、痴漢以上の憎しみを持つまでになったのだ。そんなわけで、川崎と顔を合わすのさえいとわしく、毎夜のように、

「ね、もう私、これ以上とても我慢できないわ。お願いだから別れてちょうだい」

八重子は頼んだ。これに対して川崎は、

「じょうだんじゃあない。お前はオレの女だ。だれがなんといったって、別れるもんか」

と、てんで取り合おうとしなかった。そこで、このままじっとしていたのでは、とても別れられない、と思った八重子は、意を決してアパートを飛び出し、川崎の前から姿をくらました。もちろん、店にも顔をノゾかせなかった。ところが、それもわずか三日間だけで、どこをどうたぐったのか、川崎にみつかつてしまった。そのとき川崎は、

「もう、これっきり、逃げるなんて了見は出

読者の原稿を募集

異色あるテーマの創作、実話、告白手記、体験談など、男女の性風俗に関するものを募集します。枚数は自由ですが、未発表のものに限ります。掲載の分には、もちろん稿料を進呈いたします。

また、表紙や口絵、写真および編集上の新鮮なプラン（企画）だけでも結構ですから、編集部あてに奮ってご応募ください。

すなよ。お前が、どこに逃げたって、必ずひつつかまえてやるからな。オレは、お前にほんとに首ったけなんだ。オレの女だということを、決して忘れるな」

肌にふく鮮血

それでも八重子は、その責苦に耐え切れず、またまた、川崎の前から逃げ出した。再度にわたる八重子の逃走にカッとなった川崎は、

「あれほどいっておいだのに……」

と思い、あちらこちらと八重子のいそうなところを捜し回った。しかし、こんどは、ま
えと違って、なかなかつかまらなかった。そ
のため業を煮やした川崎が、血まなこになっ
て、江東楽天地をさまよい歩いているときだ
った。

ふと、なに気なく江東劇場の入口に目をや
ると、なんと、さがしにさがし求めている八
重子が立っているではないか。川崎は、まさ
か、と目を疑って、いま一度、それをたしか
めて見た。

やはり八重子だった。川崎は、それと知る
と、素早く駆け出していつてつかまえると、
「よくも、二度も逃げやがったな。さ、帰る
んだ。もう決して逃げねえようにしてやるか
らな」

有無をいわず手を引っ張ってアパートに
連れていった。部屋に入ると川崎はいった。
「布団を敷くんだ。早くしろい。こんどは、
これまでと違って、よけいいいぜ。その前に
いっておくけど、お前は、オレの女だ、とい
うことを忘れるな」

八重子は、川崎にいわれるまま、おずおず
しながら布団を敷いた。

「敷き終えたら、ハダカになって、その上に

寝ろ」

いやいやながら八重子は、パンティー一つ
つけない素っ裸になり、

「また、いやな真似をしやがる」

と思つて、布団の上に仰向けになった。

「きょうは、手足は縛らねえ。その代わり、

目隠しさせて貰うぜ」

川崎は、部屋の隅にぶら下がっている手拭
いで八重子の目を覆うと、その身体をくるり
とうつ向けにしてまたぎ、

「じたばたするんじゃないぜ。さわぎたてる
と、とんでもない目にあうからな」

と念を押し、かねて隠し持っていた安全カ
ミソリの刃を取り出した。八重子は、いつも
とちよつと様子が違うと思つたが、観念の目
を閉じた。

それを見て一瞬、緊張した川崎は、

「さあ、いいか、はじめるぜ」

といったかと思うと、カミソリの刃で、白
くむちりと肉づいた八重子の肩から背中
にかけて、軽くひと撫でした。そのときは、な
んでもなかったが、ちよつと間をおいて、じ
いんと八重子は疼痛を感じた。と同時に、す
つと糸をひいたように血がにじみ出てきた。
これにかまわず川崎の手は、カミソリの刃を

持ったまま、あちこちを撫で回し、やつとと
まった。

このときはもう、八重子の肩から腹のうし
ろにかけて、鮮血がどつとにじみ出し、ふた
目とみられない凄惨さを漂わせていた。その
凄惨さもだが、次第にうずいてくる痛さに、
八重子の目を覆った手拭いは解け、うめき声
さえ洩らして、顔をゆがめている姿をみて、
「終わったぜ。これでもう、逃げようたつて
逃げられやしめえ」

川崎は、勝ち誇つたようにいうと、血だら
けの八重子を抱いて、思いを遂げ、
「そろそろ引き揚げるか。だが、これっきり
じゃねえってことを、忘れるな」
という、ゆうゆうと身づくろいして、部
屋を出ていった。

八重子の肩から背中いっぱい、カミソリ
の刃で彫み込まれたのは、「川崎の女」とい
う文字であった。

こんな目にあった八重子は、店の同僚たち
の口から本所署の刑事の耳に入り、暴行傷害
の罪によって川崎を指名手配したが、川崎は
目下のところ、風をくらって、姿をくらまし
ている。

危険な会話

クローズ・アルノ

エズアルとスーシーは、つい二週間ばかり前に、結婚式をあげた、まだほやほやの新夫婦――

お婆のオーレリーは、

「どうせ当分は遊びでしようから、いつまでもいい、わたしのところへ遊びに来ていたら」

と、自分の別荘へ二人をよびよせた。彼女はひとり者、まるでそう生まれていたようなひとり者であったが、似合いの若夫婦が楽しそうに睦みあっているのを見ると、彼女の心にも、一種の不思議な、未知な波が、胸に打ち寄せるのであった。

その日、エズアルは、ちょっと外出して留守だった。庭の青葉の下で、スーシーは若い女友だちと盛んにしゃべり合って、ときどき気がいみいたいな笑いを爆発させて

いた。

その、二人の話し声や笑い声が、おりおり、マドモアゼル・オーレリーの耳にまでとどいた。

彼女は、チシャの苗畑と、若い姪とに、半々に注意深い目を走らせて、すっかり、あきれ顔をしていた。というのが、二人の会話である。それが、どうも容易ならぬものであったからだ。

まあ、ざっと、こんなようなものであった……。

「それで、あの人、どうにか、やつつけるにはやつつけるの？」

「そうね。これから日数がたったらね。それも、どっさり……いままでのところじゃ、からきしダメなのよ。ほんとうに、しゃくにさわるったら！」

「あたし、お察ししてよ！」

「うちの人ったら、ぐずぐずばかりしているの、男のくせにねえ……からっきし、もう、あんな性質じゃ、どうにも、しょうがないのよ」

「そりゃあ、じれったいわね」

「ねえ、あなた。じれったいって、ないのよ。うんと元気を出してよッ――って、そういつてやるんだけど、ちっとも効果ないわ。体質からしてよくないんだわね。事を、自分から進んでやるなんてこと、しないんだから。ちっともはじまらない……せつかく、どうにかなったかと思うと、すぐ立ちどまってしまふのよ。あたし、いつも、しまいいには、情けなくなってしまうの」

「そりゃ、あたりまえだわ。このことにかげちゃ、あなたのほうが、エズアルさんよりも上手なんだから」

「え！ そんなこといわれても困るけれど……でも、あたしなんか、呼吸を覚えるのに、あの人ほど手間どりはしなかったのよ。でも、そんなこと、自慢にはならないのね。場合によっては、たった一日で覚えるって必要もおこるからね。そう、あたしが手ほどきをしてもらってから、一年ばか

りも、たつかしら。あたし、五、六人の人から教わったわ。だもんだから、そりゃあいろいろのメソッド（操縦法）を知ってるのよ。それにさ、あたしなんか、はじめっから、一度だって、コワイとか、おそろしいなんて思ったことないの。なんにしてもそれが一番肝心なことね。いまじゃ、あたし、あんなに修業を積んだおかげで、すっかりもう胆がすわっていますのよ。で、あんな新米の、ひよっこみたいなエズアルを見ると、バカくさくなってるね、あの人、ちよつとさわってみるのさえ、ぶるぶるふるえているわ。そんなだから、とてもじゃないけど、物になんかならないわ」

「それにしても、あの方だって、あなたと結婚する前に、初経験てなものは、なかったでしょう？」

「そう言うけどね、あの人、なんだか、疑わしいものよ。あんなに下手なところを見ると。なんでも、あの人、い、こ、で、ちゃんと心得のある方が、そりゃ熱心に教えてあげようとなさったそうなんですが、あの人、びくびくばかりしているもんですから、せつかくの親切も、水の泡に終わってしま

ったというわけ。あの人、その後、商人にも、教わったようだけど、高い伝授料を払うばかりで、さっぱりダメ！ それでいて、ちようどいい折りでもあると、様子だけは、無能力者らしくも見えないから、へんなものね。なにしろ、しゃくにさわるつたらないの。だって、あなた、あの人があんなじゃ、いつまでたつたって、二人で一緒に、あたしの行きたくって、行きたくってしようがないところへなど、行ける望みはないでしょう。あの方は、ここが最高つてところまでやってくれることは、できそうもないの……」

「まあ、かわいそうね、あなたは」

「そうよ、そうなのよ、あんな。なにも知らない夫をもったのは、なんて不幸なんでしょう。あなた、察してね、あたし、本当に悲しくなるわ」

ここまで聞くと、お婆のオーレリーは、もうがまんしきれなくなって、だしぬけに青葉棚の下へ飛び出して来た。体中をいきどおりにふるわせながら、若い姪に向かつて、ひどい言葉をあびせた。

「スーシー、おだまり！ 女の慎しみって

いうものを知らないのかね。夫より先に、教え手があつたの、それも四、五人もだつて……それだけでも、おまえの名誉はまるつぶれじゃないか。そのうえ、聞いていれば、あんなことまで言い立てて……それが若い妻として口から出せる言葉だとも思っているのかね？ あたし、まさか、おまえが、そんなことを人前で言うなんて、そんな娘だとは思わなかったよ！」

が、若妻のスーシーは、このだしぬけな叱責に、顔色一つ赤らめるわけでもなかった。それどころか、お婆をあわれむようなほほえみをうかべて、言い返した。

「お婆さま、あたしたちは、自動車の運転のことを話してましたのよ。あたしの言ったことって、あは、運転手としてのあたしの技倆と、エズアルのと、比較してみただけのことよ……でも、あたし、お婆さまがどんな意味に解釈したか、わかりますわ。そういつては悪いけれど、あんな話、そんなふうにとるのは、ヴィエノ・フッキー（オールド・ミス）の方たちだけでしょうね。ああ、そんなんじゃ、童貞って、大変な、お立派なものですわね！」

吹上佐太郎の性の異常遍歴

いとけなき少女ばかりを選んで、悪魔の爪跡を印した吹上佐太郎の変質的な性欲は、彼が獄中で覚えた「男色」の影響ではなかったのだろうか？ という説がある。

神 保 健 三

十一歳で十八歳の女と

吹上佐太郎は、京都市上京区立売浄寺前西上ル真倉で、貧乏な、冷たい家庭の子として生まれた。九歳のとき、父の言いつけで、京都西陣の職人として働くことになったのであるが、これが、彼の犯罪生活にはいる第一歩であったのだ。

十一歳のとき、浅倉守太郎という織屋に奉公中、十八歳になる女中から、性のイタズラを教えられた。

ちょうどそのころである。主人から糸を買ってくるように命ぜられて、五円をあずかって出かけた。ところが、その金で糸を買わずに芝居を見物に行ったので、主人から激しく叱責された。そのうえ警察に訴えられ、拐^{かいた}帯罪として京都監獄署に二カ月服役した。出獄したのは明治三十二年二月十九日だったが、これが彼の最初の犯罪であった。

家に帰って両親のもとに彼がいたのは、わずかのあいだで、また織屋奉公に行くことになった。

こんどの織屋は、ずいぶん大きな家で、奉公人も大勢いた。彼は、ここでもまた、番頭たちを見習って女中を相手に悪ふざけをしたり、性的なイタズラにふけったりしていたが、間もなく、監獄にいたことが知れてきたので、急にイヤ気がさして、無断でこの家を飛び出してしまった。

さすがに家へも帰りづらく、自分で口入れ屋（職業斡旋業）に行つて、「万亀」という料理屋の出前持ちとして住み込むことになった。ところが、ここでも、先輩の料理人が仲居とふざけているのを目撃し、さっそく彼も奥の手を出し、一番年の若い仲居を相手に、人目を盗んでは、性の遊戯にふけるようになった。

こうしているうちに、彼の心のうちでは、色魔のキザシが、徐々に芽ばえていったのであった。だがここでも、その前歴がバレそうにな



利

ったので、また飛び出して浮浪生活にはいった。そして京中をうろついては、食べ物入手するため、女のフトコロをネラったりして暮らすようになった。

そんなふうにしていたある夜、遅くなってフラフラ歩いているところを怪しまれて警察に連行され、ふたたび親元へ引き渡された。そしてまたまた織屋に奉公に出された。だが、このころになると、警察の内情にも通じるようになったし、顔馴染みの刑事も出来た。それと同時に、悪い友達もできた。

あるとき、警察に捕えられていたときであるが、夜盗専門の男と知り合いになり、同じ日に放免された。それが縁で、孤独の寂しさをかこっていたときでもあるので、その男とともに大阪へ流れて行った。

大阪では、その男の言うがままに泥棒の見張りを手伝ったり、未熟なスリをしたりして金を手し、飢えをしのいでいた。だが、その男とも、いつか別れ別れになってしまい、一人になつてみると、なんといつても恋しいのは故郷。そこでまた、京都に帰ろうと決心し、歩いて帰る途中の道ばたで休んでいるとき、見知らぬ男と出会い、二こと三こと話しているうちに、その男の家で、ピンの型しめ工として働くことになった。

だが、ここでも、仕事の辛さに堪えかねて逃げ出し、途中で、うどんの食い逃げをして警察へ連行され、三日間の拘置処分を受けてしまった。

獄中で男色をおぼえる

この警察を放免されるとき、「赤万」という感化院のようなところに引き渡された。ところが、この「赤万」は看板に偽りありで、内情があまりにもひどかったので、そこにもいたたまれず、またまた逃げ出してしまった。

逃げ出しはしたものの、金を持っているわけではなし、やむなく京都まで徒歩旅行をしようと決心した。そして昼は歩き、夜は鎮守の森の木の根をマクラに旅をつづけた。その途中、たまたま道端で休憩中、四十歳近くの女の人に、親切に事情を聞かれたので、身の上話をし、京都へ帰る途中であるという、その女は、すっかり同情してしまい

「あたしの家に来て、お留守居番やら、掃除をして手伝っておくれないかい」

と頼まれたので、とにかく、その家に住み込むことになった。

ところが、この女は、稲荷^{いなり}下ろし、つまりキツネつきを落とす祈禱屋だったものだから、裏庭にある小さな祠^{ほくら}の前で、ときどき、ウンニャウンニャといった手が高く差し上げてウンと唸りながら気張ったり、ひとりでなんだかんだと話をしているので、佐太郎は気味が悪くなってきた。

しかし、夜になると、その女は下腹をさわらしたり、彼の好きなことをさせてくれるので、我慢していた。だが、その女は、ずいぶんと無理な、みだらなことをいうのが、さすがの彼もイヤ気がさすくらいだったので、機会をねらって逃げ出そうとして、スキをうかがっていた。

そんなある日、この女が一日中留守にすることがあった。これ幸いと彼は、戸棚の上にあった三十銭あまりの金をつかんで、そこを飛び出し、その日の午後、やっとの思いで、京都に戻ってきた。

京都での生活は、おもに、女のタモトをねらうスリであった。そんなことをしているうちに、物を盗む方法や、それを売るところなどを覚えていった。こうして、だんだんとシロウトから本職にすすみ、放浪しつつ盗みをしているうち、ふたたび捕えられて、京都の懲役場に一年間入れられた。

この一年間の懲役中に、たまたま男色を覚えた。性の異常者である吹上は、はじめて知った男色の味にすっかり興味をひかれ、不自由な獄中生活も苦にならないほど、それを楽しみにする彼であった。

そんな生活も、どうやらすませて出所した彼は、また父の手に引き

渡された。だが父は、またまた彼を織屋の職人にしようと思って西陣へ奉公に出した。十五歳になっていた。

しかし、放浪生活の味が身にしみた彼にとって、この織屋の生活は窮屈で、陰気であまりなく感じられた。しかも、監獄に何度かはいつてからは、どうも他人と交って暮らすのが気づまりに思われ、苦痛でもあった。そこでまた放浪生活にはいるようになった。

家を出た彼は、大阪に戻った。だが、そのころはもう、変態的な性にとりつかれていた彼であった。たとえば、多くの人が集まっている中に年ごろの女がいると、その側に立って、女のからだに抱きつかんばかりにすり寄ってひそかに自慰をし、女の衣服を汚損した。あるいはまた、そっと女の前のほうに手を差し入れたりした。

そんな具合だったから、拘留また拘留で、どこの警察へいっても、一人か二人の知り合いの刑事ができるようになった。

そんなことをくり返しているうちに、大阪にもあきたので、彼は、またまた京都へ舞い戻った。

老婆の若いツバメとなる

京都に戻ってからの彼は、だんだん荒らっぽい行為をするようになった。女の肉体の秘所が見たい、それをもてあそびたい、という思いに駆られ、その機会をもちたいものと、しばしば市外に出かけるようになった。人なき場所へ少女を誘って行き、無理矢理、自分の目的を達したわけである。そうして、わずかに鬱積した情欲を慰めていたわけである。

ある日のこと、久しぶりで西陣へ行って両親の安否をたずねたが、

彼がしばらく帰らなかったうちに転宅して、どこへ行ったか行方が不明であった。近所の人の話で、妹の奉公先だけがやっとわかったのだ。たずねて行き、そこではじめて、両親が四国へ行ったことをきき知った。さっそく父母をたずねて四国へ渡ったものの、なんの手がかりもつかめず、むなしく岡山に上陸した。

それから彼は、田舎まわりのドサ芝居に加わったり、床屋の内弟子になったりしていたが、彼の変態的な色魔ぶりゆえに、どこにも落ち着けず、明治三十七年の秋に、またまた京都へ戻ってきた。だが、そのときは乞食になっていたくらい、落ちぶれていた。

ところが京都では、思いがけず、両親に再会できた。だが、そんな家庭的な雰囲気にはひたつたのも、ほんのわずかの期間で、ふたたび持ち前の悪癖が頭をもち上げ、彼の体内を嵐のように吹きまくった。

そして明治三十八年の夏、たまたま通りかかった武徳会前の競馬場で、遊びに来ていた女学生をつかまえて凌辱した。身内からつき上げてくる性の衝動を抑えきれなかったのだろうが、それは野獣の情欲というべきものであった。そして、これをキッカケに、またまた野宿の生活にはいったのである。彼は十七歳になっていた。

ついで、京都の蹴上に住む女侠客のお米婆さんの若いツバメになった。この婆さんは、〃若男好きのお米ヤン〃とアダ名されていた名物女であるが、二人の毎日は、情欲の限りを尽くしたものであった。お米婆さんに仕込まれた吹上は、生来の淫蕩性に拍車をかけて、いよいよ性の無軌道につつま走ることになったわけである。

いくら、日ごと、夜ごとに、なめるように可愛がってくれるとはいふものの、相手はもう四十を越した婆さんであり、自分は二十歳前の若さである。どこかピツタリいかないというのを彼が感じたのは、当

然のことであつた。お米さんの肌は、油っ気もぬけかけていることだし、それに若い女のような弾力はなく、たるみがちの皮膚は、彼に空虚の思いを抱かせた。

その反動が、彼の情欲を、年若い少女に向ける結果となったようである。

自分の妹の十一歳の娘を押えつけてイタズラをしたのもそのころである。また、その妹の友達が遊びにくると、その中で目をつけた一人だけを残して、ほかのものを追い出してしまつて、思いのままにイタズラをした。またもう一人の妹のお福という十六歳の少女は奉公に出ていたのであるが、たまたま休みなどで帰ってくると、ウムを言わず押えこんでしまつたりした。

そのうち、屋内だけでの少女相手の情事ではあきたらなくなり、戸外に出て、田畑や山中で、思うまま少女をもてあそぶ快美に心を奪われるようになった。

少女を強姦絞殺して無期懲役

明けて三十九年、吹上は十八歳になったこのころには、もう一人前の色情犯罪者になっていた。だから彼は、もう、親のあることも、弟妹のあることも忘れ、いや、自分自身の将来にさえ思い及ばず、ただ自分の思いのままになる女を見つけようと、夢中になって、京都市の内外をうろつきまわった。そんなある日、金閣寺の近くで、十一、二歳ぐらいの少女を目にした。

「イナゴを取りに、連れて行ってあげよう」

と、ことば巧みに誘って竜安寺山に連れ込んだ。そしてフザケ半分

のそぶり、その少女を抱き倒し、強姦してしまった。

ところが、思いを遂げて身を起すと、少女の肉体には、血が少しにじみでているではないか。彼は驚いた。キズを負わせた娘を連れて帰る恐ろしさに身ぶるいした。その少女は、近所の、顔見知りの少女だったからである。家に帰れば、犯人は自分であると、すぐわかるからである。

そこでトッサに思いついたのは、いっそこの少女を殺してしまい、自分の所業とわかるまでに、京都を立ち去ってしまおうと思った。行き先は上州にしよう。そう決意するや、起き上がろうとする少女を、絞殺してしまった。まさに、異常というべきで、前後の脈絡もなく、ただ、自己中心にしか考えない、変質者に独自のものであった。

そこで、上州（群馬県）行きの旅費を、例の蹴上のお米婆さんのところへ無心に行った。お米婆さんは、吹上の様子がどうもおかしいので、それとなく聞き出し、なんとか引きとめる一方、警察に密告したので、彼は、その夜のうちに、松原警察署に逮捕されてしまった。

なぜ、上州へ高飛びしようと考えたかを、彼の手記からぬくと、「なんでも群馬県下には、西陣と同じく織屋がたくさんある。西陣で育った自分が行けば、仕事に困るようなことはあるまいと考えたので上州へと志したのである」

というのであるが、ここにも、犯罪者独自の心理を汲みとれるではないか。

松原署では五日間を留置場の監房で過ごし、予審が終わってから未決に入れられ、裁判は無期懲役と決定した。

その後、大阪から九州に移され、三池の監獄で服役していたが、恩赦などのために、大正十一年に出獄した。そのとき吹上は三十四歳に

風俗奇譚・総目次

臨時特集号

△二百円▽

（写真）縄の魅惑

（口絵）密林の危機・梅の刺青・

白髪鬼：小田利美

特集・これが異常性欲だ

尻を切られて欲情する変態女

妻の柔肌を自分の名を刺青

女の肌をナメる老窃盗犯

妻に鶏姦を求める男色者

メス犬の欲情に似た淫乱女

変態性欲賛成論

ある変態性欲者の半生

秘帳・新はん婦美の葉屋し

明治性的珍聞史

妊娠十カ月の変態見世物

刺青奇譚・太腿に刺青する女

女ばかりの同性愛クラブ

セックスを实地研究する一群

織田信長はサディストだった

姦通した女にはこんな刑罰

世界各国結婚風俗奇習くらべ

秘具・秘薬あれこれ話

私はムチで打たれると満足

わたしは淫獣の餌食となった

尿道で快感を覚える女

金魚を握り潰し腹を裂く少女

ある輪姦事件

麻薬注射し獣欲を燃やす淫魔

艶妖特集号

△二百円▽

（多色刷）かぎや店先・鈴木春信

（写真）肌の十字架

（口絵）梅の木責め・絶望の断崖

・美しき戦利品：小田利美

特集・サディズムの種々相

鞭打症 緊縛症 刺傷症 殺人

淫楽症 食人症 強姦症 死姦

症 童姦症 汚瀆症 獣姦症

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の變態心理

現代版・蛇淫の怪

刑罰罪人の縄の掛け方

白人女性を征服した黒人男性

愛する女の膚を本の表紙奇譚

縄で縛った歓喜の抱擁

柔肌を切りさいなむ男の愛情

秘本・イタリ出版仮面舞踏会

王妃マユラの虐殺

回教残酷譚・種馬にされた男

明治性的珍聞史（2）

白い肌を焼く燭台の灯

犬のオリの中の裸身の美女

変態演出考

女の黒髪に埋もれて死にたい

妊婦に劣情した強盗強姦事件

縛り上げ騷りものにする快感

犬により快楽を求める女

なっていた。

出獄ただちに次々と少女姦

出獄後も、その淫虐ぶりはいささかも衰えを見せなかった。いま、その犯行を列挙すると、

- ・大正十二年六月、群馬県利根郡沼田町の桑畑の道路を通行中の十二歳の少女を凌辱して、手ぬぐいで絞殺した。
- ・同年八月、長野県小県郡栗村の停車場付近で遊んでいた十五歳の少女を付近の桑畑に連れ込み、伊達巻きで絞めてから凌辱した。
- ・同月、ふたたび群馬県に戻り、吾妻郡小野上村で、十一歳の少女を手ぬぐいで絞めて凌辱した。

これらの犯行後、お茶屋で豪遊し、そのときの情婦といっしょにとった写真が長野県警察の手に入ったところから、それを被害各県に送り、翌十三年六月二十八、九の両日、一斉に非常線を張り、大搜索を行なったが、その付近ではとうとう彼の姿を見いだすことができなかった。

ところが、警視庁管轄内で、吹上佐太郎の手がかりがつかめた。というのは、その年の二月、神田佐久間河岸の大丸運送兼米穀店の米つきに雇われていた男が、近所の少女に凌辱を加え負傷させた事件があった。そのとき外神田署で、その男を取り調べ、ひとまず知人宅へ引き取らせたと逃したのが、吹上佐太郎であると判明した。そこで捜査をすすめ、彼が北豊島郡志村字新坂の飯田六次郎方の土工部屋に立ち回ったところを逮捕された。大正十三年七月二十八日のことである。彼は直ちに群馬県に護送された。

春の増刊号 二百五十円

(妖異・猟奇・艶笑特選讀物25編)

(多色口絵)近衛家の老女村岡
(写真口絵)捕われの白肌・秘画

展覧会

(二色刷口絵)小田利美責め絵集
(グラビア)責められる肌ほか

変態性欲考

猫の怨霊

若い女の生胆をとる老婆

獣婚・女と犬

会員三百人の男色クラブ

魔の十三号室

舌を噛み切られた男

死体を溶かす

女に奪われた「処女」

吸血鬼は実際にいた

実兄と結婚した女の色ざんげ

男女一代・人相ひとり判断

男を十字架にかけ鞭うつ女

酒池肉林に滅んだ皇帝の話

悪魔に肌を許した人妻の話

蛇姫ストリップ

大内山淫乱五人の女官

とかく女は色好みという話

貞操帯のはなし

妻の浮気を告げ口する鸚鵡

全身に男の紋を入墨したお玉

妻の貞操を試験した男の話

毛長夫婦

好色な王様が一本参った話

右は、本誌の既刊分です。各地で好評を博し、売り切れの書店が多いので、その場合には、本社へお申し込みください。それも、残部は少ししかありませんゆえ、お早く願います。

悦虐特集号 二百円

(多色口絵)五彩のサタン

(グラビア)美女緊縛ほか

(口絵)小田利美責め絵集

特集・鞭打の心理と実相

鞭打の心理・鞭打の歴史

鞭打たれる悪魔のイレズミ

鞭打から生まれた愛情

焼け火箸の快楽死

人間と蛇との交情

地獄尼僧院

火あぶり台の女

縛りあげた女の可愛さ

聖女娼婦フアン・ヒルの話

鴉の餌食となった女百六十人

明治性的珍聞史(3)

変態性欲名画館

私は変態的方法で満足する

ピストルを持ったサディスト

夜の淫魔

女の死体に憑かれた男

性毛に関する四つの不思議

情事のサド・マゾ・アベック

伯爵夫人の血風呂

女相撲始末記

私は変態なのだろうか

皮バンドの苦痛からの愛情

男を下僕のように扱う楽しさ

翡翠のかんざし

縛られるとき湧きいでる快さ

裁判の結果、前橋地方裁判所で死刑の判決を受けた。上告したが、大正十五年七月二日、大審院で上告棄却となり、死刑が確定した。

つちかわれた性の異常変質

吹上佐太郎は、もっぱら少女を姦淫の対象に選んだ。それも、長ずるにつれて、ますます変態の度を加え、通常の性行為では満足を得られなかった。彼は常に、異性の秘所をあかず眺め、二時間も三時間もわれを忘れてそれにたわむれていた。そして、興奮の極には、肉体的な接触を行なうのであるが、その場合は決まって、接触するや、瞬間射精に終わるのが常であった。だから彼は、そういう肉体接触を行なわず、むしろ、さわったり、なめたりすることに快感を覚えていたようである。

彼は、絞殺した相手を死に別れ、殺さなかった相手を生き別れといっていた。彼のいうとおり、肉体を自由にさせたものは殺さなかったが、暴れたり、声を出したりすると殺しておいて楽しんだのである。

彼はまた、年ごろの少女のうちでも、赤い腰巻きをしていたものを取りわけ好んだということである。

彼は、その告白の中で、

「私の見る夢は、姦淫をしている夢以外のことはありません。そのほかの夢といえば、空を飛んでいるか、屋根を伝って行くものに限られていました。夢の中の姦淫と同じ状態は経験したことはありません。しかし、夢の中の姦淫の状態が、そのまま現実になったような気のした場合、何度もありました。でも、死に別れた者の夢など、まだ一度も見ただけではありません。被害者に責められたような夢も見ただけ

はありません」

と述べている。

それとしても、十八から三十四歳までの、二十年間近い、楽しかるべき青春時代を獄中で過ごした彼は、性格的にも孤立し、社会的生活を送る能力を奪われてしまったのではなからうか。

そして、色魔、吹上佐太郎が、ゆがめられた生活の中から生まれたのであろう。また、獄中生活の男色行為もまた彼の性的変質をよりいっそう、ゆがめたのではなからうか。

彼は、大正十五年九月二十八日、数奇な運命に幕を下ろして、絞首台の露と消えたのであった。時に、年三十六歳であった。

■本誌ご購入のしおり■

一月分 (1冊)	二〇〇円 (送共)
三月分 (3冊)	五二〇円 (送共)
半年分 (6冊)	一〇〇〇円 (送共)
一年分 (12冊)	一九〇〇円 (送共)

本誌は、直接郵送による領布を主としておりますので、購読ご希望の方は、直接発行所までお申し込みください。月極めの場合は、右のとおり割り引きの特典がございます。

なお、ご送金は、現金書留か小為替にしてくださいと、確実・ご便利でございます。

風俗奇譚 五月号

定価 二〇〇円

昭和三十三年四月二十日印刷
昭和三十三年五月一日発行

編集人 高 倉 一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の一六七

発行所 文献資料刊行会

電話東京(291)二九一八番